

研究活動及びオープンアクセスに 関する調査報告書

2006年3月

国立大学図書館協会国際学術コミュニケーション委員会

国立情報学研究所

はじめに

国立大学図書館協会国際学術コミュニケーション委員会は、これまで、ARL (Association of Research Libraries) における SPARC 活動と連携する SPARC Japan 活動に対して、大学図書館の側から貢献する際の結節点としての役目を果してきており、とくに、図書館によるアドボカシー活動の拠点となってきた。近年、これらの活動の一環として、まさにアドボカシー活動の対象である、大学教員・研究者における学術コミュニケーションの問題に関する認識を深めることにより、この活動をより効果的にできるであろうという認識が国際的にもひろまりつつあり、とくに、イギリスの JISC (Joint Information Systems Committee) による一連の調査は、オープンアクセスや機関リポジトリに関する認識が研究者のあいだで相当程度ひろがりつつあることを示すことになっている。

今回、本委員会が国立情報学研究所の支援を得て行なったこの調査は、このような動向のなかで日本の研究者が、学術コミュニケーションの動向をどのように意識し、どのように感じているかということを知ることは、日本の大学図書館が少なからぬ役割を果たす学術情報コミュニケーションの日本における状況を改善していくために重要な役割をもっていると考えている。とくに、この調査にあたっては、イギリスの JISC が実施した研究者を対象とする調査をきっかけとしてこともあり、同調査を参考にした点が多い。また、もともと研究の世界は国境をもたないものであり、また、学術情報の流通も国境を越えて行なわれてきた。近年のインターネットの普及が学術情報の流通に対して与えた影響は甚大なものであり、その国際性が重要であることから、本調査についても、英文版も同時に作成して、日本国外の関係者にとっても利用が可能となるものとした。

そのようなインターネット時代における学術情報流通は、学術情報流通の実態だけでなく、その基本的な考え方にも変更を迫っており、大学図書館だけでなく、中間的な存在である取次代理店、予約代理店や出版産業そのもの、そして、研究者の生活とそれを支える大学および研究助成の財政構造まで及んで見直すことを要求している。このなかで、大学という共通の環境に位置する研究者と大学図書館とがこの状況に関する認識を共有することが不可欠であることは多言を要しない。この一步としてこの報告書が役立つことを期待したい。

なお、ここに報告する調査と同時期に本協会では、やはり国立情報学研究所と協力して研究者の団体である「学会」に対して、それが刊行する定期刊行物に関する主として著作権にかかわる調査を実施している。あわせて参照されることも期待したい。

本調査にあたっては、たびたび言及したように、国立情報学研究所からの支援が不可欠であった。この場を借りて、同研究所とりわけ開発・事業部コンテンツ課の関係者に対して感謝したい。また、本協会の調査は、会員館の職員の自発的な協力によってなりたっているが、それは、それぞれの館からの配慮なしには不可能であるので、本委員会に委員を派遣いただいている各館に対する心からの感謝を述べたい。

国立大学図書館協会

国際学術コミュニケーション委員会委員長

土 屋 俊

目次

要約	i
調査の概要	1
調査結果の概要	3
調査結果	10
I 対象者属性	11
II 研究情報の収集と研究成果の発表について	13
2-1 インターネットによる論文等の入手状況	13
2-2 入手の容易度	15
2-3 利用検索エンジン	16
2-4 オンライン書誌データベースや電子ジャーナルの利用頻度	18
2-5 研究成果を投稿・発表する際の動機	20
2-6 年間の投稿・発表論文数	22
2-7 最近3年の論文の本数	24
2-8 最近3年の著書数	27
2-9 論文の保存形式	28
III オープンアクセスについて	30
3-1 認知度	30
3-2 オープンアクセスに対する注意喚起の状況	32
3-3 オープンアクセスジャーナルの認知度	33
3-4 オープンアクセスジャーナルへの投稿・発表の有無	35
3-5 今後オープンアクセスジャーナルに発表する可能性	36
3-6 オープンアクセスジャーナルに発表する理由	38
3-7 オープンアクセスジャーナルに発表しない理由	40
3-8 出版手数料	41
3-9 出版手数料の財源	43
3-10 「契約条件としてのオープンアクセスジャーナルへの発表」に対する考え	44
3-11 オープンアクセスジャーナル論文のアーカイブの責任主体	45
3-12 オープンアクセスジャーナル出版の学術出版システムへの影響	46
3-13 オープンアクセスジャーナル出版の学協会出版事業への影響	47
3-14 学術雑誌の役割としての重要性について	48
IV セルフ・アーカイビング／リポジトリについて	50
4-1 セルフ・アーカイビングの経験	50
4-2 セルフ・アーカイビングの時期	53
4-3 セルフ・アーカイビングを行った動機	53
4-4 オープンアクセスの提供方法としてのセルフ・アーカイビングの認知度	54
4-5 セルフ・アーカイビングを最初に知ったきっかけ	55
4-6 最新論文の著作権者	56
4-7 リポジトリへのデポジット要求に対する態度	68
4-8 デポジットする際に気になる点	60
Appendix	62

要 約

今回の調査は、2005 年 12 月に行われ、日本の研究者の研究活動、データベース等の使用傾向、オープンアクセスジャーナル（以下、OAJ）やセルフ・アーカイビングなど、オープンアクセス（以下、OA）にかかわる概念の認知度およびそのような方法での論文の発表に対する意見について調べたものである。回答者数は 613 人で、すべて国立大学法人及び大学共同利用機関法人の教員（研究者）である。この調査の結果から、すでに他の先進国の研究者のあいだではよく知られるようになっている OA をはじめとする最近の学術情報流通の展開に関して、わが国の研究者がほとんど知識をもたず、また対応に関する準備ができていないことが推測される。

OA について知識をもつものは 29%である。A.Swan's JISC Report^{注1)}では、OAJ への投稿経験のない研究者においても、OA に関する知識をもつものは 60%を超えていることから、わが国の研究者がこの問題について十分な知識をもっていないことが明らかである。

今後 3 年以内に OAJ に論文を発表する可能性のあると回答した研究者は、17%にとどまるが、発表する理由について、回答者の半分以上が、すべての読者に自由なアクセスを提供するという原則が非常に大事であると回答している。

逆に、OAJ で発表しないと思う、と回答した研究者(21%)は、その最大の要因として、専門分野における OAJ についてよく知らないので、論文を投稿するほどの確信が持てない、を挙げている。A.Swan's JISC Report においても、OAJ への投稿経験のない研究者では同様の認識が示されている。

出版経費を支払うための資金は、研究助成金から支払われるべきであると考えている研究者がほとんどである。また、研究助成金の契約条件によりその研究結果を OAJ で発表することを求められた場合、半分以上（69%）の回答者が、そのような条件に従うとしている。

OA の普及によって学術出版システム及び学協会の出版事業が崩壊する可能性が高いと回答した研究者は 20%程度であり、40% 以上の研究者は分からないとしている。また学術雑誌の役割のうち、ピアレビューや品質の維持などが特に重要な要素としてあげられた。

セルフ・アーカイビングについて、回答者のうち、ウェブページ、機関リポジトリ、あるいは主題リポジトリのいずれかに、最近の 3 年で 1 回でもデポジットしたことがあると答えた人は、全体の 20%にとどまり、また、セルフ・アーカイビングを行うことによって、自分の研究成果に対する OA が可能になることを知らない研究者が大半である。A. Swan's 2nd Report^{注2)}では、ほとんど半数(49%)の回答者が過去 3 年間に少なくとも 1 本の論文をセルフ・アーカイビングした経験があると報告している。

しかし、雇用者や研究助成財団による論文の機関リポジトリ、あるいは主題リポジトリへのデポジットの義務化にはほぼ半数（46%）の研究者が喜んで従うとし、嫌々ではあるが従うとする者(12%)を加えると全体の 58%になるが、A. Swan's 2nd Report では同様の問いに対して、81%の回答者が喜んで従うとし、不本意ではあるが従う(13%)を加えると、約 94%が要求に従うとしている。

デポジットをする際に気になる点としては、デポジット経験者の約 3 分の 1 が著作権の問題を最も気にすると回答した。デポジット経験のない研究者の半数が、リポジトリに関する情報が不足している（41%）を最も気になる点として回答した。

研究者が研究成果を発表する最大の理由は、研究結果を他の研究者に伝えることであり、研究分野に影響を及ぼすために発表しているといえる。また、多くの研究者は、研究のための情報収集に、WWW 検索エンジン(Google など)、書誌データベースや電子ジャーナルを利用しており、約 58%の研究者は、インターネットを介せば研究に必要な論文や記事を、入手できると答えている。

注 1 A. Swan's JISC Report:

Swan, Alma and Brown, Sheridan (2004) Report of the JISC/OSI open access journal authors survey.

http://www.jisc.ac.uk/uploaded_documents/JISCOAreport1.pdf

<http://cogprints.org/4125/>

注 2 A. Swan's 2nd Report:

Swan, Alma and Brown, Sheridan (2005) Open access self-archiving : An author study May 2005

[http://www.keyperspectives.co.uk/openaccessarchive/reports/Open Access II \(author survey on self archiving\) 2005.pdf](http://www.keyperspectives.co.uk/openaccessarchive/reports/Open_Access_II_(author_survey_on_self_archiving)_2005.pdf)

<http://cogprints.org/4385/>

調査の概要

調査の概要

1. 調査の目的

研究者の研究活動及びオープンアクセスに関する知識、経験について調査し、国立大学図書館が今後機関リポジトリ構築の取組を進めていく上での基礎資料を得ることを目的として実施した。

2. 調査の設計

(1) 調査の対象

国立大学法人および大学共同利用機関法人に所属する教員

(2) サンプル数

2000 人

(3) 抽出方法

「2004 年全国大学職員録 国立大学編」（廣潤社発行）の国立大学法人および大学共同利用機関法人に所属する教員（但し、外国人教員や客員教員は除く）の中から、単純無作為抽出を行った。

(4) 回収状況

有効回収数：613 票

有効回収率：30.7%

(5) 調査時期

平成 17 年 12 月

(6) 調査方法

郵送調査法

3. 報告書をみるにあたって

- ・図表中の%は、小数第一位を四捨五入し、整数表示としている。そのため、合計が 100%にならない場合もある。
- ・グラフの%数値の表示において、0%の場合は、数値の表示は行っていない。
- ・調査結果の「専門分野」については、日本学術会議の第一部～第七部の分類による。
- ・調査対象者は「教員」であるが、報告書中においては「研究者」と記す。

調査結果の概要

調査結果の概要

1. 研究情報の収集と研究成果の発表について

- ◆インターネットを介して研究のために必要な論文や記事を“入手できる”58%。但し、専門分野による違いが大きい。
- ◆利用検索エンジンは「Google」と「PubMed」の2つが中心。
- ◆オンライン書誌データベースや電子ジャーナルを“高利用層”は56%。専門分野別では、理学と医学・歯学・薬学の利用率が高い。
- ◆研究成果を投稿・発表動機は「研究成果を広く知らせるため」と「研究業績を伸ばすため」の2つが中心。
- ◆年間の投稿・発表論文数の平均は3.2本。
- ◆最近3年間の「国内雑誌に和文」での平均発表論文数は3.7本、「海外雑誌に欧文」での平均発表論文数は5.8本。平均著書数は1.0冊。
- ◆論文の保存形式は、「MS Word」（72%）と「PDF」（56%）が中心。

研究情報の収集と研究成果の発表については、専門領域によりかなり大きな違いがみられる

- ・研究のために必要な論文や記事を、インターネットを介して「すべて入手できる」（3%）と「ほとんど入手できる（一部入手できない）」（55%）を合わせると約60%が“入手できる”としている。一方、「入手できないことが多い（一部入手できる）」（30%）と「ほとんど入手できない」（3%）と“入手できない”とする研究者も3分の1を占める。専門分野別では、理学、工学、農学、医学・歯学・薬学では60%前後が“入手できる”としているのに対し、文学・哲学・教育学・心理学・社会学・史学（以下「文学等」という。）では“入手できる”は23%にとどまり、“入手できない”が55%と多く、「インターネットを介して入手することはない」も20%ある。
- ・なお、“入手できる”と回答した研究者の83%は「比較的容易に入手できている」としている。
- ・インターネットで研究論文や参考文献を検索するときに利用するWWW検索エンジンについては、「Google」（43%）と「PubMed」（35%）が40%前後で最も多くなっている。
- ・研究のための情報収集に利用するオンライン書誌データベースや電子ジャーナルの利用頻度は、「ほぼ毎日」（19%）と「週に1回以上」（37%）を合わせた“高利用層”は56%と半数を超えている。専門分野別にみると、理学と医学・歯学・薬学で“高利用層”が7割強と多くなっている。一方、「文学等」での“高利用層”は22%と少ない。
- ・研究成果を投稿・発表する際の動機については、「研究成果を広く知らせるため」と「研究業績を伸ばすため」としている研究者が90%強と大多数を占めている。「直接的な報酬のため」とする研究者はほとんどみられない。「助成金を獲得する可能性を増やすため」や「研究分

野における地位向上のため」とする研究者は60%強となっている。

- ・年間の投稿・発表論文数は、「2～3本」が46%と約半数を占め、「1本以下」が26%、「4～5本」が17%となっている。平均論文数は3.2本である。
- ・最近3年間の言語別投稿状況をみると、「国内雑誌に和文」は「3本以下」が54%と半数を超えるが、「4本以上」も26%あり、平均本数は3.7本となっている。「海外雑誌に欧文」は「6本以上」が25%と4分の1を占め、平均本数は5.8本となっている。
- ・最近3年間の論文の発表先については、「国内誌」「海外誌」の両方とする研究者が54%と半数を占めている。専門分野別にみると、工学と医学・歯学・薬学では60%強が両方に発表しているが、「文学等」では「国内誌のみ」が71%と多くなっている。
- ・最近3年の著書の数については、「0冊」が半数を占めるが、「1冊」が21%、「2～3冊」が17%となっており、平均著書数は1.0冊となっている。
- ・論文を電子的に保存する場合の形式は、「MS Word」(72%)と「PDF」(56%)の2つが中心となっている。専門分野別にみると、「PDF」は理学と工学では70%台と多いが、「文学等」では21%と少ない。

2. オープンアクセス

- ◆オープンアクセスの概念の認知度は 29%。
- ◆オープンアクセスについて所属機関や図書館から注意を喚起されたは 13%。
- ◆オープンアクセスジャーナルを刊行している団体や刊行されている雑誌タイトルの認知度は 15%。
- ◆最近3年間におけるオープンアクセスジャーナルへの投稿・発表経験者は7%。
- ◆今後3年以内にオープンアクセスジャーナルに論文を発表する可能性が「ある」は 17%。
- ◆オープンアクセス出版の普及による既存の出版システムへの影響は「わからない」が 44%。
- ◆学術雑誌の役割として重視されているのは「ピアレビュー」「一定の品質を有する論文を一覧できるように集めること」「一定の品質を維持するための論文の取捨選択」の3つが上位。



**研究者のオープンアクセスについての認知・理解度は低く、
今後、啓蒙及び理解促進が求められる**

- ・オープンアクセスの概念を以前から「知っている」は 29%にとどまり、「知らない」が 62%と多くなっており、年間の投稿・発表論文数が多い人ほど認知度は高い。
- ・最近1年以内に、オープンアクセスについて所属機関や図書館から注意を喚起されたことが「ある」は 13%と少なく、「ない」が 86%と多数を占めている。また、オープンアクセスの概念を認知している研究者のうち、注意を喚起されたことが「ある」は約 25%である。
- ・オープンアクセスジャーナルを刊行している団体や刊行されている雑誌のタイトルの認知度についても「知っている」は 15%と少なく、「知らない」が 84%と多数を占めている。
- ・最近3年間にオープンアクセスジャーナルに原稿を投稿、あるいは論文を発表したことが「ある」は 7%と1割を切っており、「ない」が 7割を占めている。また、約4人に1人が「わからない」としている。
- ・今後3年以内にオープンアクセスジャーナルに論文を発表する可能性が「ある」は 17%、「ない」が 21%、「わからない」が 62%となっている。ただし、年間の投稿・発表論文数が「4本以上」の研究者は可能性があるとの回答が 24~30%みられる。
- ・今後オープンアクセスジャーナルに論文を発表する可能性が「ある」あるいは「わからない」と回答した研究者のオープンアクセスジャーナルで研究成果を発表してもよいと思った理由をみると、「すべての読者に自由なアクセスを提供するという原則があるから」が 58%と最も多くなっている。
- ・今後オープンアクセスジャーナルに論文を発表する可能性が「ない」あるいは「わからない」と回答した研究者のオープンアクセスジャーナルで研究成果を発表したくないと思った理由をみると、「専門分野におけるOAジャーナルについてよく知らないので論文を投稿するほどの確信がもてないから」が 55%と最も多く、ついで「発表すべきOAジャーナルを特定できないから」(38%)が多く、オープンアクセスジャーナルについての知識不足が主な理由となっている。

- ・オープンアクセスの概念を知っている研究者のオープンアクセスジャーナル、団体の認知率は 34%にとどまっており、投稿・発表経験率も 16%と少ない。また、今後の投稿・発表の可能性があるとする研究者は 30%にとどまっており、オープンアクセスの概念認知がオープンアクセスジャーナルへの投稿・発表行動に十分に結びついていない現状がうかがえる。

		オープンアクセス ジャーナルのタイ トル・団体を 知っている	オープンアクセス ジャーナルへ 投稿・発表した ことがある	今後オープンアク セスジャーナルに 論文発表の可能性 がある
全体		15%	7%	17%
オープン アクセス の認知度	知っている	34%	16%	30%
	知らない	7%	3%	11%

- ・オープンアクセスジャーナルに論文を発表するために支払える出版手数料としては、「500ドル未満」が 45%と約半数を占めている。「払わない」とする研究者は 11%にとどまる。出版経費を支払うための資金の財源については、「研究助成金」が 65%と最も多く、ついで「部局の予算」(41%)、「図書館あるいは機関の予算」(36%) となっている。
- ・研究助成金の契約条件によりその研究成果をオープンアクセスジャーナルで発表することを求められた場合、「喜んでそのような条件に従う」が 50%、「嫌々であるがそのような条件に従う」が 19%となっており、この両者を合わせた 69%が“条件に従う”としている。また、「そのような条件は受入れられないので、別の財源をさがす」は 3%にとどまった。
- ・オープンアクセスジャーナルに発表された論文のアーカイビングの責任主体については、「オープンアクセスジャーナルの出版社」が 80%と多数を占めている。
- ・オープンアクセス出版の普及により既存の学術出版システムが崩壊するかもしれないという意見については、「崩壊する可能性が高いと思う」が 21%に対し、「崩壊する可能性は低いと思う」が 33%とやや多くなっている。全体的には「わからない」が 44%と最も多くなっている。学協会による出版事業についても「崩壊する可能性が高いと思う」が 18%に対し、「崩壊する可能性は低いと思う」が 34%とやや多くなっている。但し、学術出版システムへの影響と同様「わからない」が 44%と最も多くなっている。
- ・学術雑誌の役割について、重視する項目は、「ピアレビュー」「一定の品質を有する論文を一覧できるように集めること」「一定の品質を維持するための論文の取捨選択」の“重視率”(「非常に重要」と「重要」の合計比率)は 8 割以上と多数を占めている。

3. セルフ・アーカイビング／リポジトリについて

- ◆セルフ・アーカイビングを「行ったことがある」は 20%。
- ◆セルフ・アーカイビングを行っている研究者の「オープンアクセスを行っているサイトにセルフ・アーカイビングをすることで自分の研究成果に対するオープンアクセスが可能になる」ことの認知度は 13%。
- ◆「機関リポジトリや主題リポジトリの存在を知らなかった」とする研究者は 62%。
- ◆Green Publisher（著者によるセルフ・アーカイビングを認める出版者）への発表論文のリポジトリへのデポジットについては「喜んでデポジットする」は 46%、「嫌々であるがデポジットする」は 12%。
- ◆デポジットする際に気になるのは「リポジトリに関する情報が不足」が 39%。



**研究者のリポジトリの存在についての認知や理解度も低い。
セルフ・アーカイビングを行っている研究者は 5人に1人
にとどまる**

- ・最近3年間にプレプリント及びポストプリントのデポジットをしたことが「ある」とする研究者の割合は以下の通りであり、プレプリント、ポストプリントのいずれかをデポジットしている研究者は 20%となっている。専門分野別では、プレプリントは、経済学・商学・経営学は「所属部署のウェブあるいは機関リポジトリに」に「1～3回」公開しているとの回答が 25%とやや多くなっている。ポストプリントは、農学では「自分のウェブページに」に「1～3回」公開しているが 15%とプレプリントに比べると多くなっている。また、「文学等」では「所属機関のウェブあるいは機関リポジトリに」は「1～3回」が 13%みられるほか、回答者数は少ないが、経済学・商学・経営学では「所属部署のウェブあるいは機関リポジトリに」に「1～3回」公開しているが 26%あり、「自分のウェブページに」「主題リポジトリに」に公開しているとの回答も少なくない。

	プレプリント	ポストプリント
自分のウェブページに	4%	9%
所属機関のウェブあるいは 機関リポジトリ	3%	8%
主題リポジトリ	3%	3%

- ・デポジットしたことがある研究者の時期については“3年前以内”が 54%と半数を占め、動機については「自ら意欲的におこなった」が 53%と半数を超える。専門分野別にみると、理学や工学では「4～5年前」と「6年以上前から」を合わせると 50%前後となっている。
- ・プレプリント、ポストプリントのいずれもデポジットしたことがない研究者のうち「オープンアクセスを行っているサイトにセルフ・アーカイビングをすることで自分の研究成果に対するオープンアクセスが可能になる」ことを知っている研究者は 13%と少ない。

- ・全体として、機関リポジトリ、主題リポジトリの存在を「知らない」とする研究者は 62%と多数を占めている。
- ・自身の最新論文の著作権について「わからない」とする研究者は 11%いる。自分の最新論文の著作権者としては「雑誌出版社」をあげる研究者が 60%と多数を占め、「自分自身」は 23%にとどまっている。
- ・雇用者や助成団体から、Green Publisher の出版する雑誌に発表した論文をリポジトリにデポジットすることを要求された場合、「喜んでデポジットする」が 46%、「嫌々であるがデポジットする」が 12%であり、この両者を合わせた 58%が“デポジットする”と回答している。一方、「わからない」と回答を保留している人も 36%いる。
- ・デポジットしようとする際に気になる点としては、「リポジトリに関する情報が不足」(39%)と「著作権の問題が心配」(35%)が 30%台と最も多く、ついで「登録作業が面倒だと思う」(28%)、「何を登録すれば良いかわからない」(22%)が続いている。デポジットの経験有無別では、デポジットを行ったことがある人では「リポジトリに関する情報が不足」「何を登録すれば良いかわからない」との回答は少なくなっている。
- ・オープンアクセス概念の認知度別にセルフ・アーカイビングやリポジトリとの関係をみたのが以下の表であり、オープンアクセス概念を知っているでも「オープンアクセスを行っているサイトにセルフ・アーカイビングすることで自分の研究成果に対するオープンアクセスが可能になることを知っている」を知っている人は少なく、「機関リポジトリあるいは主題リポジトリの存在を知らない」人も多い。

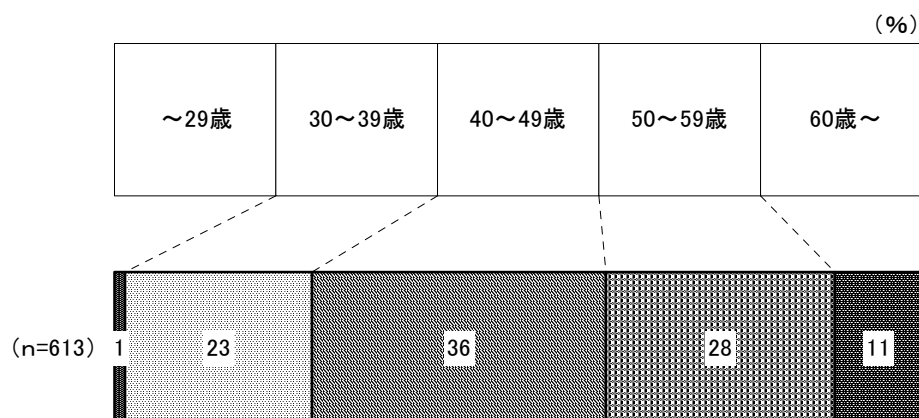
		セルフ・アーカイビングを行ったことがある比率	オープンアクセスを行っているサイトにセルフ・アーカイビングすることで自分の研究成果に対するオープンアクセスが可能になることを知っている	機関リポジトリあるいは主題リポジトリの存在を知らない
全体		20%	13%	62%
オープンアクセス概念	知っている	27%	22%	49%
	知らない	16%	6%	68%

調査結果

I 対象者属性

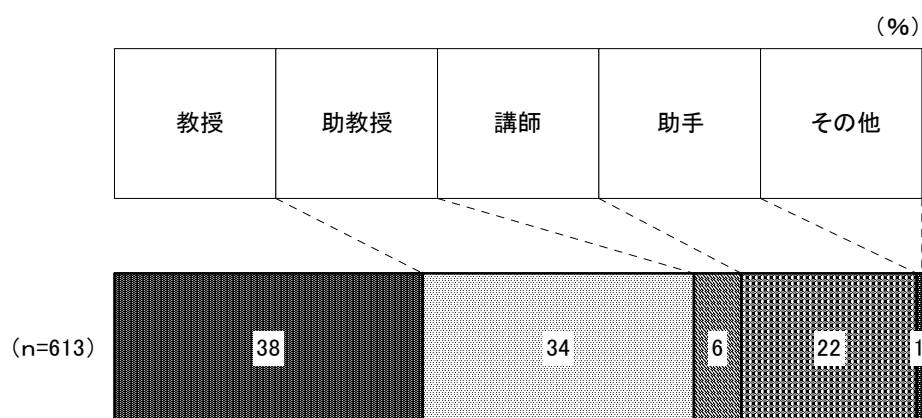
1. 年齢

- ・回答者の年齢は「40～49 歳」が 36%と最も多く、ついで「50～59 歳」(28%)、「30～39 歳」(23%)となっている。



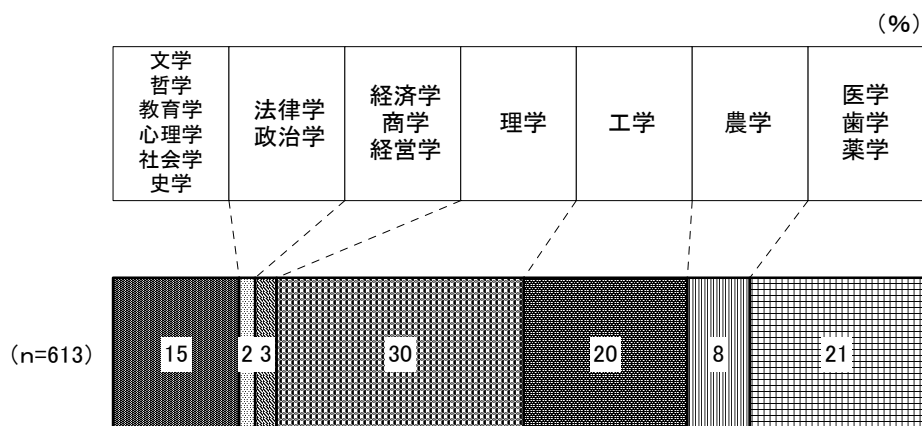
2. 役職

- ・回答者の役職は「教授」が 38%、「助教授」が 34%、「助手」が 22%となっている。



3. 専門分野

- ・専門分野は「理学」が30%と最も多く、ついで「医学・歯学・薬学」(21%)、「工学」(20%)、「文学・哲学・教育学・心理学・社会学・史学」(15%)となっている。

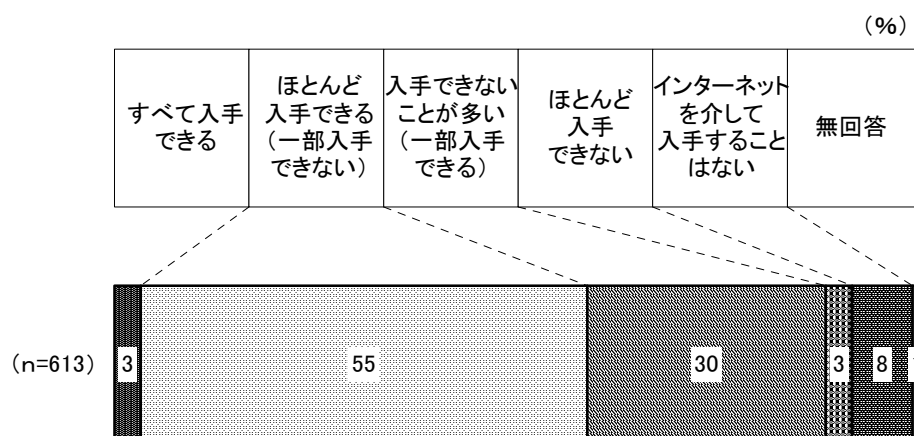


II 研究情報の収集と研究成果の発表について

2-1 インターネットによる論文等の入手状況

- 研究のために必要な論文や記事を、インターネットを介して入手する場合の入手状況については、「ほとんど入手できる（一部入手できない）」が55%を占め、「すべて入手できる」（3%）を合わせると58%は“入手できる”と回答している。一方、「入手できないことが多い（一部入手できる）」（30%）、「ほとんど入手できない」（3%）を合わせた“入手できない”との回答も33%と3人に1人の割合でみられる。

設問 4 研究のために必要な論文や記事を、インターネットを介して入手する場合（たとえば、出版社の電子ジャーナルサイトや Google 等の検索エンジンなどから）、次のどれが当てはまりますか。（1つだけ○印）



- ・年齢別にみると、49 歳以下では“入手できる”との回答は 60%前後あり、50 歳以上をやや上回っている。なお、60 歳以上では「インターネットを介して入手することはない」が 26%と多くなっている。
- ・専門分野別にみると、理学、工学、農学、及び医学・歯学・薬学では“入手できる”が 60%前後と多くなっているのに対し、「文学等」では“入手できる”は 23%にとどまり、“入手できない”が 55%と多く、「インターネットを介して入手することはない」も 20%ある。
- ・最近 3 年間の論文の投稿・発表先別にみると、海外誌にのみ投稿している人、国内誌・海外誌両方に投稿している人では“入手できる”が 70%前後を占めるのに対し、国内誌のみに投稿している人では 34%にとどまり、“入手できない” 47%、「インターネットを介して入手することはない」 19%と多くなっている。

(%)

		n数	すべて 入手 できる	ほとんど 入手できる (一部入手 できない)	入手でき ないことが 多い (一部入手 できる)	ほとんど 入手 できない	インター ネットを 介して入手 すること はない	無回答
全体		613	3	55	30	3	8	1
年齢	39 歳以下	150	2	△ 61	△ 35	1	▼ 1	0
	40～49 歳	223	2	57	31	4	4	1
	50～59 歳	174	5	▼ 50	28	4	11	2
	60 歳以上	66	6	▼ 50	● 17	2	☆ 26	0
専門分野	文学等	95	2	★ 21	☆ 47	△ 8	○ 20	1
	法律学・政治学	12	0	★ 8	▼ 25	☆ 33	☆ 25	△ 8
	経済学・商学・経営学	16	0	★ 25	☆ 56	0	○ 19	0
	理学	186	2	☆ 74	▼ 21	1	▼ 2	1
	工学	123	3	54	28	4	9	2
	農学	47	△ 11	55	26	0	9	0
	医学・歯学・薬学	131	5	△ 63	29	0	▼ 2	1
最近 3 年の 論文の投稿・ 発表先	国内誌のみ	155	3	★ 31	○ 41	6	○ 19	1
	海外誌のみ	110	5	○ 68	▼ 22	2	▼ 2	2
	両方	328	3	△ 64	26	2	▼ 3	1

(注)専門分野の「文学等」は「文学・哲学・教育学・心理学・社会学・史学」

☆は全体より 15%以上高い数値 ★は全体より 15%以上低い数値

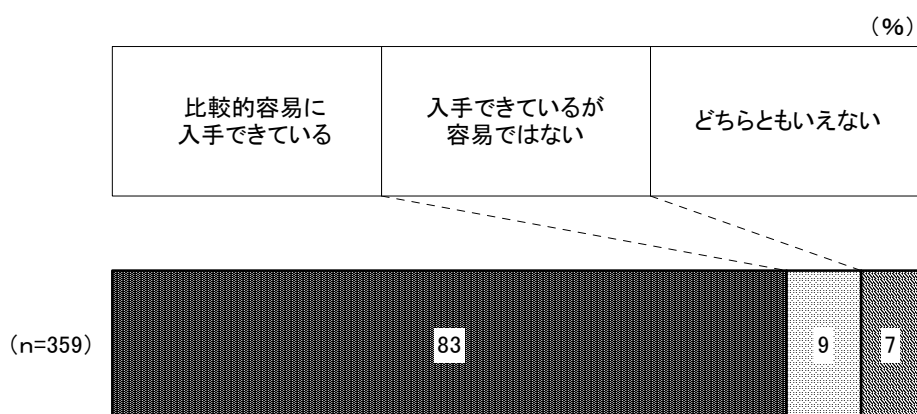
○は全体より 10～14%高い数値 ●は全体より 10～14%低い数値

△は全体より 5～9%高い数値 ▼は全体より 5～9%低い数値

2-2 入手の容易度

- ・研究のために必要な論文や記事を、インターネットを介して「すべて入手できる」「ほとんど入手できる（一部入手できない）」と回答した人に、容易に入手できているか質問したところ、「比較的容易に入手できている」が83%と多数を占めている。

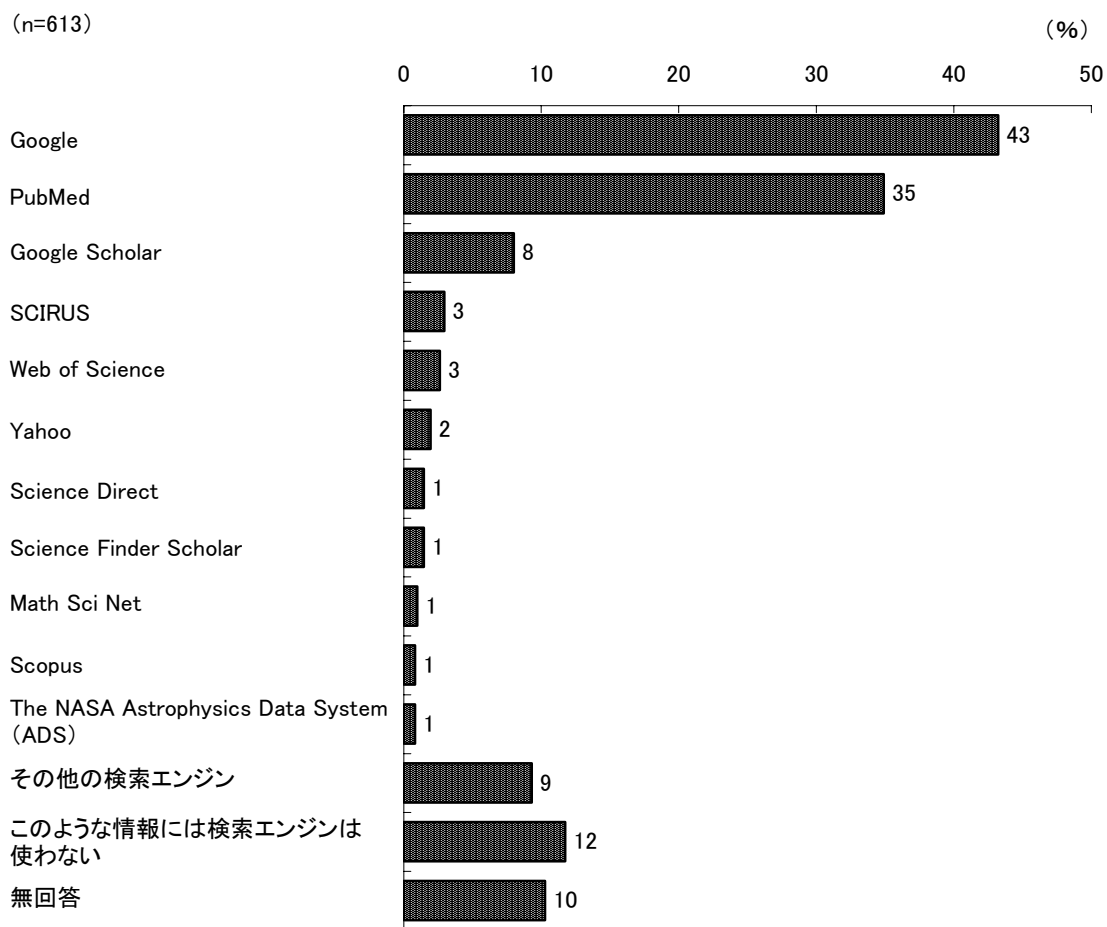
設問 4-1（設問 4 で「1. すべて入手できる」「2. ほとんど入手できる（一部入手できない）」と答えた方に）
容易に入手できていますか。（1 つだけ○印）



2-3 利用検索エンジン

- ・インターネットで研究論文や参考文献を検索するときに利用するWWW検索エンジンは、「Google」(43%)と「PubMed」(35%)の2つが40%前後で最も多くなっている。

設問5 インターネットで研究論文や参考文献を検索するとき、どのようなWWW検索エンジン(無料)を使用しますか。(あてはまるものすべてに○印)



(注)大学等との契約により利用可能な有料データベース(Web of Science(Thomson Scientific))や電子ジャーナル(Science Direct(Elsevier Science, B.V.)など)が回答に含まれている。

- ・ 検索エンジンの利用有無を属性別にみたのが、以下の表である。
- ・ 年齢別にみると、49 歳以下では「検索エンジンを利用する」が 80%を超えているが、50～59 歳では 71%、60 歳以上では 61%にとどまっている。
- ・ 専門分野別にみると、医学・歯学・薬学では「検索エンジンを利用する」が 95%と圧倒的多数を占めている。
- ・ 最近 3 年間の論文の投稿・発表先別にみると、海外誌のみに投稿している人と国内誌・海外誌の両方に投稿している人では「検索エンジンを利用する」が 80%台と多いが、国内誌のみに投稿している人では 64%と少ない。

(%)

		n数	検索 エンジン を利用する	このような 情報には検索 エンジン は使わない	無回答
全体		613	78	12	10
年齢	39 歳以下	150	△ 87	10	▼ 3
	40～49 歳	223	△ 83	12	▼ 5
	50～59 歳	174	▼ 71	13	△ 16
	60 歳以上	66	★ 61	11	☆ 29
専門分野	文学等	95	● 65	13	○ 22
	法学・政治学	12	★ 58	△ 17	☆ 25
	経済学・商学・経営学	16	★ 56	△ 19	☆ 25
	理学	186	82	13	▼ 4
	工学	123	● 68	△ 18	14
	農学	47	74	15	11
	医学・歯学・薬学	131	☆ 95	● 1	▼ 4
最近 3 年の論文の 投稿・発表先	国内誌のみ	155	● 64	14	○ 23
	海外誌のみ	110	△ 86	11	▼ 3
	両方	328	△ 84	11	6

(注)専門分野の「文学等」は「文学・哲学・教育学・心理学・社会学・史学」

☆は全体より 15%以上高い数値 ★は全体より 15%以上低い数値

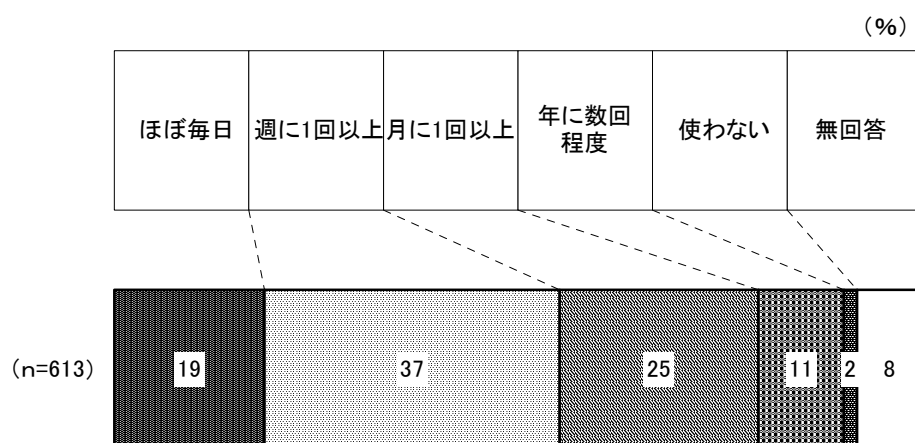
○は全体より 10～14%高い数値 ●は全体より 10～14%低い数値

△は全体より 5～9%高い数値 ▼は全体より 5～9%低い数値

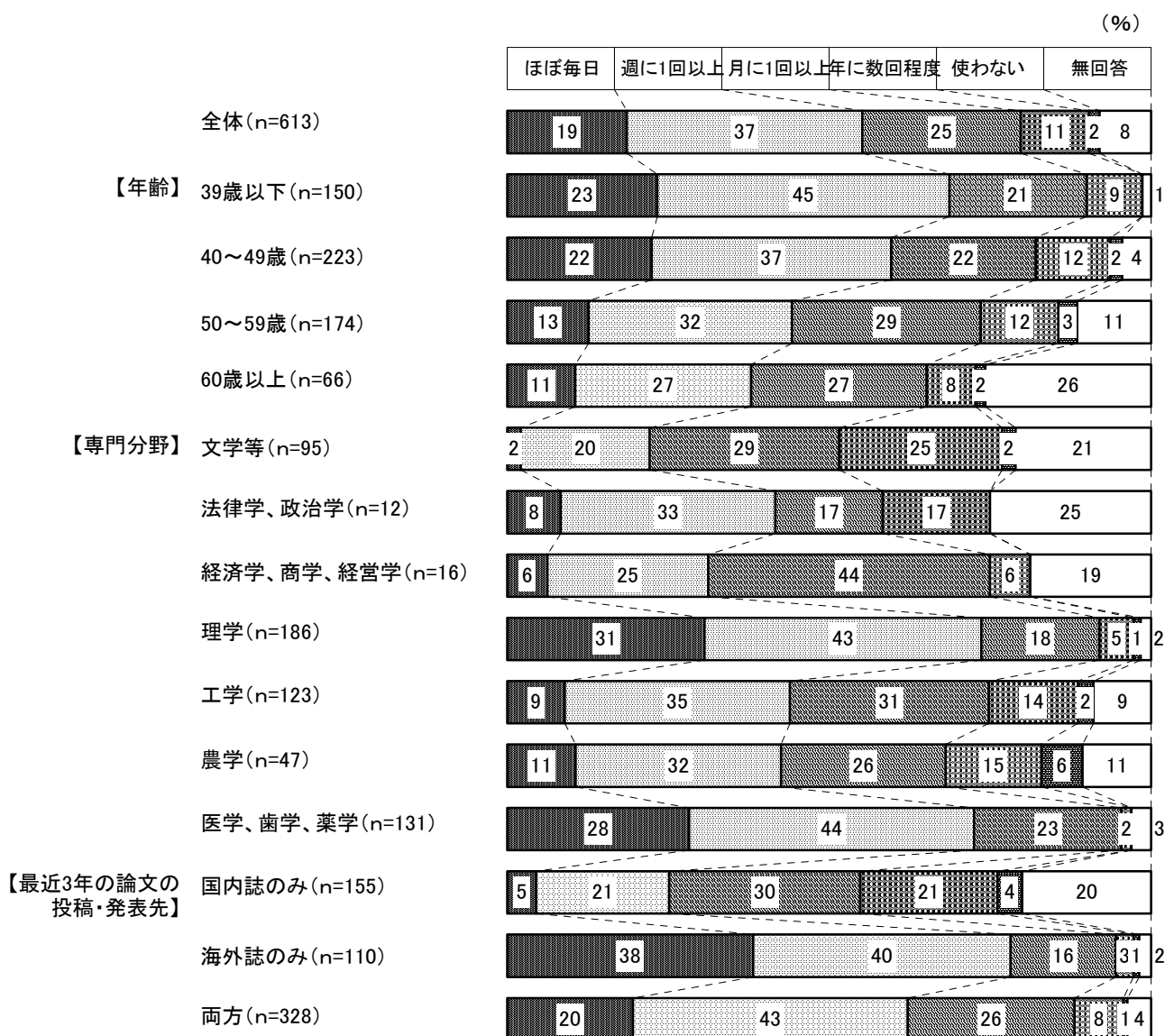
2-4 オンライン書誌データベースや電子ジャーナルの利用頻度

- ・研究のための情報収集に利用するオンライン書誌データベースや電子ジャーナルの利用頻度は、「週に1回以上」が37%と最も多く、「ほぼ毎日」(19%)を合わせた“高利用層”は56%と半数を超えている。

設問 6 研究のための情報収集に、オンライン書誌データベースや電子ジャーナルはどのくらいの頻度で使いますか。(1つだけ○印)



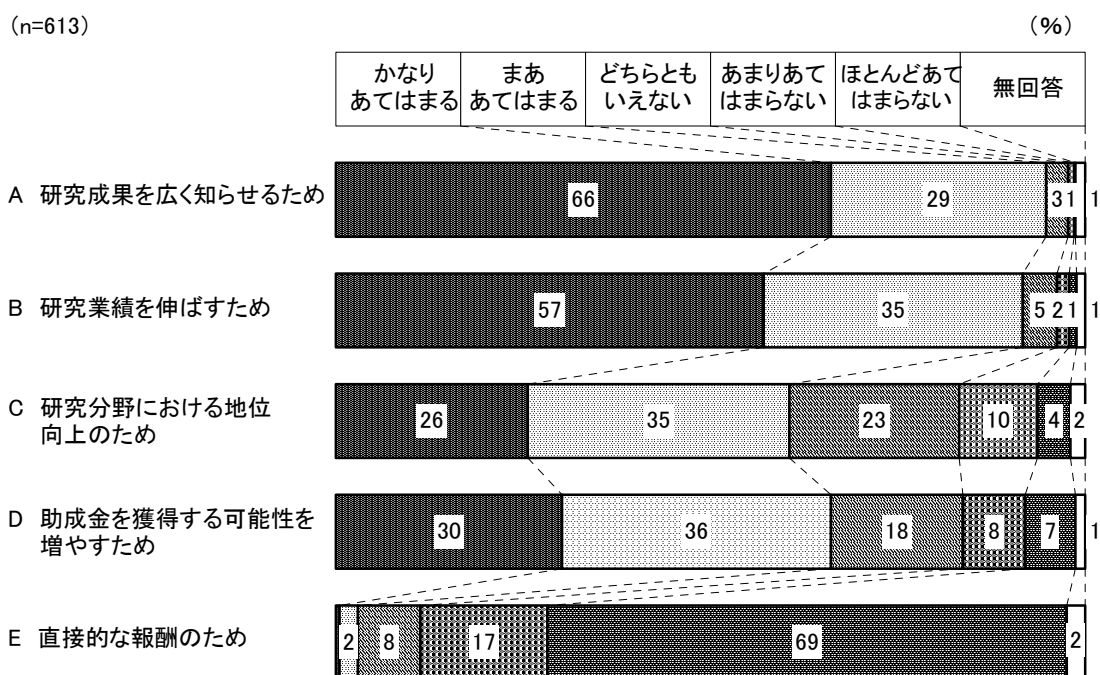
- ・年齢別にみると、年齢が若い研究者ほど「ほぼ毎日」や「週に1回以上」の“高利用層”が多くなっている。
- ・専門分野別にみると、理学と医学・歯学・薬学で「ほぼ毎日」が約3割と多く、「週に1回以上」を合わせた“高利用層”は7割強となっている。一方、「文学等」の“高利用層”は22%と少なく、「年に数回程度」が25%と4人に1人の割合となっている。
- ・最近3年間の論文の投稿・発表先別では、国内誌のみに投稿している人の場合、“高利用層”は26%と少ないが、海外誌のみに投稿している人は78%、国内誌・海外誌の両方に投稿している人は63%と多数を占めている。



2-5 研究成果を投稿・発表する際の動機

- ・研究成果を投稿・発表する際の動機をみると、「研究成果を広く知らせるため」と「研究業績を伸ばすため」については“あてはまる”（「かなりあてはまる」と「まああてはまる」の合計比率）とする人が9割以上と大多数を占めている。
- ・「助成金を獲得する可能性を増やすため」と「研究分野における地位向上のため」が“あてはまる”とする人も6割以上みられるが、「直接的な報酬のため」については“あてはまらない”（「ほとんどあてはまらない」と「あまりあてはまらない」の合計比率）が86%と大多数を占めている。

設問 7 研究成果を投稿・発表する際の動機には、次のような項目があげられますが、あなたにとってこれらの動機はどの程度あてはまりますか。A～Eの項目についてそれぞれお答えください。



- ・「直接的な報酬のため」を除いた4項目の“あてはまる”の比率をみたのが以下の表である。
- ・専門分野別にみると、工学では「研究分野における地位向上のため」、理学と医学・歯学・薬学では「助成金を獲得する可能性を増やすため」が70%台と多くなっている。
- ・年間の投稿・発表論文数別にみると、4本以上の人では「研究分野における地位向上のため」が7割強あり、さらに6本以上の人では「助成金を獲得する可能性を増やすため」も83%と多数を占めている。
- ・最近3年間の論文の投稿・発表先別にみると、国内誌のみに投稿している人では「研究分野における地位向上のため」と「助成金を獲得する可能性を増やすため」は40%台と半数を下回っている。一方、海外誌のみに投稿している人では「助成金を獲得する可能性を増やすため」が82%と多くなっている。

【あてはまるの比率】

(%)

		n数	A 研究成果 を広く知らせるため	B 研究業績 を伸ばすため	C 研究分野 における 地位向上のため	D 助成金を 獲得する可 能性を増や すため
全体		613	95	92	61	66
専門分野	文学等	95	91	▼ 84	● 49	★ 46
	法学・政治学	12	91	▼ 83	★ 41	★ 33
	経済学・商学・経営学	16	△ 100	△ 100	▼ 56	★ 44
	理学	186	96	95	61	○ 77
	工学	123	97	92	○ 71	▼ 61
	農学	47	91	▼ 87	62	70
	医学・歯学・薬学	131	96	93	61	○ 76
年間の投稿・ 発表論文数	1本以下	158	92	90	▼ 54	63
	2～3本	284	95	91	57	63
	4～5本	105	97	94	○ 72	68
	6本以上	58	99	△ 97	○ 74	☆ 83
最近3年の 論文の投稿・ 発表先	国内誌のみ	155	▼ 90	▼ 86	★ 43	★ 41
	海外誌のみ	110	98	93	△ 67	☆ 82
	両方	328	97	94	△ 66	△ 73

(注)専門分野の「文学等」は「文学・哲学・教育学・心理学・社会学・史学」

☆は全体より15%以上高い数値 ★は全体より15%以上低い数値

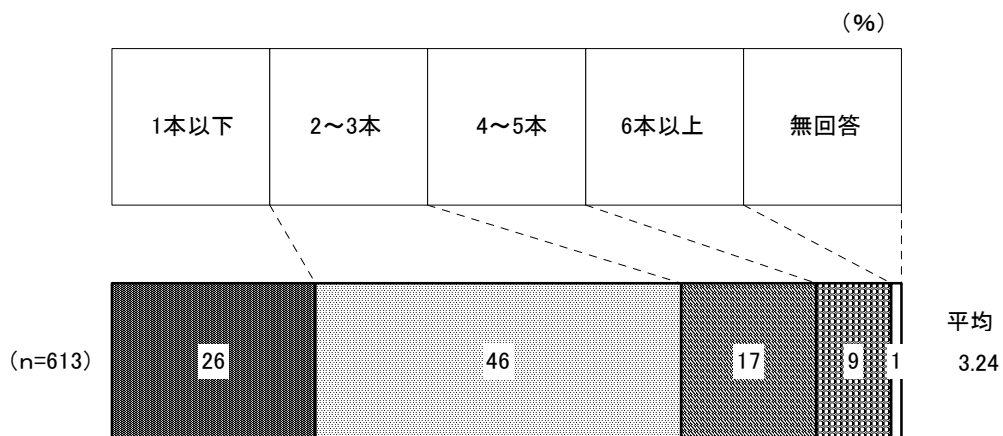
○は全体より10～14%高い数値 ●は全体より10～14%低い数値

△は全体より5～9%高い数値 ▼は全体より5～9%低い数値

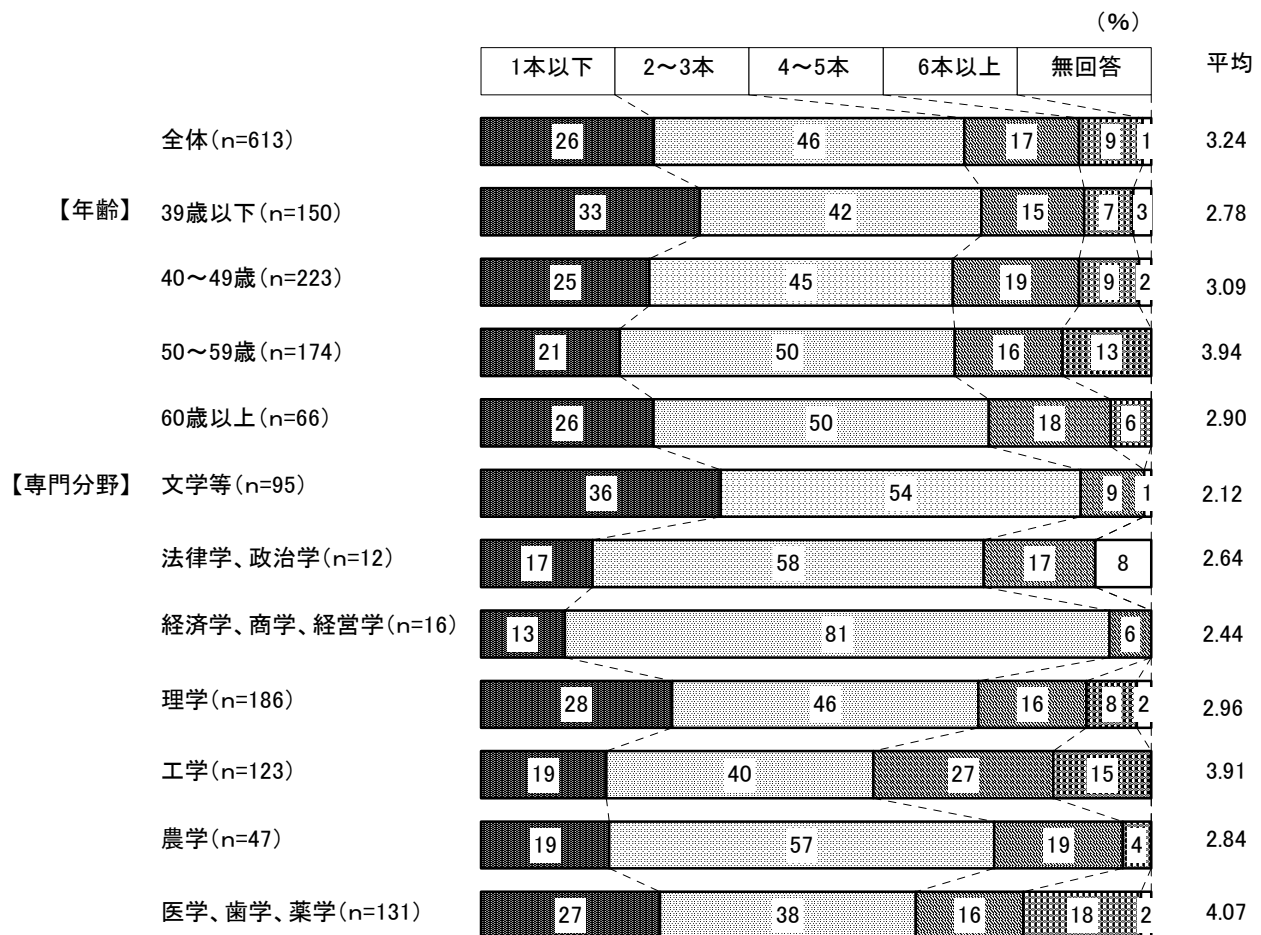
2－6 年間の投稿・発表論文数

- ・年間の投稿・発表論文数をみると、「2～3本」が46%と約半数を占め、ついで「1本以下」が26%、「4～5本」が17%となっている。平均論文数は3.2本である。

設問8 あなたは、毎年おおそ何本の論文を投稿・発表しますか。



- ・年齢別の平均論文数をみると、50～59歳が3.9本と最も多くなっている。
- ・専門分野別の平均論文数をみると、医学・歯学・薬学が4.1本で最も多く、ついで工学が3.9本で続いている。

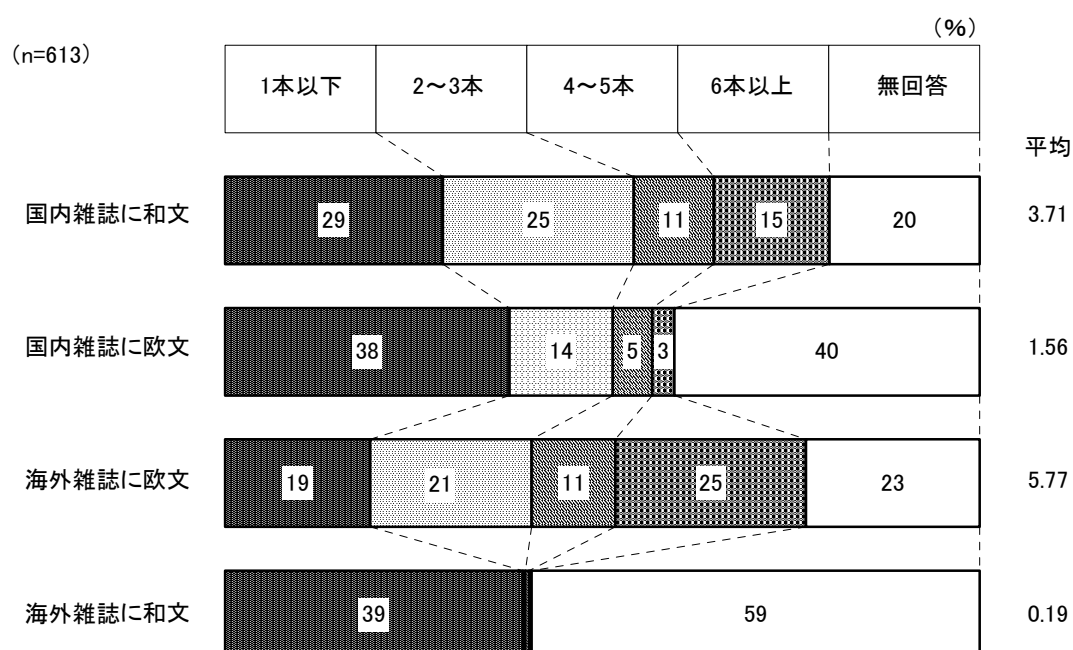


2-7 最近3年の論文の本数

(1) 記述言語別本数

- ・最近3年の論文の本数については、「海外雑誌に欧文」は「6本以上」が25%と4分の1を占め、平均本数は5.8本と最も多くなっている。ついで、「国内雑誌に和文」は「3本以下」が54%と半数を超えているが、「4本以上」も26%あり、平均本数は3.7本となっている。
- ・「国内雑誌に欧文」と「海外雑誌に和文」は「1本以下」が約4割を占め、平均本数は「国内雑誌に欧文」は1.6本、「海外雑誌に和文」は0.2本と少ない。

設問9 最近3年の論文の本数を投稿・発表先とその際の記述言語別にお答えください。



- ・年齢別の平均本数をみると、「国内雑誌に和文」「海外雑誌に欧文」は50～59歳の本数が最も多くなっている。
- ・専門分野別にみると、「国内雑誌に和文」は理学では2.0本と少なく、「文学等」が4.5本と多いのが目立っている。「海外雑誌に欧文」は医学・歯学・薬学が7.4本で最も多く、ついで工学6.3本、理学5.9本で続いている。

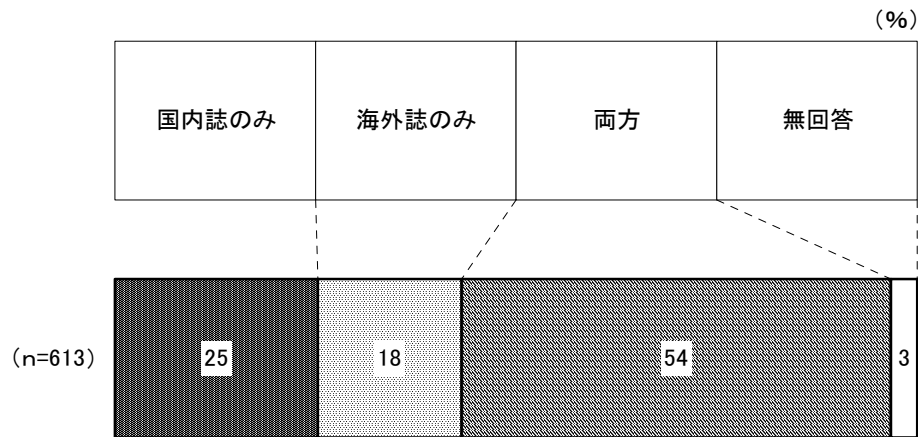
【平均本数】

		n数	国内雑誌		海外雑誌	
			和文	欧文	欧文	和文
全体		613	3.71	1.56	5.77	0.19
年齢	39歳以下	150	2.88	1.27	5.28	0.09
	40～49歳	223	3.92	1.42	4.95	0.16
	50～59歳	174	4.32	1.84	7.50	0.37
	60歳以上	66	3.14	2.22	5.90	0.17
専門分野	文学等	95	4.45	0.84	1.26	0.13
	法学・政治学	12	5.55	0.00	0.67	0.20
	経済学・商学・経営学	16	3.31	0.60	4.29	0.00
	理学	186	1.99	1.76	5.93	0.41
	工学	123	3.36	1.75	6.30	0.10
	農学	47	3.47	2.38	4.43	0.00
	医学・歯学・薬学	131	5.32	1.24	7.40	0.03

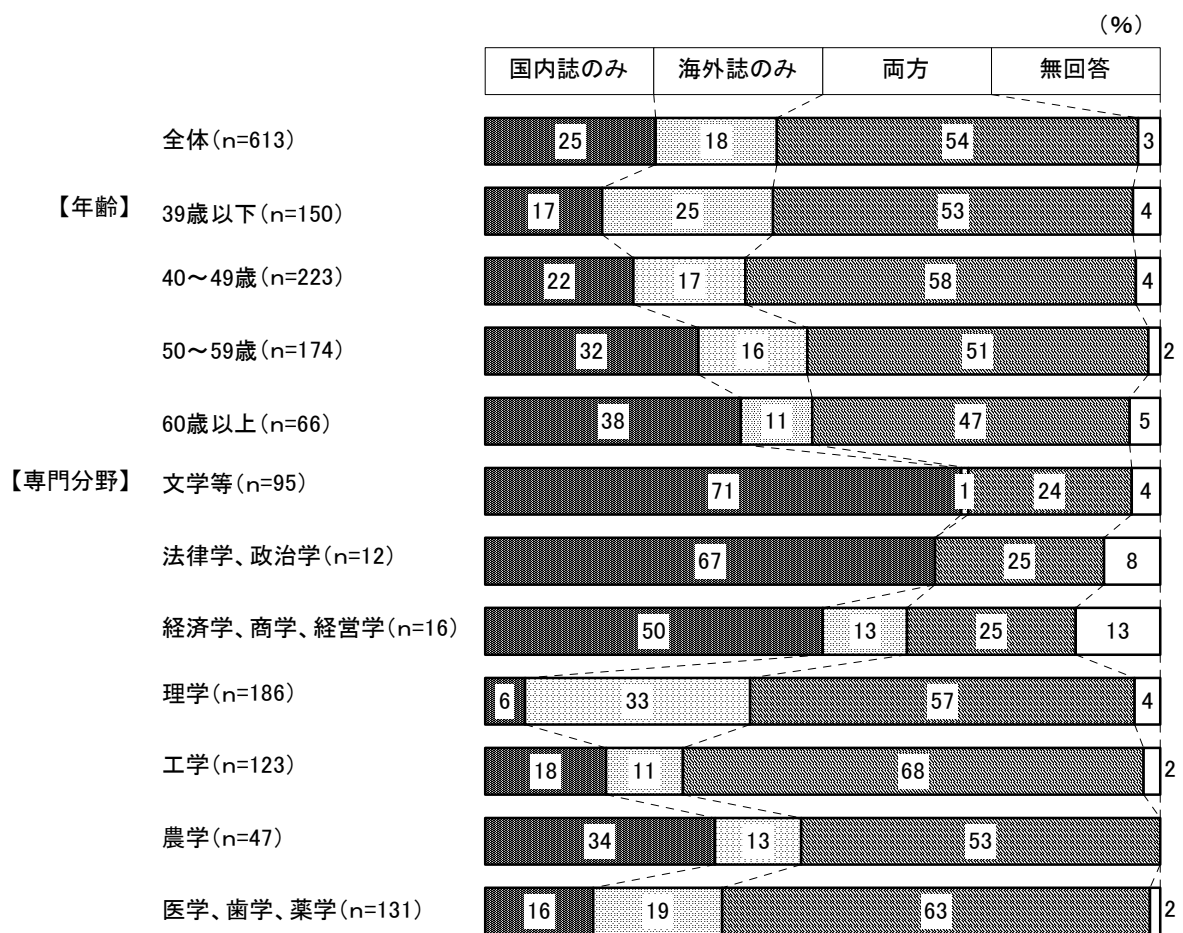
(注)専門分野の「文学等」は「文学・哲学・教育学・心理学・社会学・史学」

(2) 発表先

- ・最近3年の論文の発表先については、国内誌、海外誌の「両方」とする人が54%と半数を占め、「国内誌のみ」は25%、「海外誌のみ」は18%となっている。



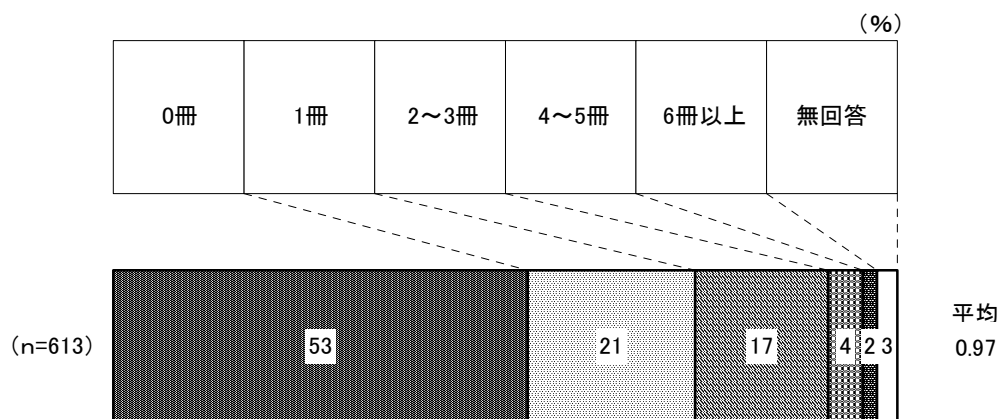
- ・年齢別にみると、年齢が高くなるほど「海外誌のみ」は減り、「国内誌のみ」が多くなっている。
- ・専門分野別にみると、「文学等」では「国内誌のみ」が71%と多数を占めている。理学、工学、医学・歯学・薬学では「国内誌のみ」が少なく、「両方」を含め、「海外誌」への発表が多くなっている。



2-8 最近3年の著書数

- ・最近3年の著書の数については、「0冊」が53%と半数を占めている。「1冊」が21%、「2～3冊」が17%となっており、平均著書数は1.0冊である。

設問 9-1 では、最近3年に何冊の著書を上梓しましたか。



- ・年齢別に平均冊数をみると、年齢が高くなるほど平均冊数は多くなっている。
- ・専門分野別では、理学と工学での平均冊数がやや少なくなっている。

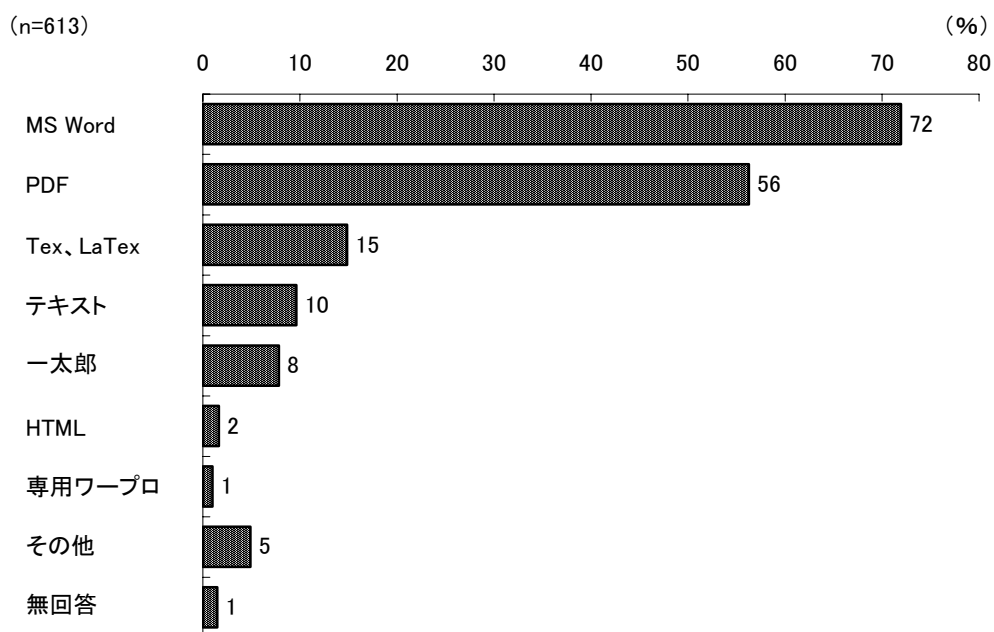
		n数	平均冊数
全体		613	0.97
年齢	39 歳以下	150	0.46
	40～49 歳	223	1.03
	50～59 歳	174	1.19
	60 歳以上	66	1.41
専門分野	文学等	95	1.30
	法律学・政治学	12	1.36
	経済学・商学・経営学	16	1.13
	理学	186	0.55
	工学	123	0.69
	農学	47	1.30
	医学・歯学・薬学	131	1.38

(注)専門分野の「文学等」は「文学・哲学・教育学・心理学・社会学・史学」

2-9 論文の保存形式

- 論文を電子的に保存する場合の形式は、「MS Word」が72%と最も多く、ついで「PDF」が56%となっている。

設問10 自分の論文を電子的に保存する場合、どのような形式でデータを保存しますか。(あてはまるものすべてに○印)



- ・年齢別にみると、39歳以下では「PDF」が73%と多いが、60歳以上では39%にとどまっている。また、39歳以下では「Tex、LaTex」も3割みられる。
- ・専門分野別にみると、理学と工学では「PDF」が70%台、農学と医学・歯学・薬学では「MS Word」が8割前後と多い。また、理学では「Tex、LaTex」が30%、「文学等」では「一太郎」が26%とやや多くなっている。
- ・最近3年間の論文の投稿・発表先別にみると、海外誌のみ、国内誌・海外誌両方に投稿している人は「PDF」での保存が多い。

(%)

		n数	PDF	テキスト	Tex、LaTex	MS Word	一太郎
全体		613	56	10	15	72	8
年齢	39歳以下	150	☆ 73	7	○ 29	71	▼ 3
	40～49歳	223	56	12	13	73	9
	50～59歳	174	▼ 49	9	▼ 6	74	9
	60歳以上	66	★ 39	8	11	▼ 67	12
専門分野	文学等	95	★ 21	△ 16	● 1	72	☆ 26
	法学・政治学	12	★ 8	△ 17	★ 0	75	☆ 25
	経済学・商学・経営学	16	▼ 50	6	○ 25	69	○ 19
	理学	186	☆ 76	8	☆ 30	● 62	▼ 2
	工学	123	○ 70	6	△ 24	72	4
	農学	47	▼ 49	▼ 4	● 2	△ 79	11
	医学・歯学・薬学	131	▼ 50	13	★ 0	○ 84	▼ 2
最近3年の論文の投稿・発表先	国内誌のみ	155	★ 28	11	● 5	72	○ 21
	海外誌のみ	110	☆ 75	▼ 5	△ 24	▼ 65	▼ 3
	両方	328	△ 63	11	17	75	▼ 3

(注)専門分野の「文学等」は「文学・哲学・教育学・心理学・社会学・史学」

☆は全体より15%以上高い数値 ★は全体より15%以上低い数値

○は全体より10～14%高い数値 ●は全体より10～14%低い数値

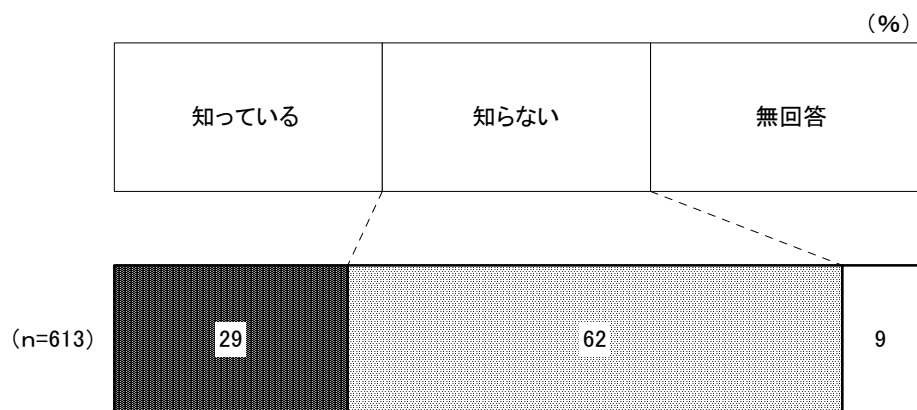
△は全体より5～9%高い数値 ▼は全体より5～9%低い数値

Ⅲ オープンアクセスについて

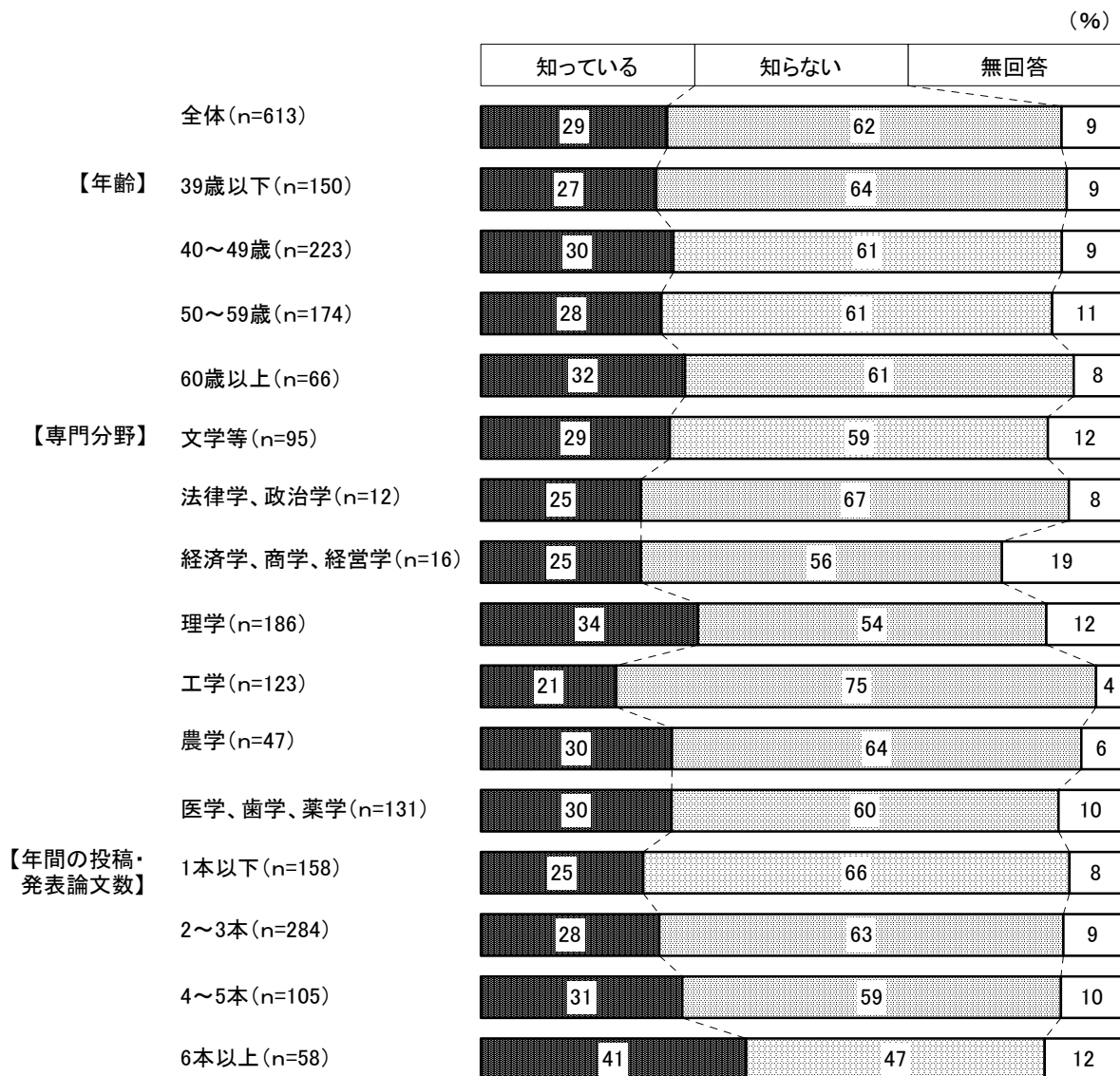
3-1 認知度

- ・オープンアクセスの概念を以前から「知っている」は29%にとどまり、「知らない」が62%と多くなっている。

設問 11 あなたはオープンアクセスの概念を以前からご存知でしたか。(1 つだけ○印)



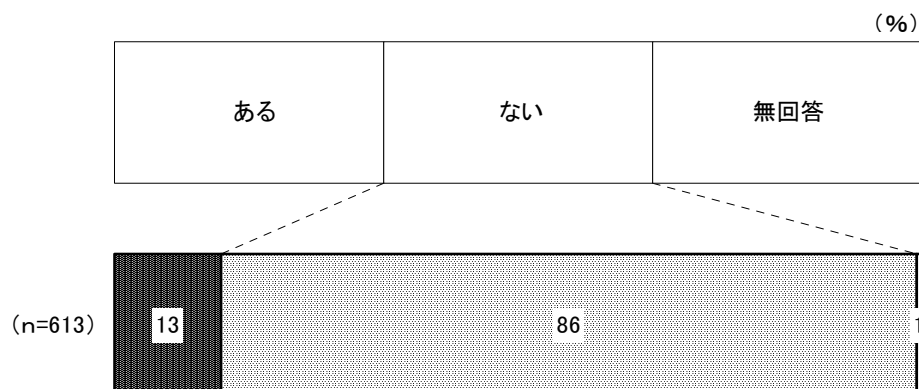
- ・年齢別や専門分野別にみても、あまり大きな差はみられないが、工学で「知っている」との回答が21%と少なくなっている。
- ・年間の投稿・発表論文数別にみると、本数が多くなるほど「知っている」との回答が多くなっている。



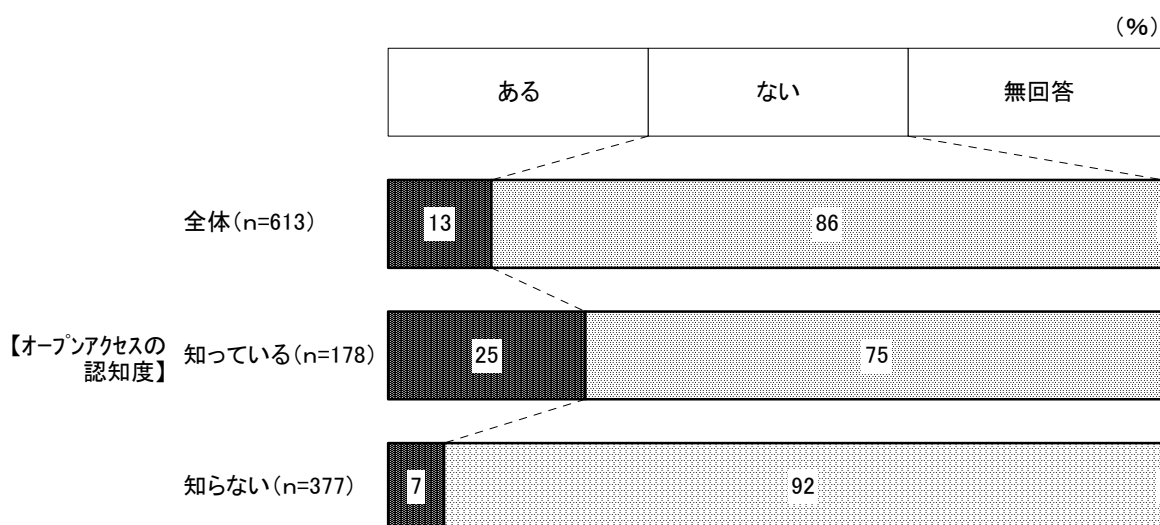
3-2 オープンアクセスに対する注意喚起の状況

- ・最近1年以内に、オープンアクセスについて所属機関や図書館から注意を喚起されたことが「ある」との回答は13%と少ない。「ない」とする人は86%と多数を占めている。

設問12 最近1年以内に、所属の機関、図書館がオープンアクセス(オープンアクセスジャーナル、セルフ・アーカイビング、機関リポジトリ等)について、あなたの注意を喚起したことはありますか。(1 つだけ○印)



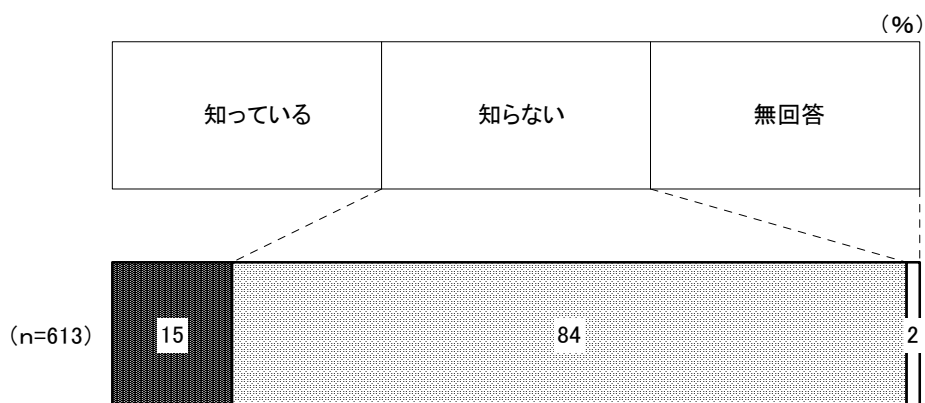
- ・オープンアクセスの認知度別にみると、オープンアクセスの概念を認知している研究者のうち、注意を喚起されたことが「ある」は25%である。



3-3 オープンアクセスジャーナルの認知度

- ・オープンアクセスジャーナルを刊行している団体や刊行されている雑誌のタイトルの認知度については、「知らない」が84%と多数を占めている。

設問 13 あなたはオープンアクセスジャーナルを刊行している団体または刊行されている雑誌のタイトルをご存知ですか。(1 つだけ○印)

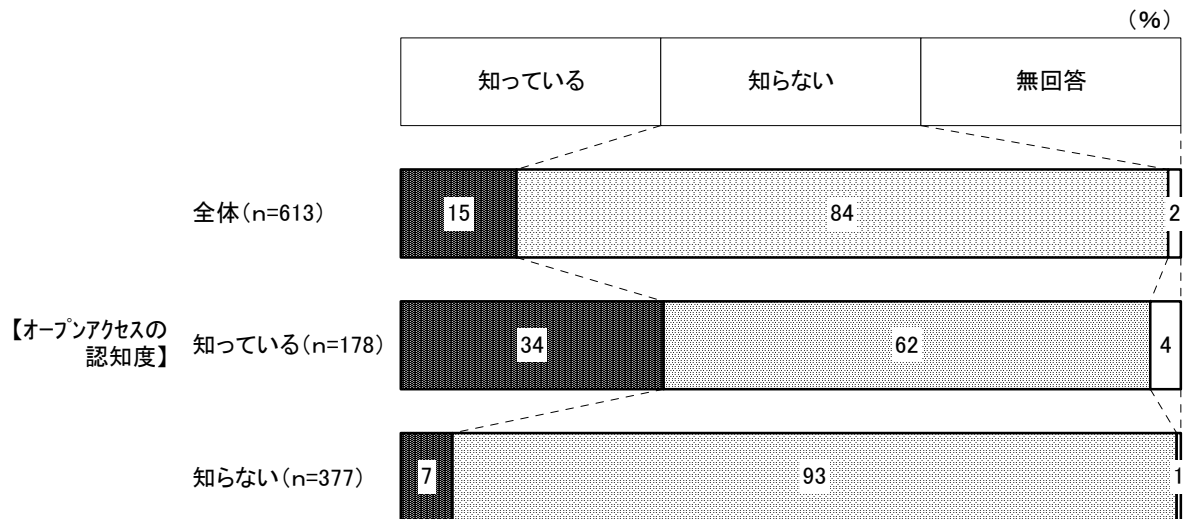


- ・「知っている」と回答した人に具体的な名称を記入してもらった。80 人から回答があり、O Aに基づく J o u r n a l を回答している人もいるが、単にアクセス可能な J o u r n a l (大学等の契約済み雑誌) を回答する人もほぼ同じ割合となっている。また、団体名についても同様の傾向があり、具体的な認識はまだ十分でないことをうかがわせている。(雑誌名・団体名の詳細については Appendix 参照)

OAJ としての 回答数	DOAJ 等に掲載 されている OAJ	非 OAJ (Elsevier 等)	その他(不明)
80	35 (43.8%)	33 (41.3%)	12 (15.0%)

DOAJ: Directory of Open Access Journals (<http://www.doaj.org/>)

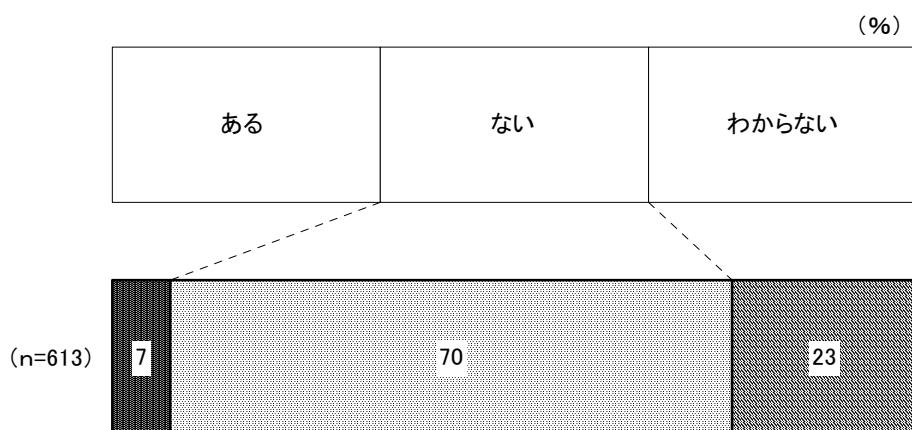
- ・オープンアクセスの認知度別にみると、オープンアクセスの概念を知っている人でもオープンアクセスジャーナルを刊行している団体や刊行されている雑誌のタイトルを「知っている」人は34%にとどまっている。



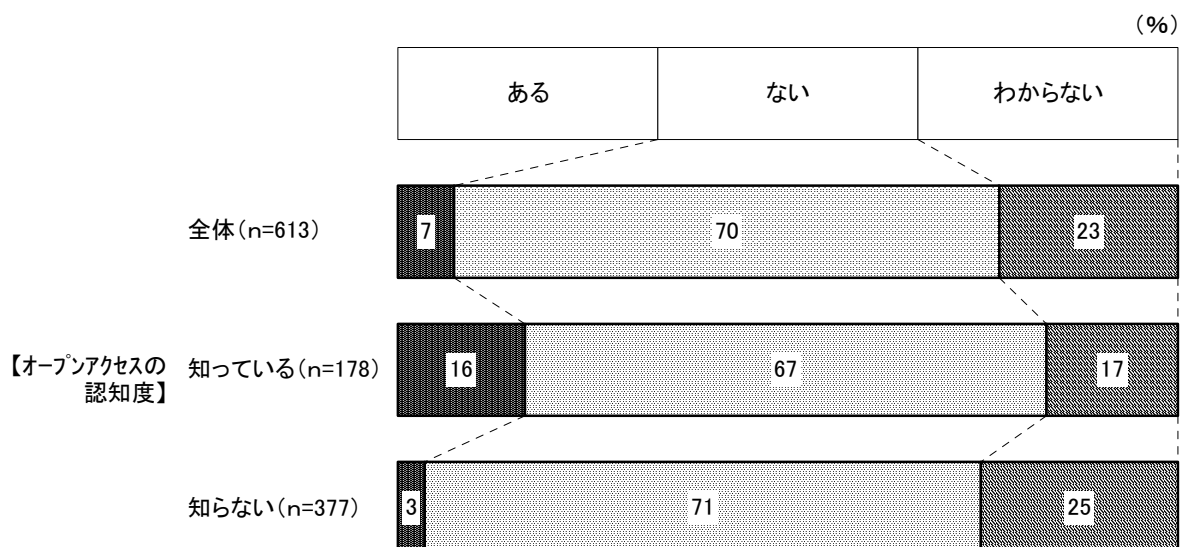
3-4 オープンアクセスジャーナルへの投稿・発表の有無

- ・最近3年間にオープンアクセスジャーナルに原稿を投稿、あるいは論文を発表したことが「ある」とする人は7%にとどまり、「ない」とする人が70%と多くなっている。また、約4人に1人が「わからない」としている。

設問 14 最近3年の間に、オープンアクセスジャーナルに原稿を投稿、あるいは論文を発表したことがありますか。(1つだけ○印)



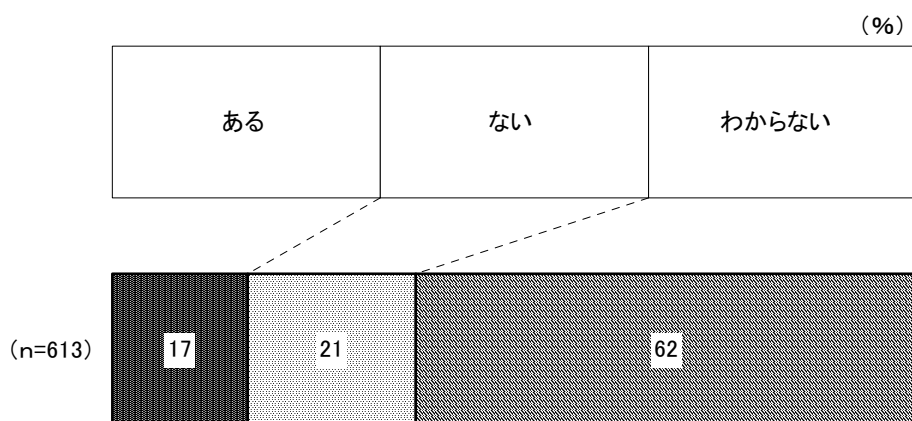
- ・オープンアクセスの認知度別にみると、オープンアクセスの概念を知っている人でも原稿の投稿や論文の発表が「ある」とする人は16%と少ない。



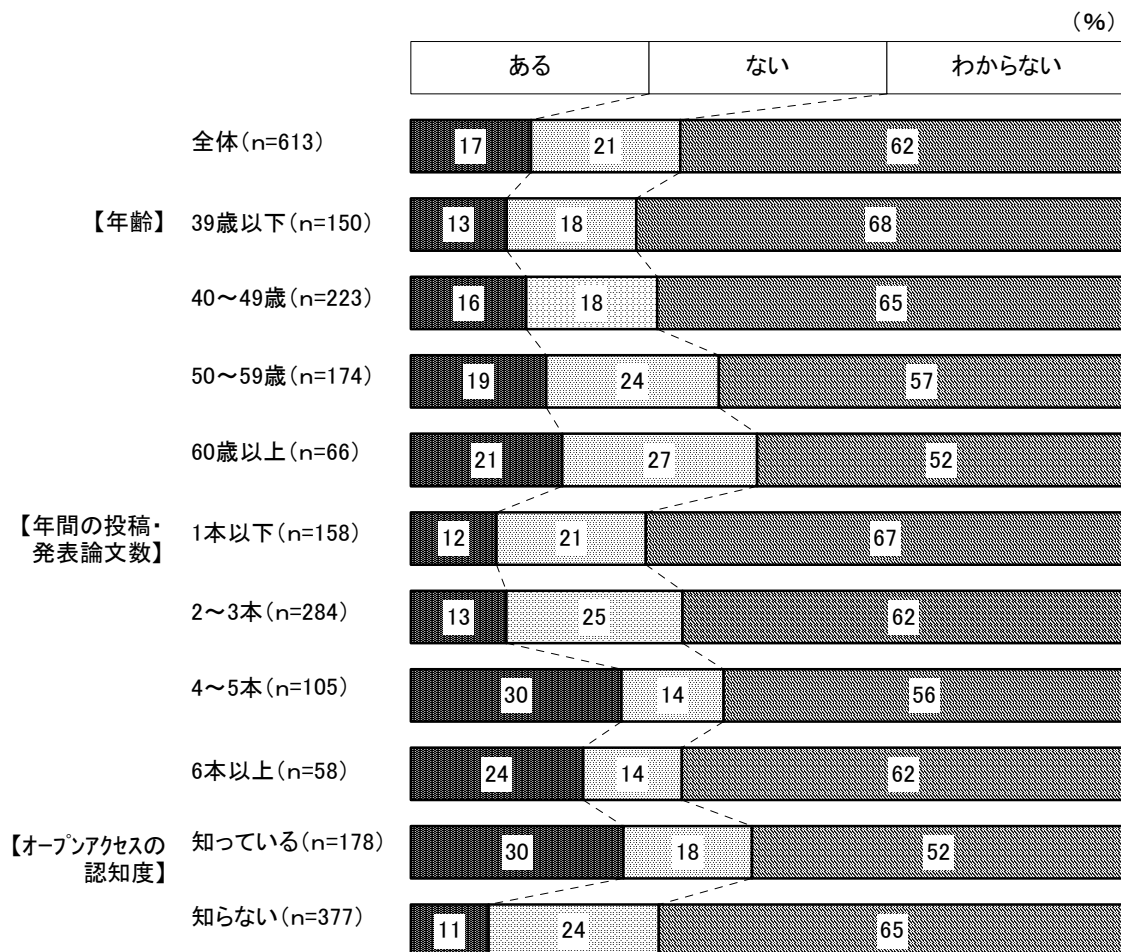
3-5 今後オープンアクセスジャーナルに発表する可能性

- ・ 今後3年以内にオープンアクセスジャーナルに論文を発表する可能性については、「ある」とする人が17%、「ない」とする人が21%となっており、「わからない」とする人が62%と多数を占めている。

設問 15 今後3年以内にオープンアクセスジャーナルに論文を少なくとも1本は発表する可能性はありますか。(1つだけ○印)



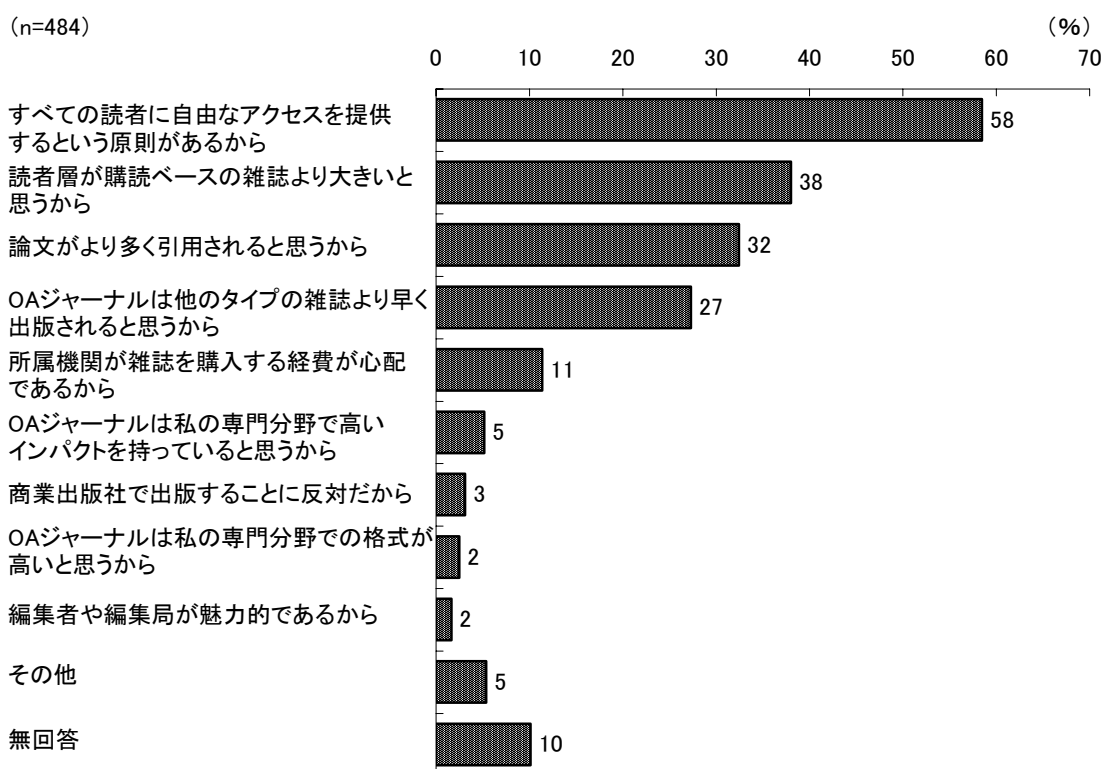
- ・年齢別にみると、年齢が低いほど「わからない」とする人が多い。
- ・年間の投稿・発表論文数別にみると、3本以下の人では論文発表の可能性が「ある」との回答は10%強にとどまるが、4～5本の人では30%が「ある」としている。
- ・オープンアクセスの認知度別では、オープンアクセスの概念を知っている人の論文発表の可能性が「ある」は30%にとどまっている。



3-6 オープンアクセスジャーナルに発表する理由

- ・オープンアクセスジャーナルに論文発表の可能性が「ある」あるいは「わからない」と回答した人のオープンアクセスジャーナルに研究成果を発表してもよいと思った理由をみると、「すべての読者に自由なアクセスを提供するという原則があるから」が58%と最も多く、ついで「読者層が購読ベースの雑誌より大きいと思うから」(38%)、「論文がより多く引用されると思うから」(32%)、「OAジャーナルは他のタイプの雑誌より早く出版されると思うから」(27%)が続いている。

設問 15-1 (設問 15 で「ある」または「わからない」と答えた方に)オープンアクセス(OA)ジャーナルでの研究成果の発表をしてもよいと思った際に考慮した理由をお聞かせ下さい。(あてはまるものすべてに○印)



- ・専門分野別にみると、「文学等」では「すべての読者に自由なアクセスを提供するという原則があるから」「読者層が購読ベースの雑誌より大きいと思うから」が、医学・歯学・薬学では「論文がより多く引用されると思うから」が他の専門分野に比べて多くなっている。
- ・オープンアクセスの認知度別にみると、オープンアクセスの概念を知っている人では「すべての読者に自由なアクセスを提供するという原則があるから」「OAジャーナルは他のタイプの雑誌より早く出版されると思うから」がやや多くなっている。
- ・今後3年以内にオープンアクセスジャーナルへ論文を発表する可能性がある人と回答した人では、4つの項目とも高い数字となっている。

(%)

		n数	すべての読者に自由なアクセスを提供するという原則があるから	読者層が購読ベースの雑誌より大きいと思うから	論文がより多く引用されると思うから	OAジャーナルは他のタイプの雑誌より早く出版されると思うから
全体		484	58	38	32	27
専門分野	文学等	59	○ 68	☆ 53	34	▼ 19
	法学・政治学	8	☆ 75	38	△ 38	● 13
	経済学・商学・経営学	12	★ 42	42	★ 0	☆ 67
	理学	151	60	36	▼ 25	27
	工学	103	▼ 53	35	33	23
	農学	39	62	38	33	△ 33
	医学・歯学・薬学	110	55	35	○ 44	29
オープンアクセスの認知度	知っている	146	△ 66	42	36	△ 32
	知らない	287	55	35	33	25
今後3年以内にOAジャーナルへ論文を発表する可能性	ある	103	☆ 74	○ 49	○ 45	☆ 42
	わからない	381	54	35	29	23

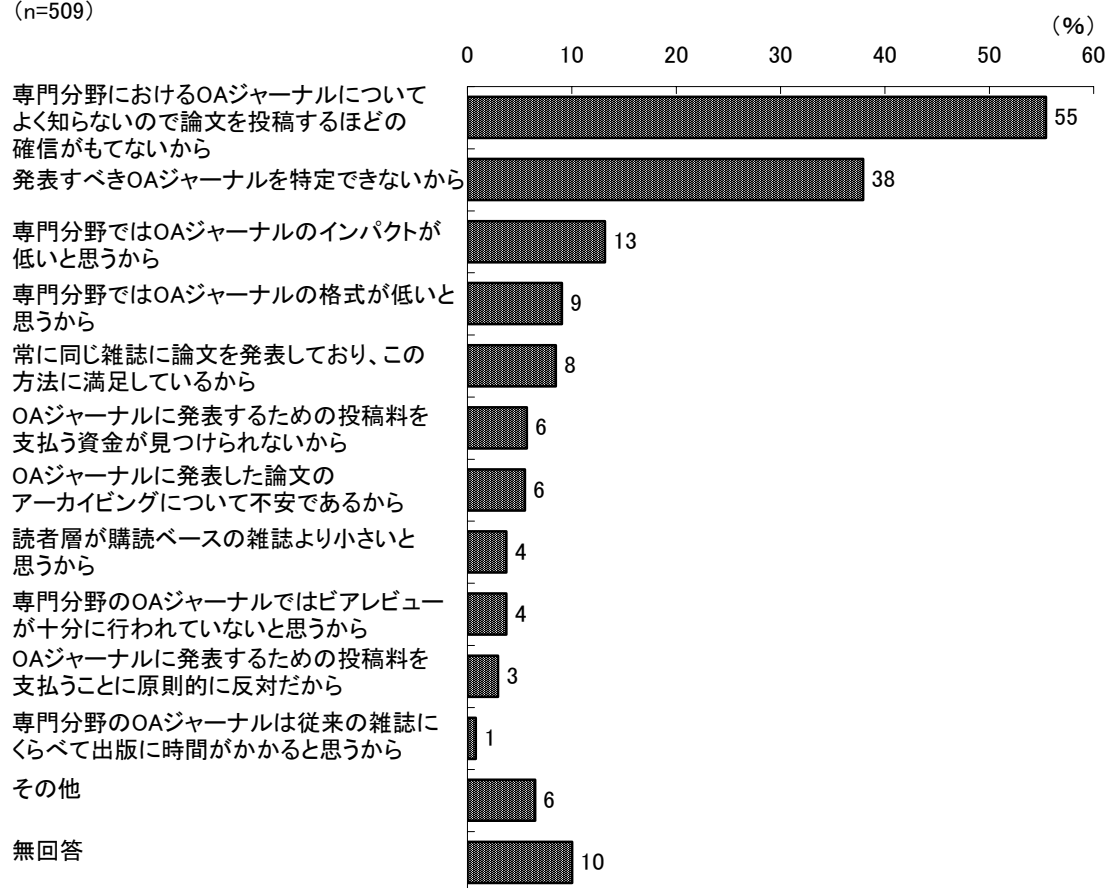
(注)専門分野の「文学等」は「文学・哲学・教育学・心理学・社会学・史学」
 ☆は全体より15%以上高い数値 ★は全体より15%以上低い数値
 ○は全体より10～14%高い数値 ●は全体より10～14%低い数値
 △は全体より5～9%高い数値 ▼は全体より5～9%低い数値

3-7 オープンアクセスジャーナルに発表しない理由

- ・オープンアクセスジャーナルに論文発表の可能性が「ない」あるいは「わからない」と回答した人のオープンアクセスジャーナルでの研究成果を発表したくないと思った理由をみると、「専門分野におけるOAジャーナルについてよく知らないので論文を投稿するほどの確信がもてないから」が55%と最も多く、ついで「発表すべきOAジャーナルを特定できないから」(38%)が多く、オープンアクセスジャーナルについての知識不足が主な理由となっている。

設問 15-2 (設問 15 で「ない」または「わからない」と答えた方に) オープンアクセス(OA)ジャーナルでの研究成果の発表をしたくない理由として思ったことをお聞かせ下さい。(あてはまるものすべてに○印)

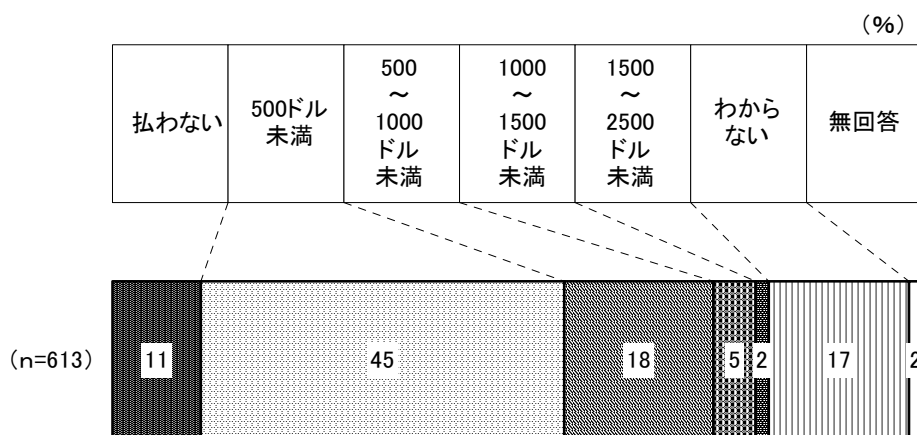
(n=509)



3-8 出版手数料

- ・オープンアクセスジャーナルに論文を発表するために支払える出版手数料としては、「500ドル未満」が45%と約半数を占め、ついで「500～1000ドル未満」が18%で続いている。一方、「払わない」とする人は11%と少ない。

設問 16 オープンアクセスジャーナル出版モデルは一般に研究成果を発表するために著者あるいは所属機関がその出版経費を負担します。現在海外のオープンアクセス出版社は500ドルから1,500ドルを経費として求めています。実際の出版経費はもっと高いと推測されます。出版社の中には出版経費をまかなうために3,500ドル以上請求するところもあるようです。論文が通常の方法で受理されると仮定して、選択した雑誌に論文を発表するためにあなたは(資金提供者の代理として)どのくらいの額を支払う用意がありますか(\$1=110円換算)。



- ・専門分野別にみると、「文学等」では「払わない」と「わからない」との回答が多くなっている。
- ・最近3年間の論文の投稿・発表先別にみると、国内誌のみに投稿している人では「500～1000ドル未満」は12%と少なく、「わからない」が27%と多くなっている。

(%)

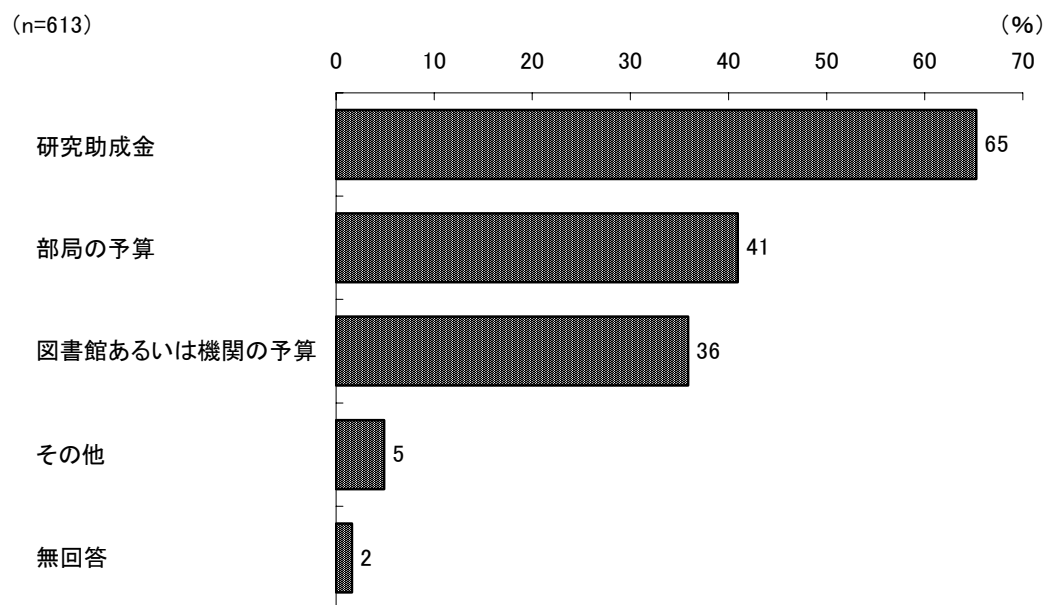
		n数	払わない	500ドル未満	500～1000ドル未満	1000～1500ドル未満	1500～2500ドル未満	わからない	無回答
全体		613	11	45	18	5	2	17	2
専門分野	文学等	95	△ 19	● 35	● 4	3	1	☆ 36	2
	法学・政治学	12	☆ 33	★ 25	★ 0	▼ 0	0	☆ 33	△ 8
	経済学・商学・経営学	16	○ 25	● 31	▼ 13	▼ 0	0	△ 25	6
	理学	186	10	44	△ 23	5	2	15	1
	工学	123	▼ 6	△ 54	△ 23	6	1	▼ 10	2
	農学	47	11	47	21	2	2	17	0
	医学・歯学・薬学	131	8	47	20	9	2	▼ 12	2
最近3年の論文の投稿・発表先	国内誌のみ	155	14	44	▼ 12	3	0	○ 27	0
	海外誌のみ	110	12	47	22	6	2	▼ 9	2
	両方	328	9	45	21	6	2	15	1

(注)専門分野の「文学等」は「文学・哲学・教育学・心理学・社会学・史学」
 ☆は全体より15%以上高い数値 ★は全体より15%以上低い数値
 ○は全体より10～14%高い数値 ●は全体より10～14%低い数値
 △は全体より5～9%高い数値 ▼は全体より5～9%低い数値

3－9 出版手数料の財源

- ・出版経費を支払うための資金の財源については、「研究助成金」が 65%と最も多くなっている。
ついで「部局の予算」(41%)、「図書館あるいは機関の予算」(36%) が 40%前後で続いている。

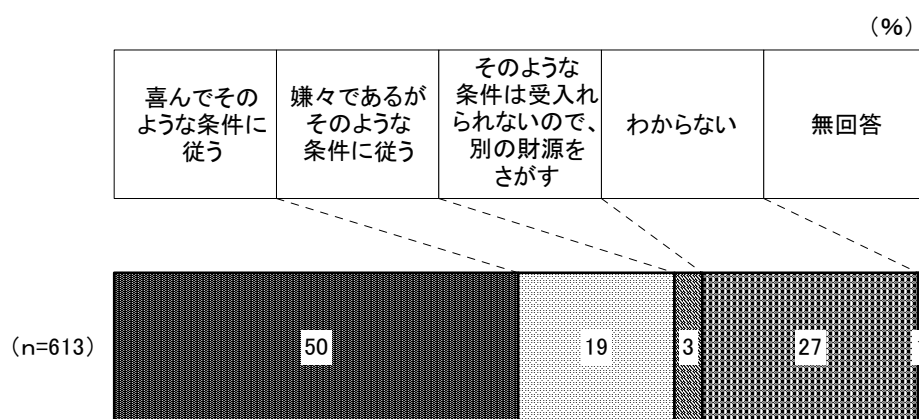
設問 17 出版経費を支払うための資金はどこが負担すべきだと思いますか。(あてはまるものすべてに○印)



3-10 「契約条件としてのオープンアクセスジャーナルへの発表」に対する考え

- 研究助成金の契約条件によりその研究成果をオープンアクセスジャーナルで発表することを求められた場合、「喜んでそのような条件に従う」が50%、「嫌々であるがそのような条件に従う」が19%となっており、この両者を合わせた69%が“条件に従う”としている。一方、「そのような条件は受入れられないので、別の財源をさがす」は3%と少ないが、「わからない」とする人も4人に1人の割合でいる。

設問 18 研究助成金の契約条件によりその研究成果をオープンアクセス(OA)ジャーナルで発表することを求められた場合、あなたはどのようにされますか。(1つだけ○印)



- オープンアクセスの認知度別にみると、オープンアクセスの概念を知っている人では「喜んでそのような条件に従う」が62%と多いが、オープンアクセスの概念を知らない人では43%にとどまり、「わからない」とする人が32%とやや多くなっている。

(%)

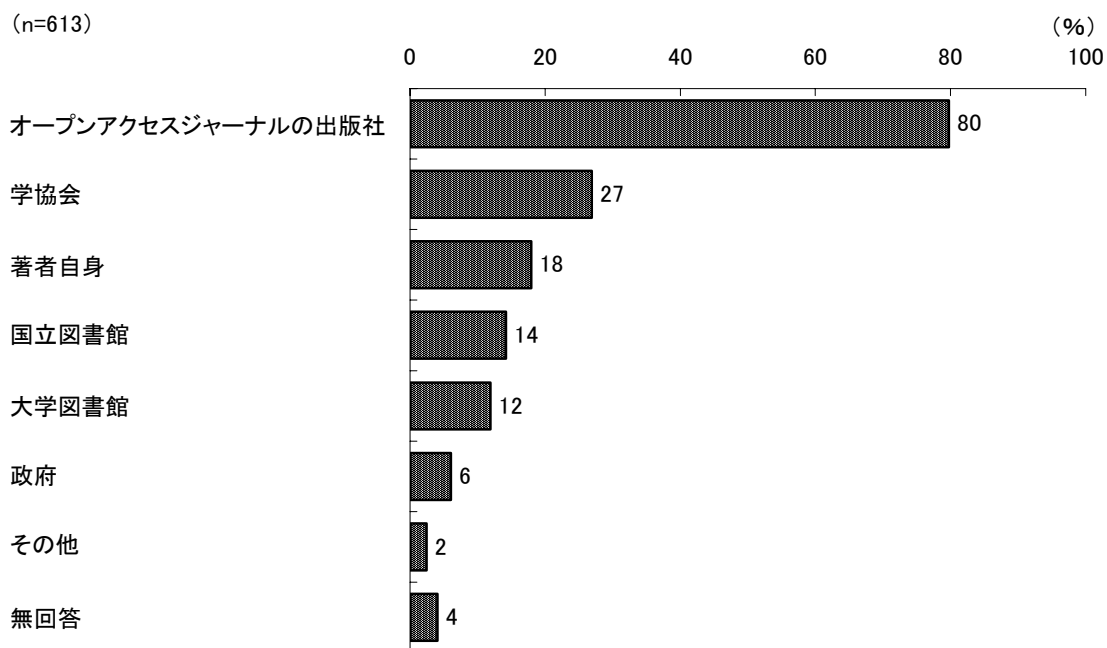
		n数	喜んでそのような条件に従う	嫌々であるがそのような条件に従う	そのような条件は受入れられないので、別の財源をさがす	わからない	無回答
全体		613	50	19	3	27	1
オープンアクセスの認知度	知っている	178	○ 62	16	4	● 17	1
	知らない	377	▼ 43	21	3	△ 32	1

(注) ☆は全体より15%以上高い数値 ★は全体より15%以上低い数値
 ○は全体より10～14%高い数値 ●は全体より10～14%低い数値
 △は全体より5～9%高い数値 ▼は全体より5～9%低い数値

3-1-1 オープンアクセスジャーナル論文のアーカイブングの責任主体

- ・オープンアクセスジャーナルに発表された論文のアーカイブングの責任主体については、「オープンアクセスジャーナルの出版社」が 80%と多数を占めている。「著者自身」とする人は 18%と少ない。

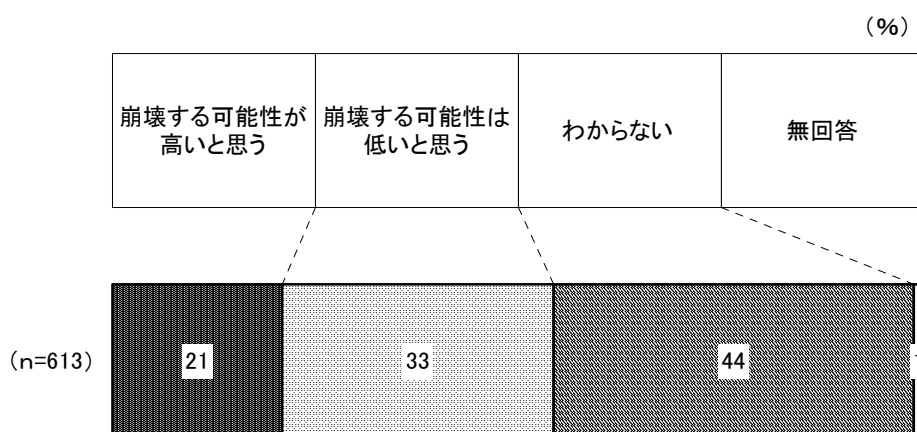
設問 19 オープンアクセス(OA)ジャーナルに発表された論文のアーカイブングには誰が責任を持つべきだと思いますか。(あてはまるものすべてに○印)



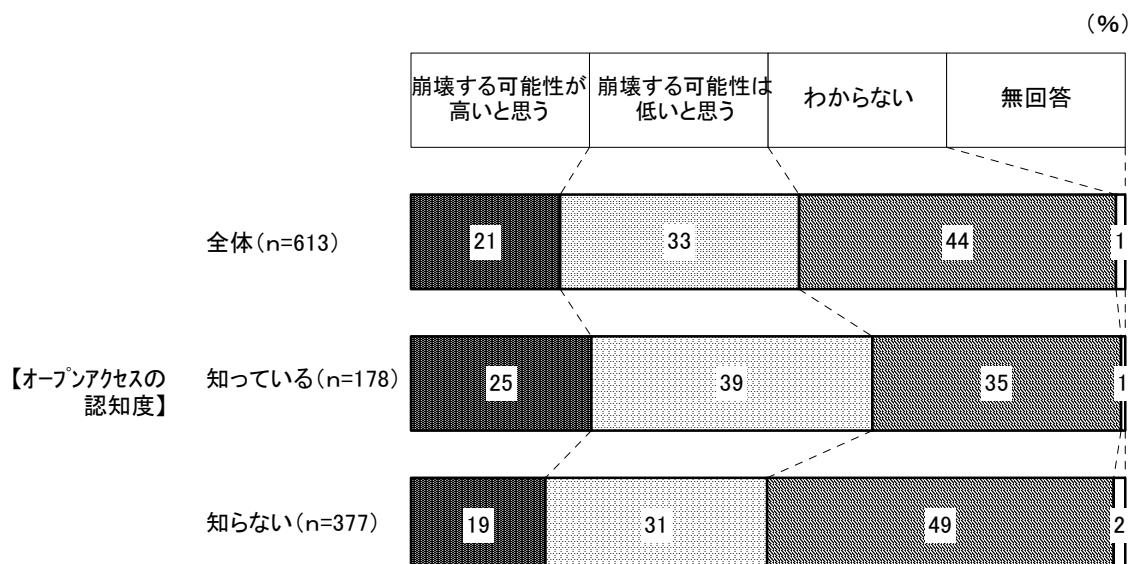
3-12 オープンアクセス出版の学術出版システムへの影響

- ・オープンアクセス出版の普及により既存の学術出版システムが崩壊するかもしれないという意見については、「崩壊する可能性が高いと思う」(21%) に対し、「崩壊する可能性は低いと思う」(33%) がやや上回っているが、全体的には「わからない」が半数近くを占めている。
- ・「崩壊する可能性が高いと思う」理由としては、「書籍は必要なくなる・経営的に難しくなる」「OAの方が利便性が高いから」「既存の出版コストが高いから」「OAは無料で情報を入手できるから」という意見が多くみられる。
- ・一方、「崩壊する可能性は低いと思う」理由としては、「紙媒体は必要だから」「両立していくと思うから」「既に確立した地位があるから」「OA出版普及には時間がかかると思うから」などの意見が多くなっている。(理由の詳細については Appendix 参照)

設問 20 オープンアクセス出版の普及により既存の学術出版システムが崩壊するかもしれないという意見がありますが、あなたはどのように思われますか。(1 つだけ○印)



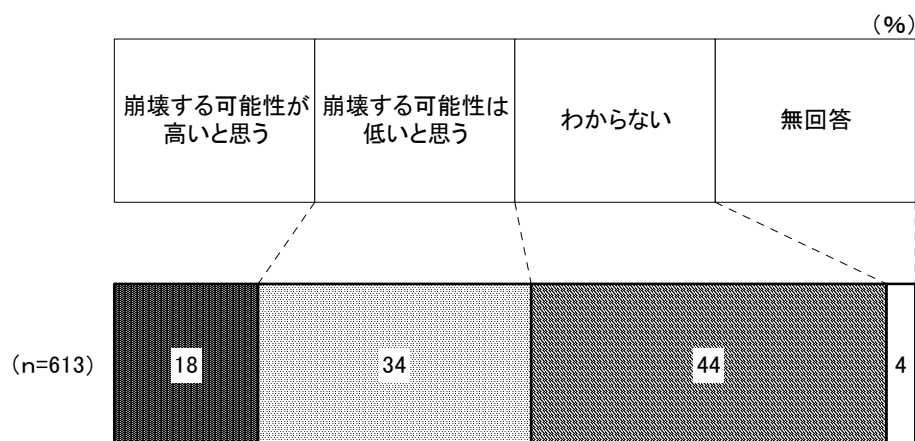
- ・オープンアクセスの認知度別にみると、オープンアクセスの概念を知っている人では「崩壊する可能性は低いと思う」との見方がやや多くなっている。



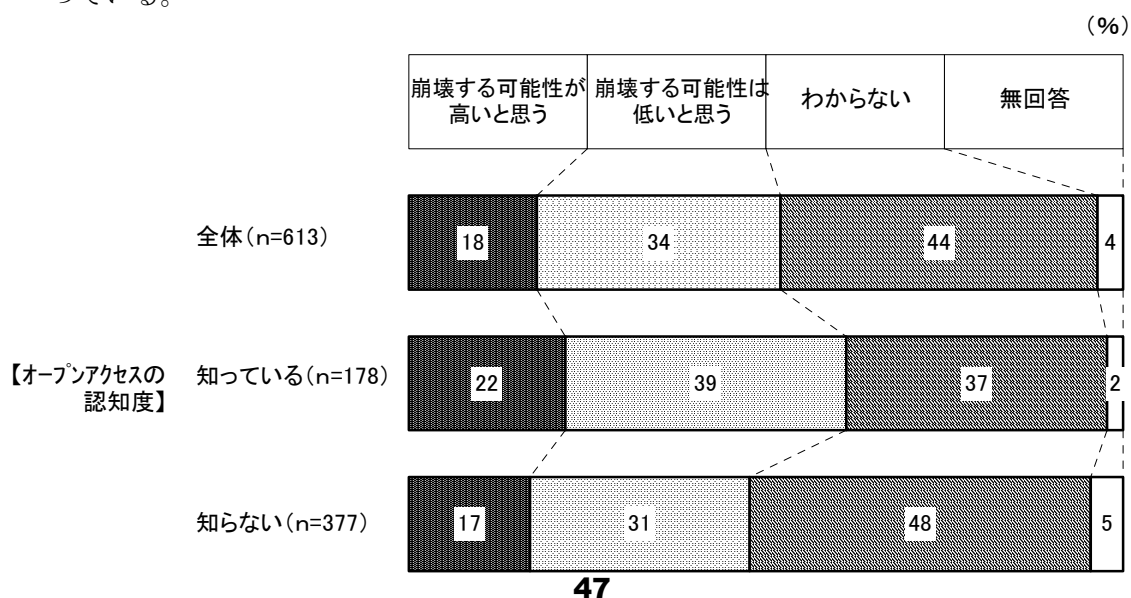
3-13 オープンアクセス出版の学協会出版事業への影響

- ・学協会による出版事業が崩壊するかもしれないという意見についても、「崩壊する可能性が高いと思う」が18%に対し、「崩壊する可能性は低いと思う」が34%と多くなっているが、基本的に「わからない」が44%と多くなっている。
- ・「崩壊する可能性が高いと思う」理由としては、「書籍は必要なくなる・学会誌は売れなくなる」「OAに移行すると思うから」「OAの方が利便性が高いから」などの意見が多くなっている。
- ・一方、「崩壊する可能性は低いと思う」理由としては、「紙媒体は必要だから」「学協会が存在する限り出版事業もなくなる」「出版以外の役割があるから」「OA出版普及には時間がかかる」などの意見が多くなっている。（理由の詳細については Appendix 参照）

設問 20-2 同じく、学協会による出版事業が崩壊するかもしれないという意見についてはどのように思われますか。(1つだけ○印)



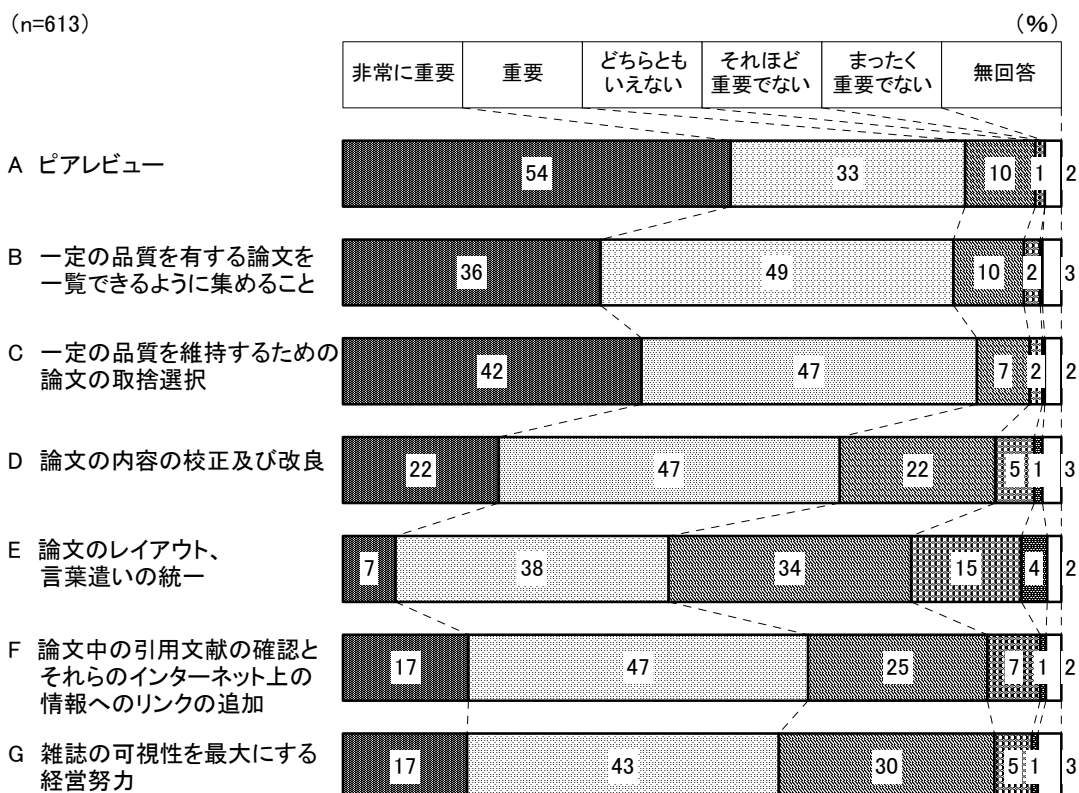
- ・オープンアクセスの認知度別にみると、学術出版システムへの影響と同じように、オープンアクセスの概念を知っている人では「崩壊する可能性は低いと思う」との見方がやや多くなっている。



3-14 学術雑誌の役割としての重要性について

- ・学術雑誌の役割について、重視する項目は、「ピアレビュー」「一定の品質を有する論文を一覧できるように集めること」「一定の品質を維持するための論文の取捨選択」の“重視率”（「非常に重要」と「重要」の合計比率）は8割以上と多数を占めている。
- ・「論文の内容の校正及び改良」「論文中の引用文献の確認とそれらのインターネット上の情報へのリンクの追加」「雑誌の可視性を最大にする経営努力」の3項目の“重視率”も60%以上あるが、「論文のレイアウト、言葉遣いの統一」は45%と半数を下回っている。

設問 21 学術雑誌の次の役割を維持することは、著者であるあなたにとってどの程度重要ですか。A～Gの項目についてそれぞれお答えください。



- ・「非常に重要」との比率を専門分野別にみると、理学では「ピアレビュー」が67%と多いが目立っている。一方、「文学等」では「ピアレビュー」は39%にとどまり、「論文中の引用文献の確認とそれらのインターネット上の情報へのリンクの追加」が23%とやや多くなっている。
- ・年間の投稿・発表論文数別にみると、論文数が4本以上の人では「ピアレビュー」「一定の品質を有する論文を一覧できるように集めること」「一定の品質を維持するための論文の取捨選択」を重視する人が多くなっている。
- ・最近3年間の論文の投稿・発表先別にみると、海外誌のみに投稿している人は「ピアレビュー」は72%とかなり高い数値を示している。

【非常に重要な比率】

(%)

		n数	Aピア レビュー	B一定の 品質を 有する 論文を 一覧で 集める こと	C一定の 品質を 維持す るため の論文 の取捨 選択	D論文の 内容の 校正及 び改良	E論文の レイアウト、 言葉遣い の統一	F論文中 の引用文 献の確認 とそれら のインター ネット上 の情報へ のリンク の追加	G雑誌の 可視性を 最大に する経営 努力
全体		613	54	36	42	22	7	17	17
専門分野	文学等	95	★ 39	35	▼ 36	19	7	△ 23	18
	法律学・政治学	12	★ 8	★ 17	★ 25	● 8	▼ 0	★ 0	★ 0
	経済学・商学・経営学	16	● 44	38	38	☆ 38	▼ 0	● 6	13
	理学	186	○ 67	39	45	19	6	17	19
	工学	123	54	37	45	20	6	15	13
	農学	47	53	● 23	▼ 34	26	9	17	15
	医学・歯学・薬学	131	53	37	44	△ 28	11	19	21
年間の投稿・ 発表論文数	1本以下	158	▼ 48	34	39	21	6	16	17
	2～3本	284	51	34	38	21	8	17	17
	4～5本	105	△ 60	△ 41	△ 47	22	6	△ 23	△ 22
	6本以上	58	☆ 72	△ 45	☆ 59	26	△ 12	19	14
最近3年の 論文の投稿・ 発表先	国内誌のみ	155	★ 33	▼ 29	● 31	▼ 17	4	13	14
	海外誌のみ	110	☆ 72	△ 42	△ 51	△ 30	10	△ 25	△ 24
	両方	328	△ 60	39	45	22	9	17	18

(注)専門分野の「文学等」は「文学・哲学・教育学・心理学・社会学・史学」

☆は全体より15%以上高い数値 ★は全体より15%以上低い数値

○は全体より10～14%高い数値 ●は全体より10～14%低い数値

△は全体より5～9%高い数値 ▼は全体より5～9%低い数値

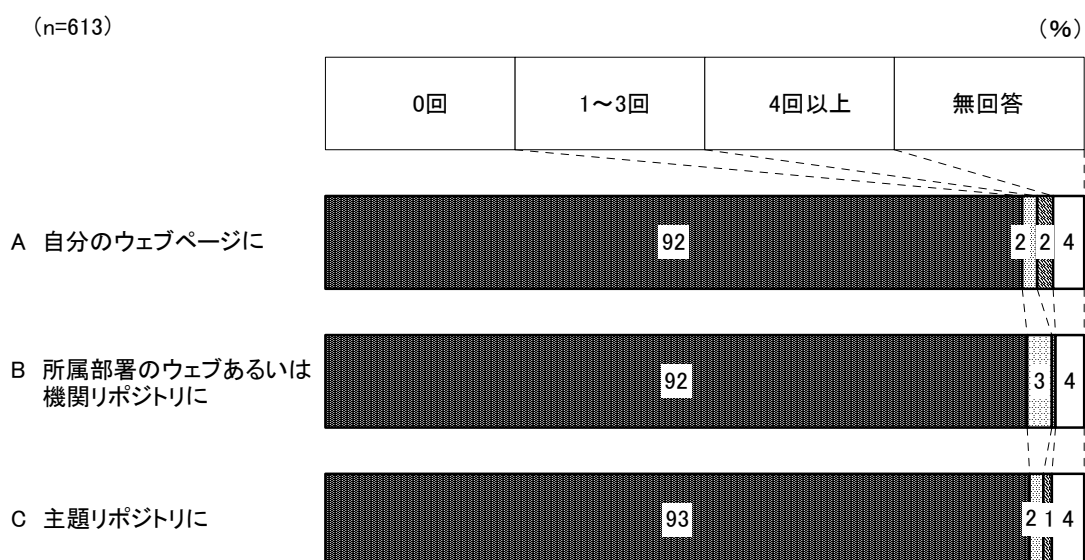
IV セルフ・アーカイビング／リポジトリについて

4－1 セルフ・アーカイビングの経験

(1) プレプリント

- ・最近3年間のプレプリントのデポジット回数をみると、すべての項目とも「0回」が9割強を占めており、デポジットしたことのある人はそれぞれ3%前後と僅かである。
- ・専門分野別にみると、回答者数は少ないが、経済学・商学・経営学は「所属部署のウェブあるいは機関リポジトリに」に「1～3回」公開しているとの回答が25%とやや多くなっている（詳細は Appendix 10(1) 参照）。

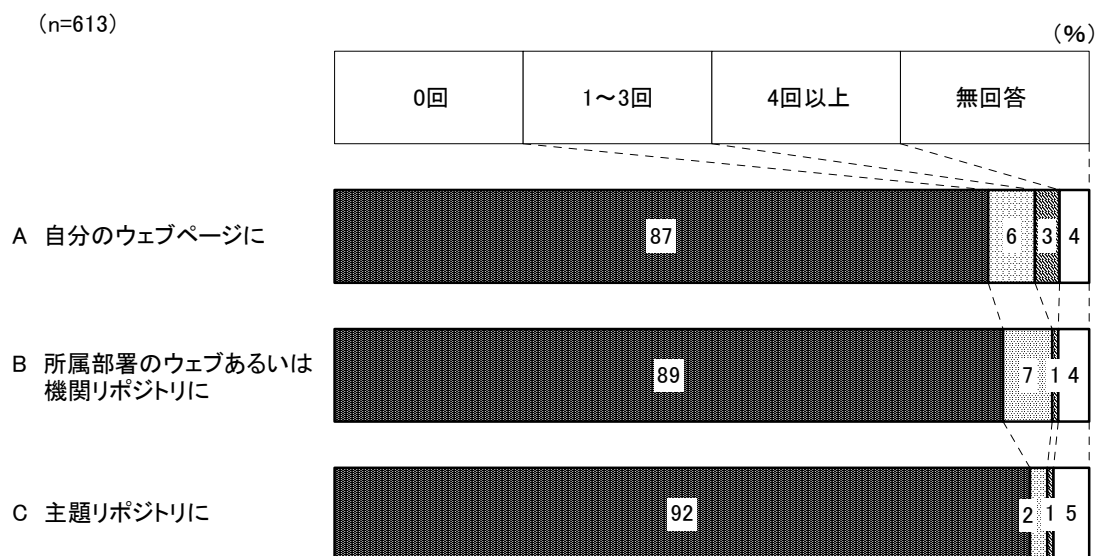
設問 22 最近3年で、プレプリント(査読前論文)の論文全文を何回デポジット(保存・寄託)し、公開したことがありますか。



(2) ポストプリント

- ・ポストプリントについても、「0回」が9割前後と多数を占めているが、「自分のウェブページ」「所属部署のウェブあるいは機関リポジトリ」については「1回以上」が1割弱みられ、プレプリントに比べると若干多くなっている。
- ・専門分野別にみると、農学では「自分のウェブページに」に「1～3回」公開しているが15%とプレプリントに比べると多くなっている。また、「文学等」では「所属機関のウェブあるいは機関リポジトリに」は「1～3回」が13%みられるほか、回答者数は少ないが、経済学・商学・経営学では「所属部署のウェブあるいは機関リポジトリに」に「1～3回」公開しているが26%あり、「自分のウェブページに」「主題リポジトリに」に公開しているとの回答も少なくない（詳細はAppendix 10(2)参照）。

設問 22-1 では、最近3年で、ポストプリント(査読済み論文)または雑誌等に公開済みの論文全文を何回デポジット(保存・寄託)し、公開したことがありますか。

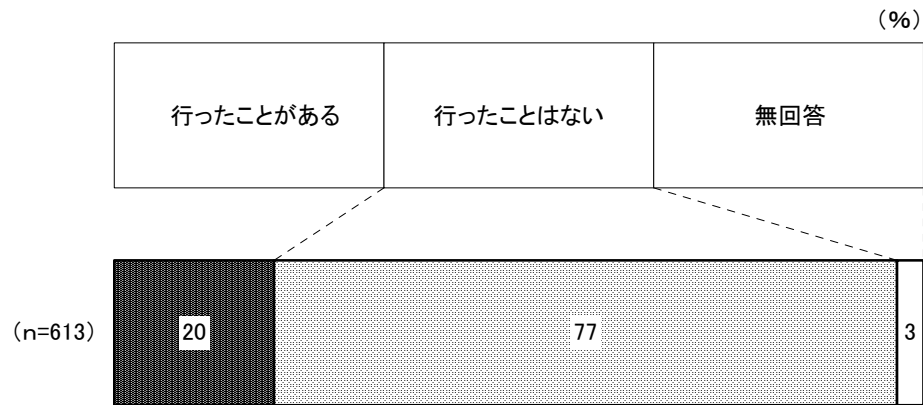


- ・最近3年間にプレプリント及びポストプリントのデポジットをしたことが「ある」とする研究者の割合を再掲すると以下の通りとなる。

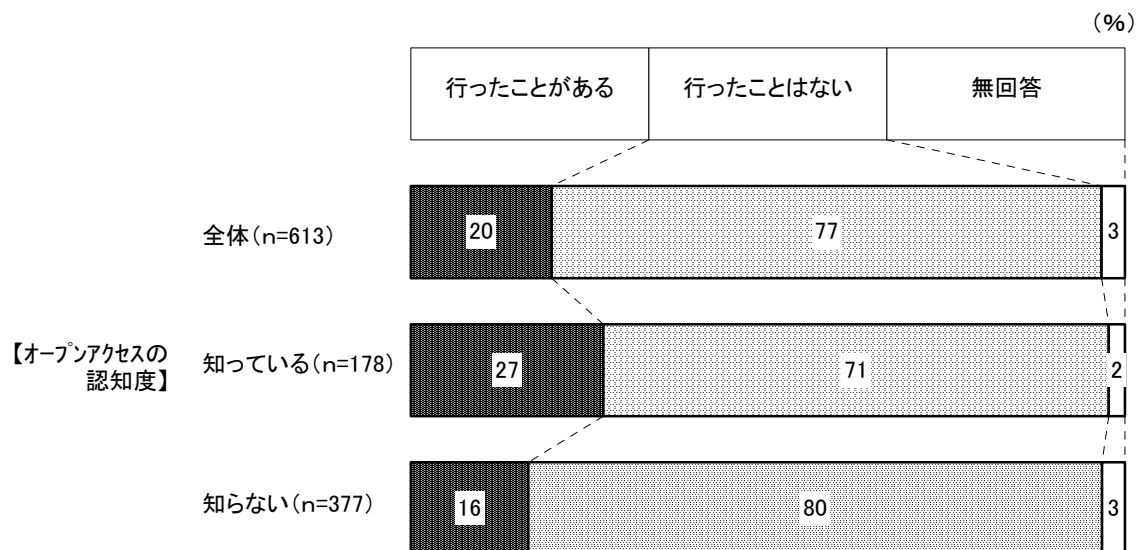
	プレプリント	ポストプリント
自分のウェブページに	4%	9%
所属機関のウェブあるいは機関リポジトリ	3%	8%
主題リポジトリ	3%	3%

(3) セルフ・アーカイピングの経験有無

- ・最近3年間にプレプリント、ポストプリントのいずれかにデポジットを「行ったことがある」とする人は20%にとどまり、「行ったことはない」とする人が77%を占めている。



- ・オープンアクセスの認知度別にみると、オープンアクセスの概念を知っている人でも「行ったことがある」とする人は27%と4分の1にとどまっている。

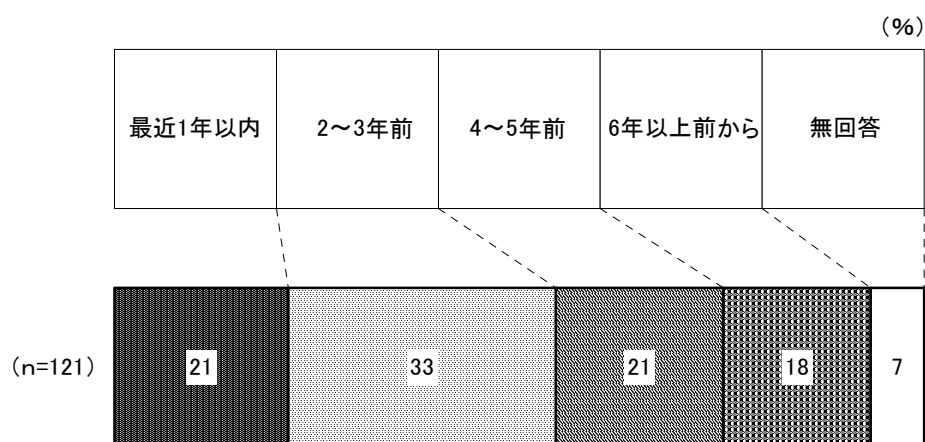


4-2 セルフ・アーカイビングの時期

- ・プレプリント、ポストプリントのいずれかに1回以上デポジットしたことがあると回答した人に、いつからセルフ・アーカイビングを行っているか質問したところ、「2～3年前」が33%、「最近1年以内」が21%となっており、「3年前以内」が54%となっている。
- ・専門分野別にみると、理学や工学では「4～5年前」と「6年以上前から」を合わせると50%前後となっている（詳細は、Appendix 11 参照）。

設問 23、24 は設問 22 と 22-1 の A～C について、いずれかに1回以上デポジットしたことがあると回答された方がお答えください。

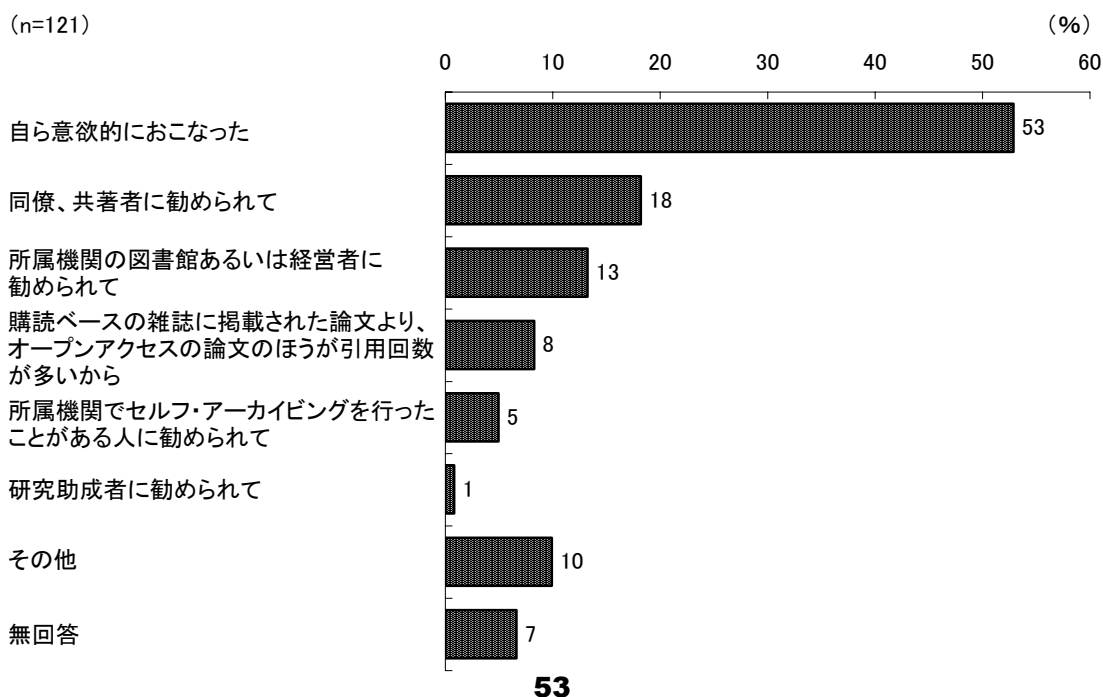
設問 23 何年前からセルフ・アーカイビングを行っていますか。(1つだけ○印)



4-3 セルフ・アーカイビングを行った動機

- ・研究成果のセルフ・アーカイビングを行った動機については、「自ら意欲的に起こった」が53%と群を抜いて多くなっている。

設問 24 研究成果のセルフ・アーカイビングをする動機は何でしたか。(あてはまるものすべてに○印)

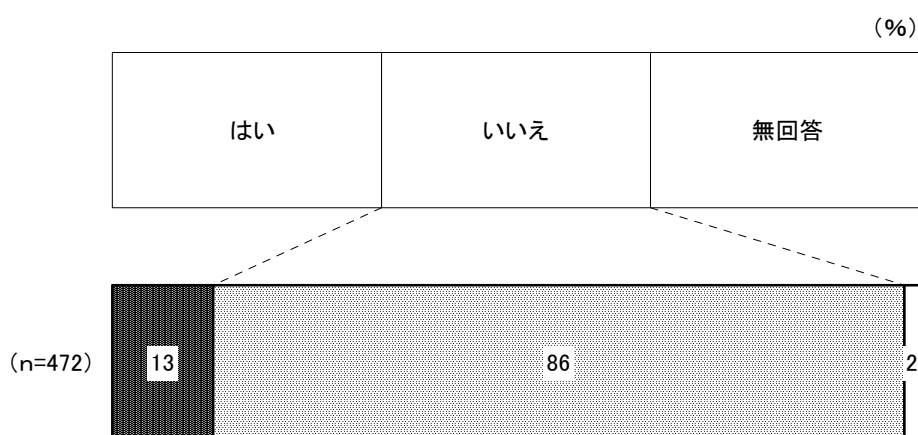


4-4 オープンアクセスの提供方法としてのセルフ・アーカイビングの認知度

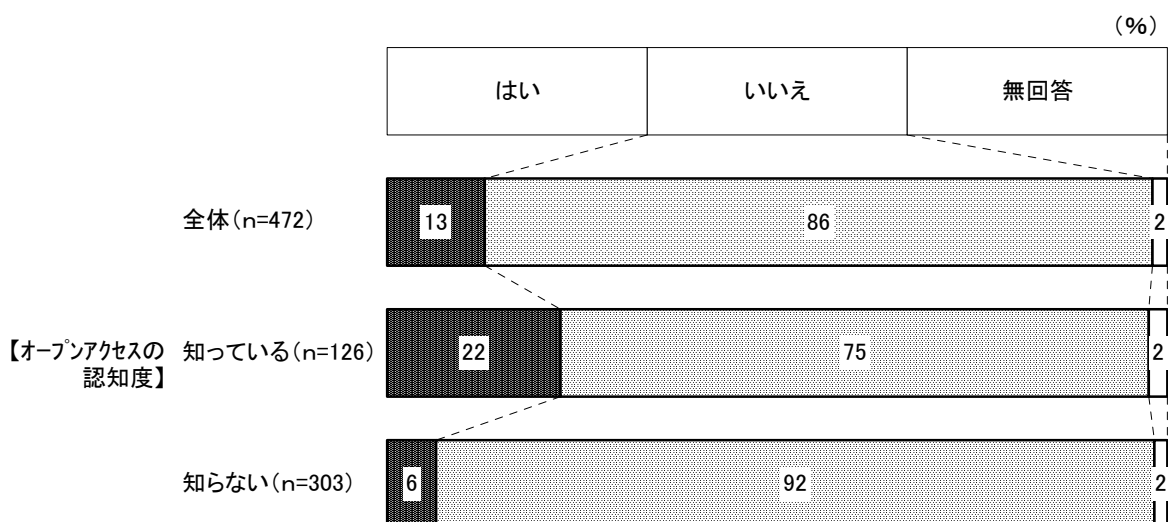
- ・プレプリント、ポストプリントをデポジットしたことがないと回答した人に、オープンアクセスを行っているサイトにセルフ・アーカイビングをすることで自分の研究成果に対するオープンアクセスが可能になるを知っているか質問したところ、「いいえ」が86%を占め、「はい」は13%にとどまっている。

設問 25 は設問 22 と 22-1 の A～C について、デポジットしたことがないと回答された方がお答えください。

設問 25 オープンアクセスを行っているサイトにセルフ・アーカイビングをすることで自分の研究成果に対するオープンアクセスが可能になるということをご存じですか。(1 つだけ○印)



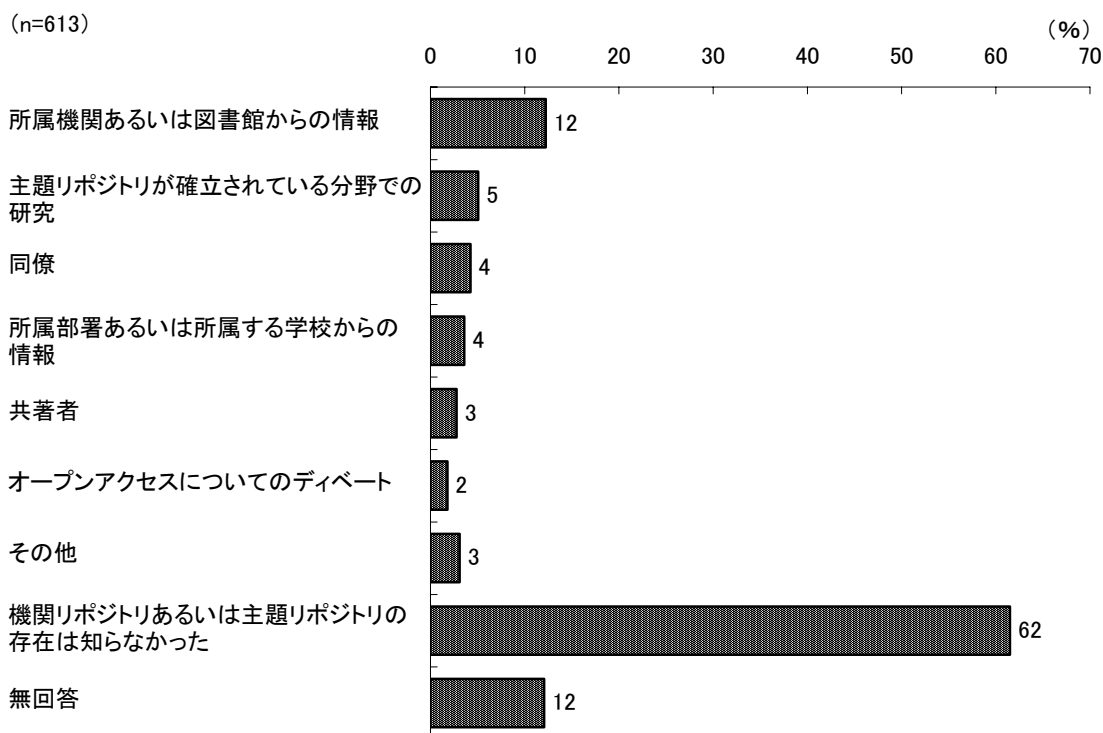
- ・オープンアクセスの認知度別にみると、オープンアクセスの概念を知っている人でも「はい」との回答は22%にすぎない。



4-5 セルフ・アーカイビングを最初に知ったきっかけ

- ・自分の研究成果へのオープンアクセスを可能にする手段としての機関リポジトリや主題リポジトリの存在を知るきっかけとしては「所属機関あるいは図書館からの情報」(12%)をあげる人が1割強みられる程度であり、全体的には「機関リポジトリあるいは主題リポジトリの存在は知らなかった」が62%と多数を占めている。

設問 26 自分の研究成果へのオープンアクセスを可能にする手段としての機関リポジトリあるいは主題リポジトリの存在を知るきっかけは何でしたか。(あてはまるものすべてに○印)



- ・オープンアクセスの認知度別では、オープンアクセスの概念を知っていると回答した人では「所属機関あるいは図書館からの情報」が25%とやや多いが、「機関リポジトリあるいは主題リポジトリの存在は知らなかった」とする人も49%と半数を占めている。

(%)

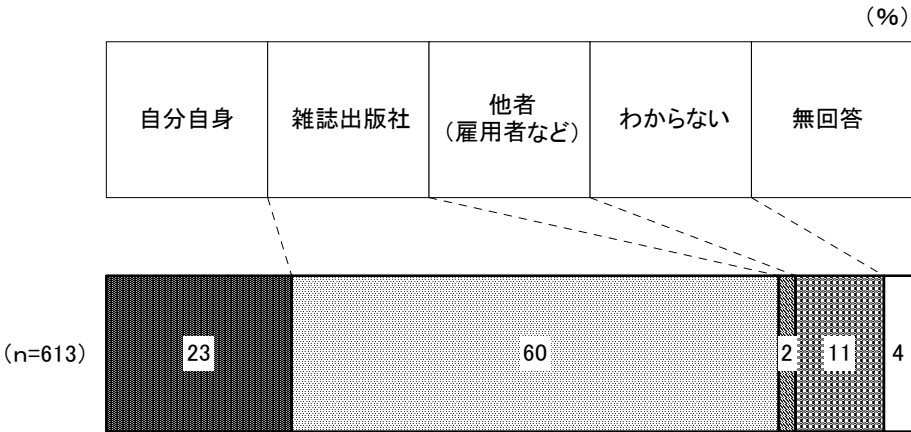
		n数	主題 リポジトリ が確立 されてい る分野 での 研究	オープン アクセス につい ての ディベート	所属機 関ある いは 図書館 からの 情報	所属部 署ある いは所 属する 学校か らの 情報	共著者	同僚	その他	機関リ ポジトリ ある いは主 題リポジ トリの存 在は知ら なかった	無回答
全体		613	5	2	12	4	3	4	3	62	12
オープンアクセス の認知度	知っている	178	7	3	○ 25	6	4	6	4	● 49	▼ 7
	知らない	377	4	1	▼ 6	2	2	3	3	△ 68	14

(注) ☆は全体より15%以上高い数値 ★は全体より15%以上低い数値
○は全体より10～14%高い数値 ●は全体より10～14%低い数値
△は全体より5～9%高い数値 ▼は全体より5～9%低い数値

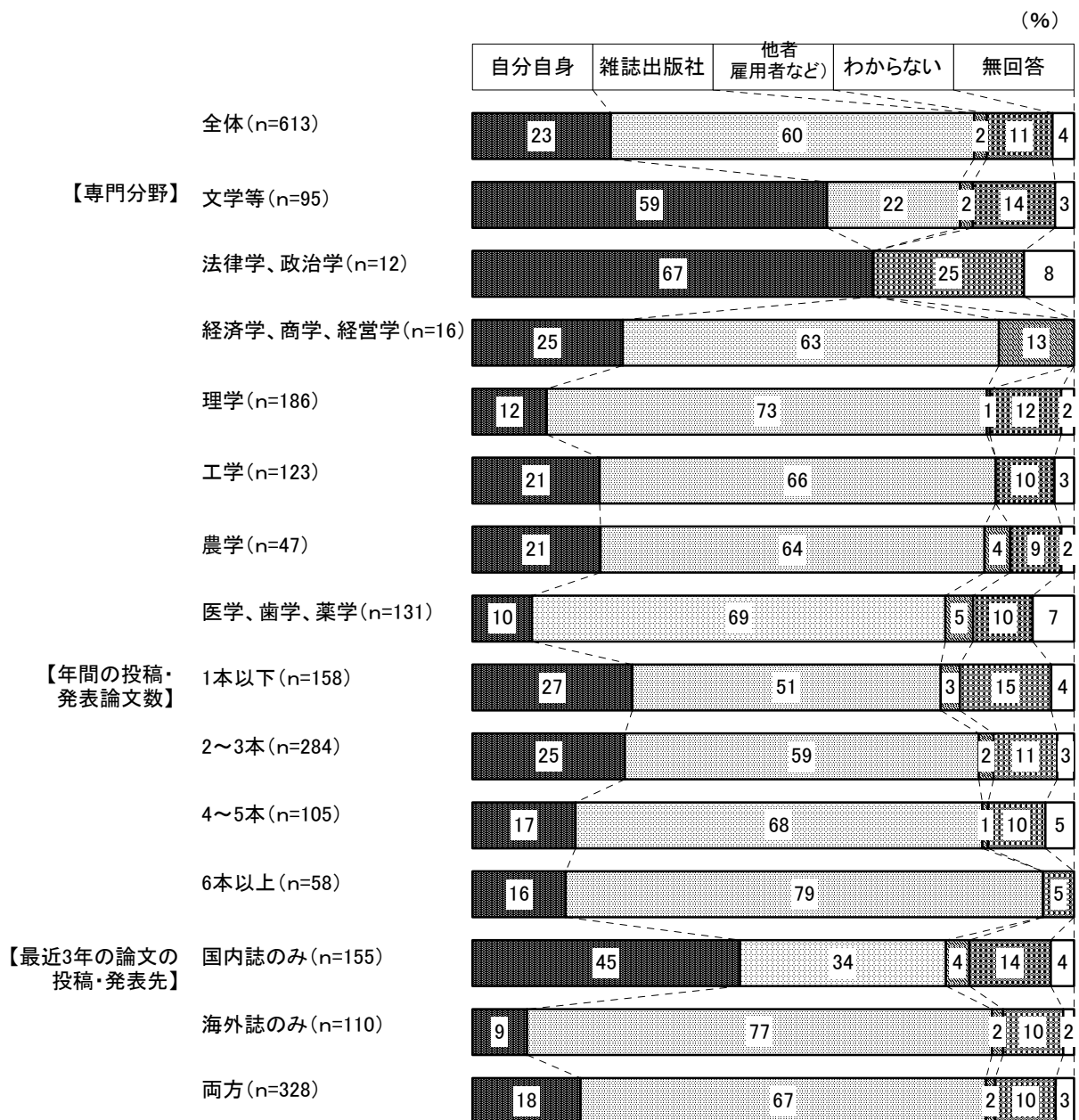
4－6 最新論文の著作権者

- ・最新論文の著作権者について「わからない」との回答は 11%と少ない。著作権者は「雑誌出版社」が 60%と多く、ついで「自分自身」が 23%となっている。

設問 27 あなたの最新論文の著作権者はどなたですか。(1 つだけ○印)



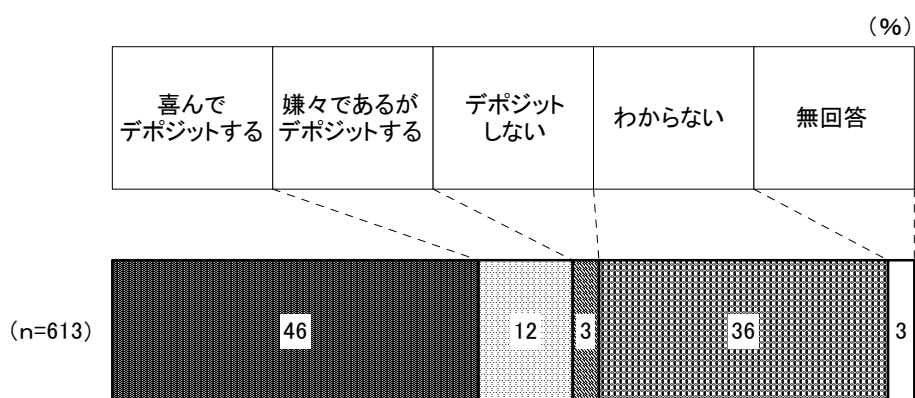
- ・専門分野別に見ると、「文学等」では「自分自身」が59%を占めているが、理学、工学、農学と医学・歯学・薬学では「雑誌出版社」が7割前後と多くなっている。
- ・年間の投稿・発表論文数別に見ると、本数が多くなるほど「雑誌出版社」との回答が多くなっている。
- ・最近3年間の論文の投稿・発表先別に見ると、国内誌のみに投稿している人では「自分自身」が45%なのに対し、海外誌のみや国内誌・海外誌の両方に投稿している人は「雑誌出版社」が7割前後と多数を占めている。



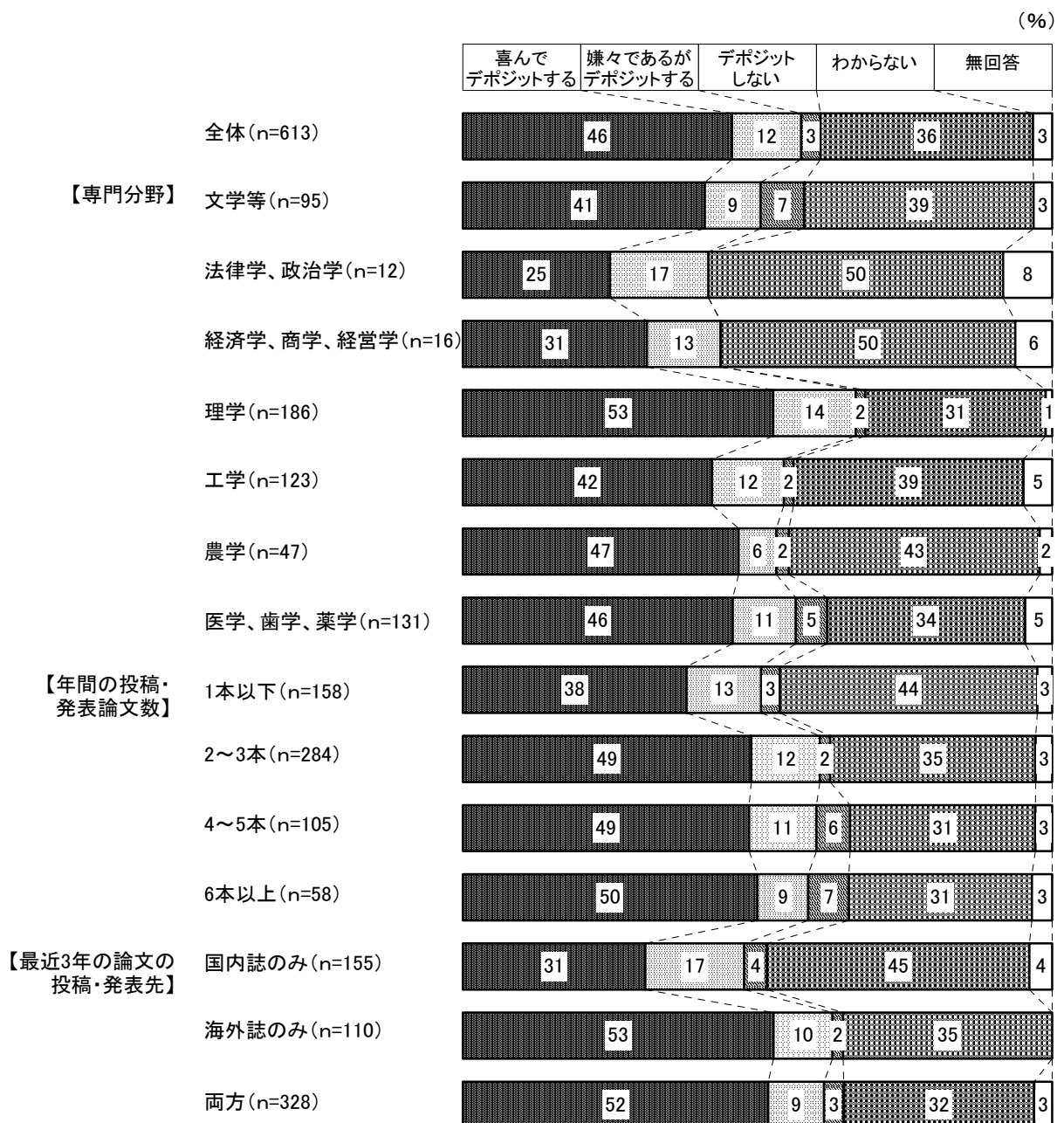
4-7 リポジトリへのデポジット要求に対する態度

- ・雇用者や助成団体から、Green Publisher（著者によるセルフ・アーカイビングを認める出版者）の出版する雑誌に発表した論文をリポジトリにデポジットすることを要求された場合、「喜んでデポジットする」が46%、「嫌々であるがデポジットする」が12%であり、この両者を合わせた58%が“デポジットする”と回答している。一方、「デポジットしない」は3%と少ないが、「わからない」と回答を保留している人も36%いる。

設問 28 雇用者や助成団体が、Green Publisher の出版する雑誌に発表した論文をリポジトリにデポジットすることを要求した場合、どのように思われますか。(1 つだけ○印)



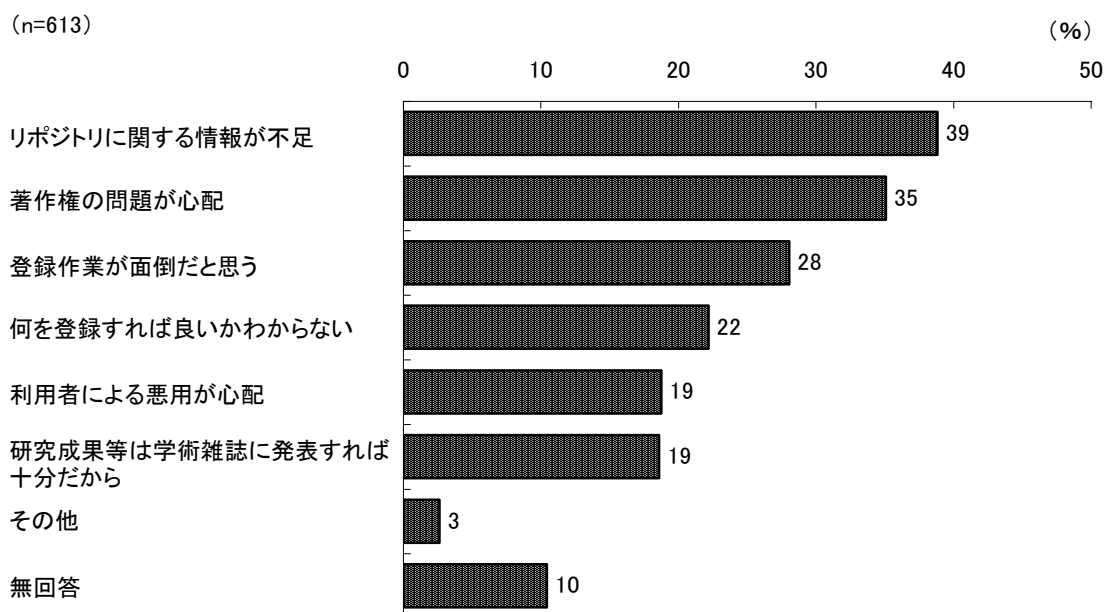
- ・専門分野別にみると、理学では「喜んでデポジットする」が53%と半数を超え、「嫌々であるがデポジットする」を合わせた“デポジットする”との回答が67%と最も多い。
- ・年間の投稿・発表論文数別にみると、論文数が1本以下の人では「喜んでデポジットする」との回答が38%とやや少ない。
- ・最近3年間の論文の投稿・発表先別にみると、海外誌のみに投稿している人と国内誌・海外誌両方に投稿している人では「喜んでデポジットする」が5割を超えているが、国内誌のみに投稿している人では31%にとどまり、「わからない」が半数近くを占めている。



4-8 デポジットする際に気になる点

- ・デポジットしようとする際に気になる点としては、「リポジトリに関する情報が不足」(39%)と「著作権の問題が心配」(35%)が30%台と最も多く、ついで「登録作業が面倒だと思う」(28%)、「何を登録すれば良いかわからない」(22%)が続いている。

設問 28-1 デポジットしようとする際に気になる点をお答えください。(あてはまるものすべてに○印)



- ・専門分野別にみると、医学・歯学・薬学で「著作権の問題が心配」との回答が40%みられる。
- ・年間の投稿・発表論文数別にみると、論文数が4～5本の人では全体的に気になるとの回答率は少なくなっている。
- ・最近3年間の論文の投稿・発表先別にみると、海外誌のみに投稿している人では「著作権の問題が心配」「リポジトリに関する情報が不足」との回答がやや多い。
- ・デポジットの経験有無別みると、デポジットを行ったことがある人では「リポジトリに関する情報が不足」「何を登録すれば良いかわからない」との回答は少なくなっている。

(%)

		n数	著作権 の問題 が心配	登録 作業が 面倒だ と思う	研究成 果等は 学術雑 誌に発 表すべ ば十分 だから	利用者 による 悪用が 心配	リポジ トリに 関する 情報が 不足	何を登 録すべ ば良い かわか らない	その他	無回答
全体		613	35	28	19	19	39	22	3	10
専門分野	文学等	95	35	25	△ 24	△ 27	43	25	1	8
	法学・政治学	12	33	25	△ 25	○ 33	42	○ 33	0	☆ 25
	経済学・商学・経営学	16	31	○ 38	○ 31	19	△ 44	▼ 13	0	△ 19
	理学	186	34	28	20	18	▼ 33	18	5	9
	工学	123	37	27	▼ 13	20	41	▼ 17	2	△ 15
	農学	47	▼ 26	▼ 21	15	▼ 11	43	○ 32	0	▼ 4
	医学・歯学・薬学	131	△ 40	△ 34	17	▼ 14	40	△ 27	2	9
年間の投稿・ 発表論文数	1本以下	158	38	△ 34	21	21	41	△ 29	2	8
	2～3本	284	36	26	20	19	40	22	2	7
	4～5本	105	▼ 27	▼ 22	▼ 12	17	▼ 34	20	4	○ 21
	6本以上	58	△ 40	31	19	▼ 14	40	● 10	5	10
最近3年の 論文の投稿・ 発表先	国内誌のみ	155	33	30	△ 24	22	43	26	1	9
	海外誌のみ	110	△ 40	25	21	15	△ 44	25	3	▼ 5
	両方	328	34	29	16	18	37	20	3	12
デポジット 経験有無	行ったことがある	121	36	25	17	18	▼ 32	● 9	4	△ 16
	行ったことはない	472	36	29	20	19	42	26	2	7

(注)専門分野の「文学等」は「文学・哲学・教育学・心理学・社会学・史学」
 ☆は全体より15%以上高い数値 ★は全体より15%以上低い数値
 ○は全体より10～14%高い数値 ●は全体より10～14%低い数値
 △は全体より5～9%高い数値 ▼は全体より5～9%低い数値

A rectangular box with a thin black border and a light gray background. The word "Appendix" is centered in the box in an italicized serif font. The bottom-right corner of the box is folded over, creating a triangular flap with a darker gray shadow.

Appendix

1 オープンアクセスに対する注意喚起の具体的内容

設問12 最近1年以内に、所属の機関、図書館がオープンアクセス(オープンアクセスジャーナル、セルフ・アーカイビング、機関リポジトリ等)について、あなたの注意を喚起したことはありますか。

【ある一具体的な内容】

●説明会の開催 (31 件) ●論文の提供要請 (16 件)

●通知 (7 件) ●図書委員会 (3 件)

●その他

- ・ 論文がオープンされていること。
- ・ 我々の学会誌をオープンアクセスにしようと提案しているが、実現していない。出版社との関係もある。
- ・ 機械学会の理事会で。
- ・ フォーラムの開催
- ・ パンフレットの配布
- ・ 学会内の話し合い
- ・ J-stage からの問い合わせ
- ・ 電子ジャーナルを開くときに、図書館の HP 上からアクセスするので、同意を求められる。
- ・ Japan Spenser Society
- ・ リポジトリの口頭説明
- ・ リポジトリに関して
- ・ 附属図書館からのアンケート
- ・ 図書館の会議で話題になっていることを間接的に聞いた。
- ・ 文献複写を依頼した際に、オープンアクセスジャーナルの存在を教えてくれた。
- ・ アンケート
- ・ 学会運営で
- ・ 論文 (大学紀要掲載済) の Web 化を推進した。

2 オープンアクセスジャーナルを刊行している団体名と雑誌タイトル

設問 13 あなたはオープンアクセスジャーナルを刊行している団体または刊行されている雑誌のタイトルをご存知ですか。

【知っている一団体名 & 雑誌のタイトル】

団体名	雑誌タイトル
ACPM、ATPM	American Journal of Preventive Medicine
American Society of Hematology	BLOOD
Bio Med Central	BMC Biology
Bio Med Central	BMC Biology
Bio Med Central	BMC Biology
Bio Med Central	BMC Biology
Bio Med Central	Molecular Pain
ECCC	
Elsevier	Journal of Nuclear Materials
Elsevier	Int Rev Cytol
Elsevier	
Elsevier	Materials Research Bulletin
Elsevier B.V.	
Elsevier Science Publisher	Journal of Computational and Applied Mathematics
Elsevier	Phytochemistry
Elswie	Goeumetry and Physies
Footsteps of Man	TRACCE
Geometry and Topology Publication	Geometry and Topology
Geometry and Topology Publication	Geometry and Topology
Geometry and Topology Publication	Algebraic & Gometric Topology
International Association of Radiolarian Palaeontologists	JRADS, RADNEWS,
J.Biol.Chemistry	J.Biol.Chemistry
Japan Spenser Society	
J-Stage	
Labscience	BioMed Central
Oxford University Press	Nucleic Acids Research
Oxford Journals	Nucleic Acid Res、Online Version
Oxford University Press	Nucleic Acids Research
Public Library of Science	PLOS Biology
Science Direct	Gastroenterology
Springer	
アメリカ生化学会	
アメリカ生理学会	American Journal of Physiology
英米文化学会	英米文化
気象学会	Jornal of Meterological Society Japan
心の諸問題研究会	心の諸問題論叢
人工知能学会	人工知能学会論文誌
地盤工学会	地盤工学ジャーナル
長崎大学工学部	長崎大学工学部研究報告
日本グループダイナミック学会	実験社会心理学研究
日本ソフトウェア科学会	コンピュータソフトウェア

団体名	雑誌タイトル
日本レオロジー学会	Nihon Reology Gakkaishi
日本遺伝学会	Genes&Genetic System
日本応用昆虫動物学会	Applied Entomology and Zoology
日本応用動物昆虫学会	Applied Entomolgy & Zoology
日本過酸化脂質・フリーラジカル学会	Journal of Chemical Biochemistry and Nutrition
日本学士院	Proc Japan Acad Ser Math Sci
日本計算工学会	日本計算工学会論文集
日本細胞生物学会	Cell Structure and Function
日本水環境学会	Journal of Enizronmetal Engineey and Technology.3
日本生化学会	J Biochem
日本生物物理学会	
日本農芸化学会	Bioci.Biotechnol.Biochem.
日本表面科学会	e-Journal of Surtace Science and Nanotechnology
日本分析化学会	Anul.Sci.
日本霊長類学会	
北海道教育大学	紀要
北大	HUSCUP
立命館大学法友会	立命館法学
	人工知能学会誌、JAR
	Ecologist
	Cell Structure & Function
	Dental Materials
	紀要など
	World Journal of Surgery
	PNAS
	BMC Cancer
	Nature
	PLOS Genetics
	International Journal of Traus disciplinary Research
	Journal of clinical periodoutology
	PLOS Biolosy
	Documenta Math
	Computer Ernirsnment and Urban Systems
	JBC、PNAS
	BMC Cell Biol
	International Journal of Legal Medicine
	Circulation
	Archiev of Histology and Cytology
	History of Psychiatry
	Journal of Vision
	PLOS Biology
	JBC
	PLOS Computational Biology
	Web AE (Web Journal of Art Education)
	Directory of Open Access Journal
	Journal of Molecular Biology
	Economics Bulletin

3 出版手数料を払いたくない具体的理由

設問 16 オープンアクセスジャーナル出版モデルは一般に研究成果を発表するために著者あるいは所属機関がその出版経費を負担します。現在海外のオープンアクセス出版社は 500 ドルから 1,500 ドルを経費として求めています。実際の出版経費はもっと高いと推測されます。出版社の中には出版経費をまかなうために 3,500 ドル以上請求するところもあるようです。論文が通常の方法で受理されると仮定して、選択した雑誌に論文を発表するためにあなたは(資金提供者の代理として)どのくらいの額を支払う用意がありますか(\$1=110 円換算)。

理由	意見
予算がない (9 件)	・ 資金不足 ・ 資金がない ・ 予算がない。 ・ 該当研究費がない。 ・ 研究費の減少 ・ 研究費がない ・ お金はそんなにない。 ・ 研究費の不足、節約 ・ 余裕がない。
無料で投稿できる雑誌があるから (8 件)	・ 数学では無料で発表できる雑誌が多いので。 ・ ほとんどいつも費用のかからない雑誌に投稿してきたから。 ・ 投稿料無料の雑誌を中心に発表を行っているため (現状)。 ・ 数学では投稿料は普通とられない。 ・ 研究費がただでさえ削減されている昨今、有料のジャーナルより無料の同等インパクトファクターの雑誌に投稿する。 ・ 他の出版社では無料投稿可能なものもあるので、そちらに発表する。 ・ 現在投稿料を払っていないから。 ・ 無料で掲載できる学内紀要での発表で十分であると考えているから。
費用を負担するほどの必要性を感じない (6 件)	・ そうまでして OA にする必要がない。 ・ 必要性がない。 ・ 費用を負担して OA ジャーナルに論文を発表する必要性を感じないから。 ・ 経費を負担してまで OA ジャーナルに投稿しようとは思わない。 ・ 金を払ってまでする必要のない分野であるから。 ・ 支払うほどのメリットがあるとは思えない。
投稿しない (3 件)	・ 投稿しないから ・ 投稿しない ・ 投稿しない。
高い (2 件)	・ 高いから ・ 高すぎ
その他	・ 学会費でまかなうべき団体なので。 ・ 査読掲載料 5000~10000 円くらいまでなら研究費から出費が可能。 ・ 会費でまかなうべき。 ・ 利用者負担が原則だと思うから。 ・ 別刷り代金程度で済んでいるから。 ・ 研究費からなら \$ 500 ぐらい出してもいい。 ・ 商業雑誌の仕事を優先する。 ・ 払いたくない ・ 出版経費が予め支払われているのであれば、掲載料は不要と考える。 ・ 個人が負担することに反対である。 ・ 専門分野での浸透がほとんど見込めないから。 ・ 金を払って論文を書くという概念に違和感があるから。 ・ 大学にそのようなシステムがまだない。 ・ 自分の分野では普及しているとは思えない。 ・ 原稿料・印税で資料等の購入費をまかなっており、公表に出費を要するとこの構造が維持できない。

4 オープンアクセス出版の普及による学術出版システムが崩壊する可能性が高いと 思う具体的理由

設問 20 オープンアクセス出版の普及により既存の学術出版システムが崩壊するかもしれないという意見
がありますが、あなたはどのように思われますか。

理由	意見
書籍は必要なくなる・経営的に難しくなる (27 件)	・書籍が必要なくなるから。 ・様々なことについて電子化、パーペチュアル化が進むと考えられるので。 ・ペーパーレスになるから。 ・冊子を必要としなくなるため。 ・誰もハードコピーを購入しないから。 ・若年者層における出版物（紙を媒体とするもの）離れが大きい。 ・学術に限らず、紙ベースの出版は一部を除いてもうダメ。 ・実際に利用し始めると雑誌をみるのが少なくなったから。 ・本が売れないでしょう。 ・出版物を購入する人が激減すると思われる。 ・既存の学会誌は不要になる。 ・学術商業誌が売れなくなる。 ・学術雑誌が売れなくなるから。 ・印刷物が売れなくなるから。 ・出版社が読者からの購読利用を得られなくなるから。 ・学術出版の冊子の減少傾向有。 ・雑誌販売による収入が期待できなくなる。 ・従来の紙ベースの時代ではなくなった。 ・金儲けができなければやめるでしょう。自然なことだと思います。 ・出版社に利益をもたらすシステムのように思えないから。 ・出版社の財政が悪化する。 ・商業出版社の経営に影響大。 ・収入が見込めなくなるから。 ・運営費が不足する。 ・経済的に出版システムを維持できなくなる。 ・経営が不安定になるし、インパクトファクターの低い雑誌にはお金が払われない(つまり投稿されない)。 ・少なくとも紙を媒体とする方法はなくなると思います。そうするとインターネットで論文にアクセスするとき、それぞれの雑誌ごとに別料金では不便であり、経費を著者が負担した方が合理的と思うから。
OAの方が利便性が高いから (12 件)	・オープンアクセス出版の雑誌の方が多くの利用者にとって利用しやすいと考えられるために、今後より高い支持を得られると考えられる。 ・OA は特に若年層（含む学生）にとって便利だから、彼らの年代が上がるにつれ、既存出版システムは収入を失う。 ・検索のしやすさ ・利便性の点で劣るため。 ・ハードカバー（印刷版）を入取しなくとも、電子ファイルで読みたい論文のみ入取可能であり、利便性が高い。 ・出版速度が速い。OAの方が便利。 ・OAの方が自由度が高いから。 ・紙媒体より早いため有利。 ・OAが普及すれば、入手容易性が高くなるから。 ・必要な文献がすぐ手に入るため、雑誌等場所を取るものは保管しなくなるので購入もしなくなる。 ・時間、コストの競争力が劣る。 ・スピードアップとコスト削減が可能になり、この傾向は加速すると考える。

理由	意見
既存の出版コストが高いから（8件）	・既存のジャーナルの出版コストが高すぎる。 ・出版というコストの高い方法は衰退すると思われる。 ・印刷・製本経費は相当な金額と思われる。 ・既存の学術出版システムの費用が高騰している。 ・既存のシステムは高すぎるから。 ・既存のシステムのメリットが多くないから。既存のシステムは割高だから。 ・雑誌購入代金が高いから。 ・既に雑誌の値段が上がって、大学の予算配分は減って雑誌が取れなくなっている。
OAは無料で情報を入手できるから（7件）	・無料で読むことができるから。 ・OAはお金がかからないシステムだと思うから。 ・アクセス無料というのは強いから。 ・必要な論文のみを無料でネットでいつでも入手可能であれば、その普及と同時に学会誌への投稿は減ずると思う。 ・一部の雑誌をのぞいて、無料でアクセス出来る方が結果として引用回数を増やすことになる。インパクトファクター上昇により、投稿がオープンアクセス出版に流れると思うので。 ・大学財政逼迫の折から、無料で情報が手に入るになると、学術雑誌の購読中止が相次ぐと思われるから。 ・無料で手に入るならお金は支出しない。
その他	・崩壊すべきと思う。 ・権利関係が現行において不明確であるため。 ・利便性を考えると比較できないので。 ・普及の程度によるが。 ・論文レベルの低下、分散。 ・特に文系の学問の存立基盤が危なくなる。 ・「普及すれば」既存のものは不要になるので崩壊する可能性は高いと思う。しかし、普及するかどうかはわからない。 ・伝統が必要。発表審査が厳しくないといけない。 ・格式の低い方へ流れるから。 ・時代はすでにOA化の方向にあるから。 ・オープンな環境によって個々の出版システムの価値がなくなる。 ・同レベルの雑誌の場合、OA出版の方が引用される傾向にあるから。 ・オープンアクセス出版に投稿が集中すると思う。 ・自分の研究分野ではその方向に向かうことを好ましく思わない意見が主流を占めると期待しているが、学術研究全般でその方向の意見が大きいように思えるから。 ・問19-1のように出版社にデータ保持の継続性を求めることは困難であるから。 ・論文の閲覧等に出版利益の発生がなくなり、学術的に良好な増益が得られる。 ・論文の審査（ピアレビュー）が厳正に行われるか心配です。 ・信頼性がありインパクトが高い論文を扱うオープンアクセス出版ジャーナルが出てくれば、そうなると思う。 ・中小はなくなり、Natureだけがclosedでのびる。 ・著作権を危惧するから。 ・既存のものは必要なくなる。 ・崩壊しなくても打撃は大きいと思う。学術出版システムは商売なのだから。 ・今までと出版社の得る資金の流れが根本から変わってしまうため。 ・伝統あるジャーナルとOA方式のジャーナルのみが生き残っていく。 ・利用者の利便性を第一に発展していくシステムであれば既存の出版形態はなくなると思う。 ・印刷物購入の費用負担がOAに移行する。財源は一定なので、一方が優勢になれば他方は成り立たなくなる。 ・取捨選択し、不用（要）なものには手を出さなくなる。 ・大手の出版社は対応できるが、中小の出版社は対応できるゆとりがないだろう。 ・OAが普及するとの前提に立てば他の出版システムのアドバンテージは低くなる。 ・既存のシステムは既に飽和状態にあり、淘汰されると思う。 ・料金体系が従来とは大きく異なるため。 ・特に学会誌の維持とその存在価値への評価が低下するかもしれない。 ・商業的に価値が低くなる。

理由	意見
その他	・特に学協会が中心になっているジャーナルの場合、学協会の会員数が国内外とも減少傾向で、OA 出版により経費が OA にまわるので、会員減となり、価値が低下する。 ・経営的に Pay しない。 ・学術出版するメリットがなくなる。 ・費用を払わない人が多くなるから。 ・低価格で情報を入手できる方法が拡大して購読料が減少するのではないかな。

5 オープンアクセス出版の普及による学術出版システムが崩壊する可能性が低いと 思う具体的理由

設問 20 オープンアクセス出版の普及により既存の学術出版システムが崩壊するかもしれないという意見
がありますが、あなたはどのように思われますか。

理由	意見
紙媒体は必要だから (36 件)	・本という形態で手元に欲しいと思う層は、一定数存在するから。 ・紙媒体の需要はまだあると思う。 ・紙の方が重要（読みやすい、手間がかかる分権威がある） ・紙媒体は重要であることに変わらないから。 ・既存の冊子体を好む研究者はゼロにはならないと思う。 ・ハードコピーの使いよさは電子的には担保できない。 ・文章（紙保存）も長期のことを考えると必要であるため。 ・基本的に紙での文献データは残すべきであり、残るものと思う。 ・ハードで残す必要はあると考える。 ・印刷物への要望は高いと思われる。 ・無料で投稿できる雑誌が必要。紙媒体で残す必要がある。 ・冊子体も有効と思われるから。 ・出版物が不要になるとは思われない。 ・印刷、冊子体の需要が高いから。 ・紙媒体は常に要求が存在するだろうから。 ・オンラインでみるのと手元にいつもジャーナルがある（来る）のは、心理的に大きな差があるため。 ・ハードコピー版も必要である。ゆっくり読むには印刷されたものの方が落ち着いて読めるから。 ・紙の媒体の方が勝れている点もある。 ・電子ジャーナルはよく利用するが、結局読むときは印刷（自前のプリンター）する。ある程度冊子体は必要である。 ・刊行物の価値は別なところにあると考えるから。 ・紙への信仰がそう簡単には崩れないであろうから。 ・電脳だけ一つでは不安。 ・ハードコピーを大切にする文化があるから。 ・雑誌が持つ有用性は消失しない。 ・人文社会科学部門では出版文書への信頼の方が高い。 ・本が一番理解しやすいから。 ・紙媒体による文献資料の価値は不変であると考えられるので。 ・印刷媒体でないと見るのが簡単でない。目が疲れる。 ・人文系の学問ではオンラインで見るには不適切なほど、分量が多く、詳細にわたる論文があるから。 ・オープンアクセスの場合でもきちんと論文等を読むにはプリントアウトして紙媒体にする必要があり、オリジナルの紙媒体（特に書籍）の必要性は減少しない。 ・印刷された図書はこの後も残って、それを利用する人はなくなるらない。 ・研究分野以外の論文を検索を行わず、短時間に読み込むためには紙媒体の方が簡単であると思うため、存在意義がある。 ・新聞社への WebSite が発達しても新聞社が崩壊しないのと同様、活字情報は有用。既存の学術誌の権威の高さ。 ・出版物利用の習慣が根強い。 ・情報としての価値の高い出版物は有料でも購読する人がいると思うので。 ・世界共通ではない。特殊分野はあくまでも H Copy は続く。

理由	意見
両立していくと思うから（16 件）	・共存可能と考えられるから。 ・両立していくと思われるから。 ・併存すると思う。 ・両者にそれぞれ特性・良さがあり、両立していくと考えられるから。 ・両者にそれぞれのファンが付くだろう。 ・論文の性質に応じた棲み分けがされるだろうと思う。 ・新システムと既存システムは両立すると思われるので。 ・オープンアクセスジャーナルが高度な専門、既存のシステムは普及寄りという形で共存できるのではないかな。 ・共存共栄が可能だから。どちらにも良い面があると思う。 ・支援財源によると思われるが、協会などからの補助が必要であり、商業との共存が可能であると思われるため。 ・オープンアクセス出版が普及したとしても、文系や看護系など特定の分野にはその浸透がアクセス技術的にも思想的にも遅いと思われるため、崩壊には至らず、共存になると思う。 ・従来の雑誌が持つ権威と OA ジャーナルの持つ公共性、速報性は共存すると考える。但し、一部の雑誌は淘汰されると思う。 ・コンピュータシステム、紙媒体、いずれも一長一短あるから、どちらかのみというのは考えにくい。 ・両システムが必要。 ・論文発表経費を支払うのだから OA 出版はオリジナル論文発表の場として維持されるはず。そして既存の学術出版システムは、教科書、参考書として使用される書物の出版システムとして、存続し得る。 ・既存のものの中でも多くの人に支持されるものは生き残り、OA と共存できるがそれ以外は崩壊するかもしれない。
既に確立した地位があるから（12 件）	・すでに出版メディアとして確立している。 ・歴史のあるジャーナルが多数あるから。 ・今までの伝統があるから。 ・既に確立された地位があり、それが容易に変化するとは考えられない。 ・所属学会誌が信頼性高く、会員層を獲得しているの。 ・後者の方でステータスがずっと高いから。 ・それなりのステータスを保ち続けると思うため。 ・既存の学術雑誌のステータスは今後とも保たれると考えられるから。 ・既存のシステムにおける雑誌のインパクトや購読者層のひろがり根強いと思われる。 ・現在のジャーナルのフォーマットが幅をきかせている以上、大多数の研究者はフォーマットの高いジャーナルへの採用を望んでいる。これを覆すには OA ジャーナルが既存のジャーナルより高いフォーマット、レベルを満たさなければならない。 ・既存の雑誌が OA ジャーナルになるのなら、それが OA 化として自然にうまくいく道だと思うが、新しい OA ジャーナルができるというなら、地位、質、評価の面で既存の雑誌を越えることは難しいと思う。 ・ブランド志向が根強い。
崩壊することはないと思う（10 件）	・現在でも一部で行われているそうだが、身近で崩壊するというようなことは感じられないし、聞いたことがない。 ・崩壊する理由が思いつかない。 ・価値の多様性が存在し、ゼロにはならない。 ・淘汰される可能性はあるかもしれないが、完全になくなることはないと思うので。 ・そのような力があれば幾つかなくなっているシステムがあっても良いが、そんな話は特に聞かないから。 ・学術出版システムの多様化が進行するであろうが、崩壊することはない。 ・自分の論文を発表したいと思う著者がいる限り、どのような形態にしる、出版事業はなくなる。 ・先の見通しは持っていないが、公表の場が総てなくなるとは思わない。 ・これまでの出版業界は業者間でも浮き沈みがあるので、崩壊には至らないと思う。 ・時代の流れによって出てきた概念であるから、既存の学術出版システムはそれなりに生き残るはず。

理由	意見
必要なものは残る (9件)	・残る雑誌は残ると思うから。 ・必要な文献はお金を払ってでも手に入れる人が多いと思います。 ・必要なものは残るから。 ・インパクトの高いジャーナルは残るから。 ・良い雑誌の価値は変わらないと思うから。 ・多様性が求められる時代だし、良い雑誌は残る。 ・出版の重さよりも内容が focus し、質の高い雑誌はなくなる。 ・良いジャーナルは OA であろうと商業誌であろうと生き残るのは間違いない。 ・既存の学術出版システムにもレベルの高いものがあるため。
OA 出版普及には 時間がかかると思 うから (9件)	・オープンアクセス出版は歴史が浅く、権威ある学術雑誌として認められるには時間がかかると思われるから。 ・オープンアクセス自体がまだ得体の知れない感じで、とても普及しするとは思えないから。 ・徹底するのに時間がかかる。 ・まだオープンアクセス制度が行き渡っていない為。 ・オープンアクセス出版の普及のスピードがそう早くはないと思われるため。 ・自分の専門分野でオープンアクセスが定着するには相当の時間がかかると予想されるため。 ・システム移行には相当な時間がかかると予想される。 ・普及しない。 ・信頼性と格式をオープンアクセスで実現するのはまだ難しいので。
OA ジャーナルへ の投稿費用が高い から (8件)	・オープンアクセス出版がそれほど普及しないと思うから→自己負担が大きい場合。 ・OA ジャーナル投稿費が高すぎる。学術的に躍進している発展途上国の研究者は投稿できないだろう。日本でも地方大の研究者の多くは投稿をしないだろう。したがって、OA ジャーナルだけが生き残るとは思えない。 ・お金を出してまで論文を発表しようとは思わない。 ・個人的な研究は投稿料の安い従来の方法で発表させるを得ない。 ・著者の経費負担が大きすぎる。 ・出版経費の負担額が多額で、今後減少するとは考えられない。アクセスは無料でも研究成果の発表にこのような額は受け入れられないとも思います。 ・オープンアクセス出版が徴収する出版経費の問題と思う。研究成果はそれほど多くの読者を持たず、オープンであることのメリットが少ないので。 ・これまでの Web と出版の関係をみて、出版システムは維持されている。OA が費用を若者側に負担させており、全ての若者がそちらに行くとは思わない。
役割が異なるから (7件)	・それぞれに需要があるから。 ・それぞれに存在価値があるのではないかな。 ・別の意味がある。 ・出版形態が別なので。 ・それぞれの考え方の特徴が異なるから。 ・それぞれがやや異なる役割を持っているから。 ・一定の役割分担がありうる。
全てがOA化する とは思わないから (6件)	・すべてが OA 化されることはない。 ・すべてが OA ジャーナルにならない。 ・全てのジャーナルの特徴をオープンアクセスジャーナルが実現できるとは思えない。 ・すべての研究者が OA に参加することは見込めないため。 ・発表 (公表) 論文の大部分が OA に流れるとは思えない。 ・電子ジャーナル以外での活躍の場もありうる。すべて OA ジャーナルに移行することを良しとしない研究者もいそうだから。
既存システムにニ ーズ・メリットがあ るから (5件)	・専門領域には需要があるため。 ・分野によっては既存のシステムの方が有利。 ・既存システムに固有のメリットがある。 ・文系の場合、既存のニーズが継続するので。 ・私の所属分野では既存の出版システムの方が一般的だから。

理由	意見
その他	・使用されないから ・直観 ・オープンアクセス出版に質の高い論文が集中するとは思えないから。 ・インパクトファクターによる評価がある限り、アクセスの容易さに関係なく商業誌の存在理由はなくなるから。サイテーションインデックスによる評価が有力になれば、オープンアクセスの普及で既存のシステムが崩壊する可能性は出てくると思う。 ・投稿に関して最も重要な基準はインパクトファクターだから、OA ジャーナルのインパクトが低ければ伸びないと思われる。ただ著作権の問題が心配である。 ・質的階層があるから。 ・崩壊しないように新たなシステムを考察すればよい。 ・オープンアクセス出版に格付けが高くなるとは考えにくいから。 ・商業出版社のインパクトファクターはすぐには下がらない為。 ・拝見する限りのオープンアクセスにはリンクの活用が重視されていない。今後は相互の引用による自動的な重みづけが重要な意味を持つだろうから、それらを提供する企業の役割はなくなるから。 ・オープンアクセス出版のうちで重要な論文を集めた冊子媒体の出版等で形を変えて既存の学術出版システムも残る。 ・格式 ・既存のシステムが OA へ移行して存続すると思う。 ・いろいろな考えの人がいるから。 ・少なくとも日本の学協会論文はオープンアクセスになる傾向にあり、それを問題視する意見を聞いたことがない。 ・紙媒体でも OA でもインパクトジャーナルとなるものはそれほど多くはないだろう。OA でも重要な情報にはコストに見合う価格がつくはず。 ・学協会が主として行い、UK のように政府が援助する。 ・既存のジャーナルは editorial board が強力であるものが多いので、すぐには状況は変わらないと思う。問題は、商業出版社がジャーナルの出版から手を引いた時のために、数学者が自分たちで OA ジャーナルを運営する受け皿を用意しておくことだと思う。 ・既存の業務にとらわれず事業転換を図れば需要はある。 ・新システム利用者と旧システム利用者の二分化に至る。 ・出版する場合の付加価値が明快であれば問題ない。 ・既存のシステムも変わると考えられるから。 ・競争関係になるだけであり、オープンアクセス出版が成立しないこともあるから。 ・出版物では違う分野から思わぬ発見を得ることがある。オープンシステムでは専門分野しか検索しないであろう。 ・資金的に運営が難しいのではないかと思います。 ・従来の雑誌購読料と同等の経費を出版社は著者などから徴収しているから、出版社の収入がなくなることはない。ただし、オープンアクセスを採用することにより収支構造がどう変化するかは、それぞれの出版社の事情による。 ・OA システムは既存のシステムを補完するものとして機能すると想像されるため。 ・人の知恵で新しいシステムが考えられるので大丈夫。 ・出版に要する経費は削減されるであろう。著者から経費を徴収する。 ・現在のシステムは、レフリー制がしっかりしている。 ・アーカイブスしか投稿しない。 ・学術出版は論文誌刊行につきるものではない。 ・オープンアクセスが通さない出版もある。

6 オープンアクセス出版の普及による学術出版システムが崩壊する可能性についてはわからないと思う具体的理由

設問 20 オープンアクセス出版の普及により既存の学術出版システムが崩壊するかもしれないという意見がありますが、あなたはどのように思われますか。

意見
・現在のやり方では既存のシステムに勝てないだろうが、より非営利的な方法を選択すれば、既存のシステムに勝てるかもしれない。 ・わからないので。 ・出版会社の事情はよくわからないから。 ・オープンアクセス出版について理解していないから。 ・何故そのような意見が出ているのかわからないので、答えられない。 ・どちらのシステムがより安定しているのか、判断がつかかねるから（財源など）。 ・そもそもオープンアクセス出版についてよく知らないから。 ・インターネット News と新聞の関係と同じ。 ・現状の電子ジャーナルは高すぎる。論文データベースは OA 出版普及後も必要ではないか？ ・OA の普及により既存のシステムは影響を受けると思うが、なくなることはないと思うので。 ・既存システムがよくわからないから。 ・投稿料の問題。OA ジャーナルにしる学術雑誌にしる投稿料の高い所は避けたいから。 ・学術出版システムがどのようなシステムなのかわからないから答えられない。 ・オープンアクセス自体についてよく知らないの。 ・既存の重要度の高い雑誌がオープンアクセスに対応するか、既存のものを超える重要度を持つオープンアクセス形態の雑誌が出てくるかしないと変化はないと思われる。特に化学系など情報化の進んでいない分野では。 ・色々な可能性が考えられ、予測は難しいです。 ・誰でもアクセスできることは良いことのようにも思えるが、全員が必要としているわけではない。 ・やってみないとどうなるか不明。 ・商業誌は苦しくなると思いますが、出版費用があまりかからないというメリットもあり（投稿者にとって）どういうバランスになるかによる。 ・崩壊するものとししないものと分かれると思う。 ・従来のシステムへの慣れ、安心感のため普及には時間がかかりそうである。 ・物事の未来はそう簡単に予測できるものではないと考えています。 ・既存のシステムが崩壊する可能性は高いと思うが、OA が原因とは限らないと思う。 ・現在の学術出版システムの経営状況（財務状況）がオープンでないで、どのような変化が起こるか予想できません。 ・ニーズによって 2 極分化するので両立すると思うが、どちらが優性かはわからないし、同じ立場で議論できないかもしれない。 ・大学が負担している電子ジャーナル費は異常に高いが、歴史のある雑誌へは高くても投稿したいと思うと思う。ケースバイケース。 ・発展途上国等では出版費用負担の問題から OA は普及しにくい→既存のシステムは残るのでは？ ・モデルが理系のものなので、文系特に社会科学系に妥当するのかわかりません。 ・PDF やテキストの使用が可能になっても、コピーとして紙のプリントは減少していないので、同様の理由で出版物の需要はなくなるのではないかと考える。 ・資金の流れによる。既存のシステムがオープン化できるようなシステムを考えるべき。 ・情報を持ち合わせていない。 ・雑誌の読者層によって影響は違ってくるでしょう。 ・完全に無料開放し、かつ、インターネットがかなり普及すれば崩壊するかもしれないが、そのような状況には至らないから。無料開放は難しいであろうし、インターネットの普及もそれほどではないと思う。 ・オープンアクセス出版について知らない。 ・数学では冊子体も重要である。冊子体購入は継続すべきである。そうすれば崩壊はしないと思う。 ・崩壊するかもしれないと思うが、可能性が高いと判定できないから。 ・短期的には崩壊する可能性は低いと思われるが、長期的にはジェネレーションが変われば崩壊する可能性もあり得ると思う。 ・現実性につかめないため。 ・セルフアーカイビング等の可能性（方法論も含めて）がよくわからないので。 ・メリット、デメリット、リスク等よりどうなるか見通しが立たない。

意見

- ・OA 出版の普及スピードと規模もよくわからないし、既存の学術出版システムの有り様も将来的には現状のままではなくなるから。
- ・これは現時点で OA の普及がどのくらい広がるかの予測がつかないためです。
- ・現在、オンラインジャーナルに論文を出して公開している雑誌でも紙に印刷された雑誌と併用している。学術出版システムが崩壊するかどうかはもう少し様子を見ないとわからない。
- ・今のところ、紙媒体での出版の方が権威があると考えられている。しかし、将来的にはわからない。
- ・OA 出版にどれだけ投資するかによる。
- ・OA 出版についての認識が不十分のためもあるが、既存の学術出版システムは維持されるように思う。
- ・OA の普及度がわからないから。
- ・出版社がつぶれるかもしれないが、わからない。
- ・普及の程度がどのようになるか予想できないため。

7 オープンアクセス出版の普及による学協会出版事業が崩壊する可能性が高いと思う理由

設問 20-2 同じく、学協会による出版事業が崩壊するかもしれないという意見についてはどのように思われますか。

理由	意見
書籍は必要なくなる・学会誌は売れなくなる (14 件)	・従来の紙ベースの時代ではなくなった。 ・収入が見込めなくなるから。 ・電子化により、出版という形態への需要が低下するため。 ・若年者層における出版物（紙を媒体とするもの）離れが大きい。 ・書籍が必要なくなるから。 ・既存の学会誌は不要になる。 ・印刷部数の減少有。 ・学協会誌も売れないでしょう。 ・ペーパーレスになるから。 ・学術雑誌が売れなくなるから。 ・様々なことについて電子化、ペーパーレス化が進むと考えられるので。 ・買ってまで読む人は少なくなるであろうから。 ・冊子購入者の減少と若年層の冊子依存度の著しい低下のため。 ・実際に利用し始めると雑誌をみるのが少なくなったから。
OAに移行すると思うから (11 件)	・電子媒体に移行しなければ、資源の無駄であり議論は global で行われるべきであるから、OA化に移行するだろう。 ・既存のものは必要なくなる。 ・時代と共に変化すべき。 ・印刷物購入の費用負担が OA に移行する。財源は一定なので、一方が優勢になれば他方は成り立たなくなる。 ・重複する必要はないし、崩壊しても構わない。 ・取捨選択し、不用（要）なものには手を出さなくなる。 ・すでに学協会でも OA 方式のジャーナルがあり、それ以外はダメになる。 ・オープンアクセス出版を行っている雑誌への投稿が圧倒的に増加していくと思うため。若手研究者は自分の研究成果を多くの人に知ってもらう必要がある。 ・学会の出版事業そのものの方向性がうまく出されていない。 ・学協会の論文はオープンアクセスに移行すると思われるから。 ・一般的な出版の形と違い、学協会の出版事業は対象者も限定されており、オープンアクセスが普及すれば全体的にそちらの方に移行する可能性が高い。
OAの方が利便性が高いから (10 件)	・利便性の点で劣るため。 ・出版速度が速い。検索の際も OA の方が便利。 ・紙媒体より早いので有利。 ・検索のしやすさ ・OA が普及すれば、入手容易性が高くなるから。 ・時間、コストの競争力が劣る。 ・出版物よりも OA 等が便利で、投稿から発表時期が短くなるであろうから。 ・基本的に上と同じ。出版、印刷等の技術が容易になったことも OA ジャーナルの普及の一因ではないかと思われる。 ・論文の質が確保できれば、OA システムの方がより効率的に情報を配信できる。問題は質の確保です。 ・スピードアップとコスト削減が可能になり、この傾向は加速すると考える。

理由	意見
経営的に厳しくなるから（9件）	・資金の点より ・経費負担で出版事業が困難になる。 ・学協会の資金難。 ・商売だから。 ・コストの高騰、専門出版社の競争の激化により、ボランティアベースの編集体制に限界がある。 ・会費を払わなくなるから。 ・経営が不安定になるし、インパクトファクターの低い雑誌にはお金が払われない(つまり投稿されない)。 ・文科省が援助しなくなると思うから。 ・各学会費の負担が多く、できる限り所属学会を整理したいと考えている研究者は多いと思いますので、オープンシステムになれば学会所属の意識が薄れると思います。
既存の出版コストが高いから（5件）	・投稿料が高く、問題となっている（学協会出版）。 ・投稿料が高すぎ、外国の private な出版社（投稿料は無料）に投稿される傾向が増すため。 ・雑誌購入代金が高いから。 ・コストが高すぎる。 ・高いから。不必要に良い紙を使いすぎている。
学会誌への投稿が少なくなると言うから（5件）	・学会誌などはすべての人がいつも必要なものではない。毎月の出版などはなくなるのではないか。 ・学協会の大きさにもよるが、小さいところは投稿数が少なくなるのでは。 ・海外誌への投稿が更に容易となり、海外誌投稿を好む傾向が加速される（より多くの読者を対象としやすい）。 ・特に学会誌の維持とその存在価値への評価が低下するかもしれない。 ・学会活動のメインである出版事業に対し、論文が集まらなくなる恐れがある。
OAの方がお金がかからないから（2件）	・よりお金（必要経費）を少なくして、成果を公開できるから。 ・必要な論文のみを無料でネットでいつでも入手可能であれば、その普及と同時に学会誌への投稿は減ずると思う。
その他	・これまでと同じなら崩壊するでしょう。柔軟に変化していくべき。 ・長編のものは読みにくくなるので文系の学問は崩壊する。 ・「普及すれば」既存のものは不要になるので崩壊する可能性は高いと思う。しかし、普及するかどうかはわからない。学協会（特に日本の）の崩壊する可能性は出版社より大きいと思う。 ・学協会のセクト的考えによって運営されることが多いから。 ・安易な方へ流れやすいから。 ・インパクトの高くないものが多いから。 ・学協会がオープンアクセスを管理すればよい。 ・著作権を危惧するから。 ・質的価値を高めることができなければ採算はとれなくなると思われる。 ・和文誌はOA化されていない現在でもその存在意味が問われかねない状況にある。 ・小さな学協会では対応しきれないのでは。 ・学会の運営状況により変化する。 ・論文レベルの低下、分散。 ・インターネットで公開してただの受益者が増えた。 ・事業規模が小さいから。 ・その可能性はあるように思う。 ・普及の程度による。 ・オープンアクセスでないものが多いから。 ・学会のサービスのあり方とも関係する。

8 オープンアクセス出版の普及による学協会出版事業が崩壊する可能性が低いと思う理由

設問 20-2 同じく、学協会による出版事業が崩壊するかもしれないという意見についてはどのように思われますか。

理由	意見
紙媒体は必要だから (24 件)	・ 電脳だけ一つでは不安。 ・ 本という形態で手元に欲しいと思う層は、一定数存在するから。 ・ 基本的に紙での文献データは残すべきであり、残るものと思う。 ・ 紙媒体の需要はまだあると思う。 ・ 紙媒体は重要であることに変わりないから。 ・ 人文社会科学部門では出版文書への信頼の方が高い。 ・ 印刷、冊子体の需要が高いから。 ・ 紙媒体は常に要求が存在するだろうから。 ・ 紙の媒体の方が勝れている点もある。 ・ 無料で投稿できる雑誌が必要。紙媒体で残す必要がある。 ・ 本にはそれなりの良さがああり、生き残ると考えられる。 ・ 論文誌だけが学協会の出版物ではない。特に会議の寄稿は今でも紙が好まれる。 ・ 紙媒体による文献資料の価値は不変であると考えられるので。 ・ 出版物利用の習慣が根強い。 ・ 出版物が不要になるとは思われない。 ・ オープンアクセスの場合でもきちんと論文等を読むにはプリントアウトして紙媒体にする必要があり、オリジナルの紙媒体（特に書籍）の必要性は減少しない。ただし、雑誌の場合は書籍よりは崩壊の可能性は高いだろう。 ・ オープンアクセスの危険性を認識している、あるいはデジタルデバイドがあり出版（印刷）を止められない学協会があるから。 ・ 研究分野以外の論文を検索を行わず、短時間に読み込むためには紙媒体の方が簡単であると思うため、存在意義がある。 ・ 雑誌が持つ有用性は消失しない。 ・ それほど急激にはならないし、ゆっくり読むには印刷されたものの方が落ち着いて読めるから活字版の需要もなくならないと思う。 ・ 冊子体の存続も有効であるため。 ・ オンラインでみるのと手元にいつもジャーナルがある（来る）のは、心理的に大きな差があるため、いきなり買わなくなったりする可能性が低いから。 ・ オープンアクセス出版はまだ一部分であり、従来の製本書籍が完全になくなることはないと思う。利用は少なくなるかもしれないが、崩壊には至らないと思う。 ・ 印刷媒体でないとアクセスが将来的に困難になる。オープンアクセス出版社が本当に永続的にサービスを続けられるか不確定。

理由	意見
学協会が存在する限り出版事業もなくなる（20 件）	・学協会組織が存在するかぎりは、それが出版事業をしないということは考えられないから。 ・学協会による出版が妥当性（論文の）が高い。 ・学協会が存在するならその存在目的の出版事業はなくなるであろう。 ・学会の出版システムは論文情報だけに留まらず引用等他の重要なデータを含むので。 ・自分の論文を發表したいと思う著者がいる限り、どのような形態にしる、出版事業はなくなる。 ・会員はその所属学会については、愛着があり、そこにも論文を出すと考えてる。 ・学会として会費から發刊すれば崩壊しない。 ・学会員が集まっている限り大丈夫なのでは？ ・学協会が存続するかぎり、一定のニーズは発生するであろうから。 ・学会に所属すれば年会費を会員が支払っており、それは出版事業の一部として利用されている。 ・会員により維持されると思われる。 ・紙での出版はなくなるか、電子ジャーナルとして出版することになるので、出版事業はなくなると思う。出版経費も入ることなので存続すると思う。 ・学会費などの資金があるので、OA より資金的には良いのではないかと思います。 ・学協会の存立意義の一つが出版事業であると思うから。 ・学会員の支持によって持続する。 ・学協会での發表には専門家の購読が見込めるから。 ・会員に対する一定数の販売が見込めるため。 ・学会の公費収入で支えられているから。 ・学会費でまかなうべき団体なので。 ・基本的に学術活動は学協会を Unit して行っているから。
出版以外の役割があるから（12 件）	・文系の場合、退学後のニーズが継続するので。 ・学会において、顔を合わせることも必要である。 ・メンバーシップはより密な交流を保障する仕組みとしてなくなると思う。 ・学協会の存在意義、会員の存在があるため。 ・学協会にとって、出版事業は活動の一部にすぎないから。 ・論文以外の要素も大きい。会報などの意味。 ・論文とは無関係に会員は多数存在している。 ・学会の活動として必要だから。 ・出版事業により経営を維持しているわけではない。 ・学術出版は論文誌刊行につきるものではない。 ・査読を行う人のリスト、特定の専門分野の雑誌の維持などは学協会で管理する必要があるから。産業界との連携の乏しい学問分野においては通常の商業誌による運営は困難だと思います。 ・学協会は出版事業によって経済的に維持されていない。
OA 出版普及には時間がかかる（8 件）	・オープンアクセス自体がまだ得体の知れない感じで、とても普及するとは思えないから。 ・普及しない。 ・自分の専門分野でオープンアクセスが定着するには相当の時間がかかると予想されるため。 ・オープンアクセス出版は歴史が浅く、権威ある学術雑誌として認められるには時間がかかると思われるから。 ・オンライン情報の信頼性が確立していないように思う。 ・どの程度広まると思うかによるが、それほど大きくなるとは思えない。 ・徹底するのに時間がかかる。 ・普及しないから
両立していくと思う（7 件）	・新システムと既存システムは両立すると思われるので。 ・共存共栄が可能である。 ・どちらも営利の追求度が低いから、共存可能と思える。 ・両立していくと思われるから。 ・それぞれに良さがあると思うから。 ・両者にそれぞれの特徴がある。 ・論文の性質に応じた棲み分けがされるだろうと思う。

理由	意見
既存システムにニーズ・メリットがあるから（7件）	・研究成果の評価等で利点は残ると思うから。 ・分野によっては既存のシステムの方が有利。 ・既存システムに固有のメリットがある。 ・学会の認定医、専門医等取得の条件に学協会雑誌発表がある。従って、専門分野の方が購読層は広い状況は続くものと思います。 ・OA ジャーナルがすべての分野のあらゆるレベルをカバーすることは不可能と思われる。少しでもニーズがあれば、細々としながらも継続していくと思う。 ・学協会は専門的な物を集めているため。 ・インパクトファクターによる評価がある限り、アクセスの容易さに関係なく商業誌の存在理由はなくなるから。サイテーションインデックスによる評価が有力になれば、オープンアクセスの普及で既存のシステムが崩壊する可能性は出てくると思う。
役割が異なるから（6件）	・独自の目的があるから。 ・一定の役割分担がありうる。 ・出版形態が別なので。 ・それぞれがやや異なる役割を持っているから。 ・それぞれの役割が異なると思うので。 ・学協会は会員の会費収入によって出版事業を行っており、オープンアクセス出版とは競合しない。
既に確立した地位があるから（6件）	・すでに出版メディアとして確立している。 ・activity は下がるだろうが崩壊まではいかない。ステイタスを持ち続けるだろう。 ・学協会誌の築いてきた伝統と価値への信頼は根強いと考えられる。 ・論文出版を学協会が権威づけるシステムは頑強であると思われる。 ・後者の方でステータスがずっと高いから。 ・時代の流れによって出てきた概念であるから、既存の学術出版システムはそれなりに生き残るはず。 ・価値の多様性が存在し、ゼロにはならない。学会としての Status がある。
全てがOA化するとは思わないから（4件）	・ジャーナルや学会の多様性のために、OA ジャーナルではカバーできない。 ・すべての書籍がオープンアクセスになる訳ではないと思うので。 ・すべての研究者がOAに参加することは見込めないため。 ・発表（公表）論文の大部分がOAに流れるとは思えない。
OA ジャーナルへの投稿費用が高いから（4件）	・著者の経費負担が大きすぎる。 ・お金を出してまで論文を発表しようとは思わない。 ・出版経費の負担額が多額で、今後減少するとは考えられない。アクセスは無料でも研究成果の発表にこのような額は受け入れられないとも思います。 ・これまでの Web と出版の関係をみて、出版システムは維持されている。OA が費用を若者側に負担させており、全ての若者がそちらに行くとは思わない。
必要なものは残る（4件）	・特徴あるものは可能性は低いと思う。 ・J-stage のような形であれば、出版事業が崩壊しているとは言えない。 ・人気のあるジャーナルはつぶれないと思う。 ・必要なものは残るから。
その他	・既存のシステムがOAへ移行して存続すると思う。 ・少なくとも日本の学協会論文はオープンアクセスになる傾向にあり、それを問題視する意見を聞いたことがない。 ・先の見通しは持っていないが、公表の場が総てなくなるとは思わない。 ・むしろ活発になると思われる。OA 出版の方が人手・お金が少なくすむから。 ・雑誌の販売によって経費を確保する必要がなければ問題はない。 ・一定の財源と購読層が見込める。 ・公共的な歳出によりまかなわれるように制度変更されれば。 ・学協会もうまくオープンアクセスを利用するから。 ・崩壊する理由が思いつかない。 ・OA を学協会が政府援助により行う。 ・直観 ・学会のジャーナルこそOAジャーナル化するべきだと思う。 ・アーカイブスしか投稿しない。 ・ある程度学会費等で補填可能。

理由	意見
その他	・学協会は、基本的には出版に頼るシステムであるべきではないと思う。従って、崩壊しない方法があるはず。 ・いよいよ崩壊するとなったら、海外の一流誌への投稿はやめようという運動が、今よりもずっと本格的になされると思うから。そして、多くの人が本音ではそう感じていると思うから。 ・査読のシステムがしっかりしているから。学協会でオープンアクセスを推進する可能性もある。 ・現在は電子媒体にアクセスしにくい学会員も多いと思うが、将来的にはどうなっていくか見通しがつかないため。 ・元来、営利目的ではないはずなので。 ・投稿に関して最も重要な基準はインパクトファクターだから、OA ジャーナルのインパクトが低ければ伸びないと思われる。ただ著作権の問題が心配である。 ・地道であれば。 ・何のために出版しているかわかっていれば OK。 ・学協会は論文ジャーナルに活路を見出すのではなく、専門的書物、テキスト等の出版により特化するとよい。 ・サポートは必要。 ・学協会の出版物は購入しても安い。発展途上国の研究者、日本の地方大学研究者にも簡単に購入可能。 ・崩壊しないように新たなシステムを考察すればよい。 ・学協会の中身がよくわかりませんが、形を変えて出版事業は継続されるでしょう。 ・格付けが高いものにする努力がされるから。 ・事業のあり方について、変わると思うから。 ・専門分野ごとの学協会はさほどコストがかかっていないようだから。 ・商業出版社のインパクトファクターはすぐには下がらない為。 ・当面の間は、学会による公平性、正当化機能は有効に機能する。 ・Web のみの出版にすれば、最小限の費用で発行が可能である。 ・著作権料等により、利益を上げること考えればよい。 ・オープンアクセス出版のうちで重要な論文を集めた冊子媒体の出版等で形を変えて既存の学術出版システムも残る。 ・従来の方法を死守しようとする学協会も多いと考えられる。 ・査読の質を確保しやすそうだから。 ・著者と学協会は自分の研究分野の仲間たちで構成されている。 ・学術出版システムの多様化が進行するであろうが、崩壊することはない。 ・適切なビジネスモデルが必要。 ・OA は学協会の事業の欠点を補うものとして機能すると想定されるため。 ・使命と思って出版されているようだから。 ・それなりに対策をたてる。 ・学協会が崩壊する心配より、研究者の質が崩壊する心配をすべき。 ・専門的内容は学会誌の方が高いと思う。

9 オープンアクセス出版の普及による学協会出版事業が崩壊する可能性についてはわからないと思う具体的理由

設問 20-2 同じく、学協会による出版事業が崩壊するかもしれないという意見についてはどのように思われますか。

意見
・学協会のあり方に依存するのでわからない。 ・オープンアクセス出版について理解していないから。 ・現在のやり方では既存のシステムに勝てないだろうが、より非営利的な方法を選択すれば、既存のシステムに勝てるかもしれない。 ・すみ分けができるかもしれないが、競争原理で崩れるかもしれない。 ・費用とのバランスになるので、どうなるか不明。 ・学協会の出版事業とは？学会誌はそれで金儲けをしているわけではないので、コストが下がるのであればOAを歓迎するのでは？ ・抵抗感はあるが、このままの流れでいくと崩壊せざるを得ないのかもしれない。 ・現段階で可能性が未知数であると思われるため。 ・何故そのようなコメントが出ているのか背景がわからないので、答えられない。 ・学協会では、ジャーナルの出版のみで収入を得ている訳ではないので、影響は大きいと思うが崩壊するかまではわからない。 ・努力しなければ崩壊するだろうし、事業を成立させるためには、現状のままではダメでしょう。 ・分野によるように思う。 ・既存のシステムが崩壊する可能性は高いと思うが、OAが原因とは限らないと思う。 ・学協会という言葉がわかりません。 ・学協会による出版事業とOA出版との関係が私には見えないから。 ・本当にわからないので。 ・既得権を学協会が譲らない可能性が高いから。 ・OA出版にどれだけ投資するかによる。 ・そもそもオープンアクセス出版についてよく知らないから。 ・インターネットNewsと新聞の関係と同じ。 ・学協会への信頼と権威は保たれていくだろうから。 ・学協会がOAを維持する方策をとることは可能だと思われる。 ・OAの普及により既存のシステムは影響を受けと思うが、なくなることはないと思うので。 ・その学会の考え方が大きく影響する。 ・ジャーナルの採択レベルのバラエティーは必要なので、雑誌の種類は複数必要である。そのような態勢がオープンアクセス出版社のみで維持されるかよくわからない。 ・学協会の出版事業をよく知らないから。 ・学協会による出版事業は学協会の活動とともに持続されるように思われる。 ・こういったことについての私の知識が乏しいから。 ・ジャーナルの質による。 ・学協会とは何か知らない。 ・投稿者が使い分けるのではないか。あるいは専門分野により差があるかも。 ・ダメになるものもあるだろうし、存続するものもあるだろう。 ・既存システムがよくわからないから。 ・原著論文以外の出版事業がどうなるか不明。 ・学協会の出版事業について知らない。 ・現実性がつかめないため。 ・運営次第と思うので。現状のままでは崩壊する可能性が高いと思う。 ・何が危惧されているのかよくわからないので。 ・「学協会」を知らなかったの。 ・既存の重要度の高い雑誌がオープンアクセスに対応するか、既存のものを越える重要度を持つオープンアクセス形態の雑誌が出てくらかしなないと変化はないと思われる。特に化学系など情報化の進んでいない分野では。 ・OAの普及度に依存するだろう。 ・「学協会による出版事業」について、よく理解していない。 ・同じくOA出版の活用のスピードとその広がりがどれくらいになるのか、全く予測がつかないから。 ・これは現時点でOAの普及がどのくらい広がるかの予測がつかないためです。 ・普及の程度がどのようになるか予想できないため。

意見
・学協会の特性によると思う。一概に崩壊する、しないとは考えにくい。 ・モデルが理系のものなので、文系特に社会科学系に妥当するの否か不明。 ・設問 20-1 と同じ理由に加え、振り込み用紙の添付のための媒体として使われる可能性がある。 ・学協会毎の生き残り競争が起きれば、吸収、合併等が生まれると思うから。 ・わからないと思うが、もしかしたら低価格で情報を入手できる方法が拡大して購読料が減少することが起こるかもしれない。

10 専門分野別セルフ・アーカイビングの経験

(1) プレプリント

- ・専門分野別にみると、回答者数は少ないが、経済学・商学・経営学は「所属部署のウェブあるいは機関リポジトリに」に「1～3回」公開しているとの回答が25%とやや多くなっている。

設問 22 最近3年でプレプリント(査読前論文)の論文全文を何回デポジット(保存・寄託)し、公開したことがありますか。

(%)

		n数	自分のウェブページに			所属部署のウェブ あるいは機関リポジトリに			主題リポジトリに		
			0回	1～3回	4回以上	0回	1～3回	4回以上	0回	1～3回	4回以上
全体		613	92	2	2	92	3	0	93	2	1
専門分野	文学等	95	95	2	1	93	4	1	97	1	0
	法学・政治学	12	★ 67	0	0	★ 67	△ 8	0	★ 75	0	0
	経済学・商学・経営学	16	● 81	6	6	★ 75	☆ 25	0	▼ 88	6	0
	理学	186	91	4	3	93	3	1	90	4	3
	工学	123	89	2	4	93	1	1	93	1	1
	農学	47	△ 98	0	0	96	4	0	96	2	0
	医学・歯学・薬学	131	95	0	0	95	1	0	95	0	1

(注)専門分野の「文学等」は「文学・哲学・教育学・心理学・社会学・史学」
 ☆は全体より15%以上高い数値 ★は全体より15%以上低い数値
 ○は全体より10～14%高い数値 ●は全体より10～14%低い数値
 △は全体より5～9%高い数値 ▼は全体より5～9%低い数値

(2) ポストプリント

- ・専門分野別にみると、農学では「自分のウェブページに」に「1～3回」公開しているが15%とプレプリントに比べると多くなっている。また、「文学等」では「所属機関のウェブあるいは機関リポジトリに」は「1～3回」が13%みられるほか、回答者数は少ないが、経済学・商学・経営学では「所属部署のウェブあるいは機関リポジトリに」に「1～3回」公開しているが26%あり、「自分のウェブページに」「主題リポジトリに」に公開しているとの回答も少なくない。

設問 22-1 では、最近 3 年でポストプリント(査読済み論文)または雑誌等に公開済みの論文全文を何回デポジット(保存・寄託)し、公開したことがありますか。

(%)

		n数	自分のウェブページに			所属部署のウェブ あるいは機関リポジトリに			主題リポジトリに		
			0 回	1～3 回	4 回以上	0 回	1～3 回	4 回以上	0 回	1～3 回	4 回以上
全体		613	87	6	3	89	7	1	92	2	0
専門分野	文学等	95	△ 92	5	0	▼ 83	△ 13	0	95	1	1
	法学・政治学	12	● 75	▼ 0	0	● 75	▼ 0	0	★ 75	0	0
	経済学・商学・経営学	16	● 75	○ 19	0	● 75	☆ 26	0	● 81	○ 12	0
	理学	186	84	7	6	90	5	2	91	4	1
	工学	123	84	6	7	89	3	1	92	2	1
	農学	47	83	△ 15	0	△ 94	6	0	94	4	0
	医学・歯学・薬学	131	△ 93	2	1	91	5	2	95	1	1

(注)専門分野の「文学等」は「文学・哲学・教育学・心理学・社会学・史学」

☆は全体より15%以上高い数値 ★は全体より15%以上低い数値

○は全体より10～14%高い数値 ●は全体より10～14%低い数値

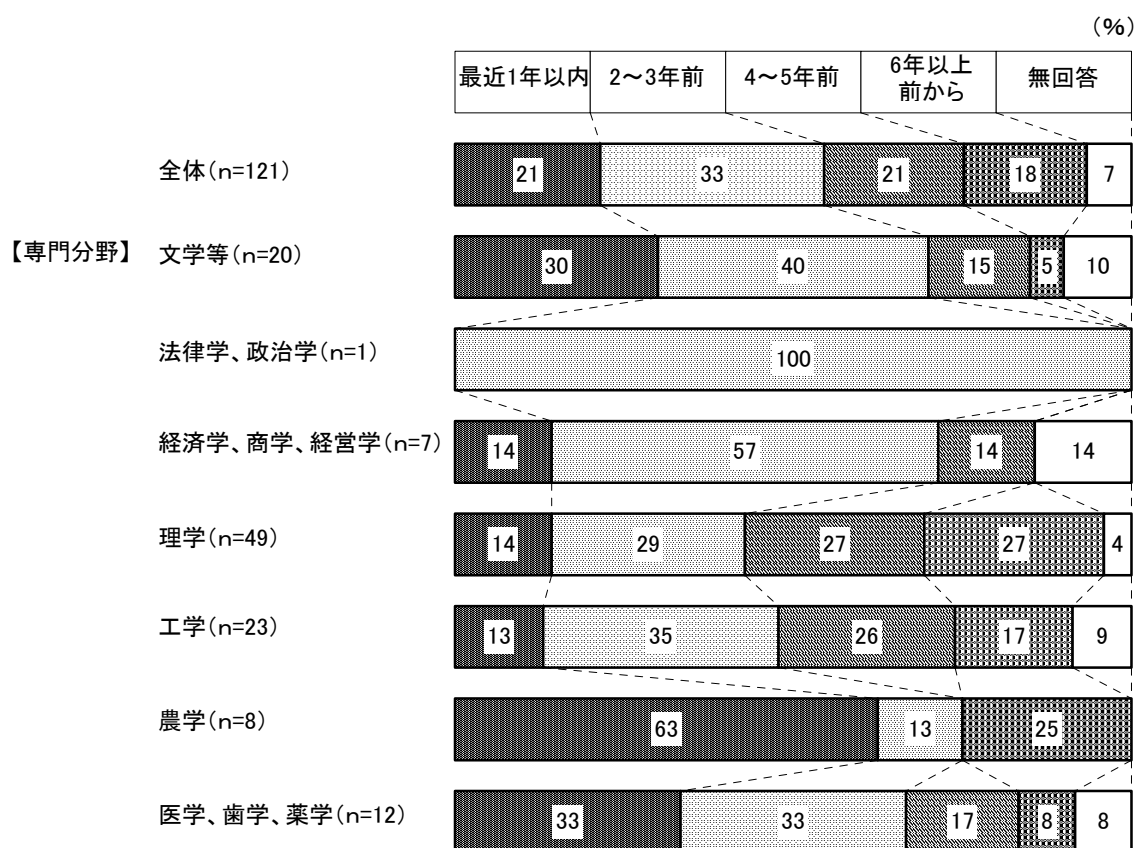
△は全体より5～9%高い数値 ▼は全体より5～9%低い数値

1 1 専門分野別セルフ・アーカイビングの時期

- 専門分野別にみると、理学や工学では「4～5年前」と「6年以上前から」を合わせると50%前後となっている。

設問 23、24 は設問 22 と 22-1 の A～C について、いずれかに 1 回以上デポジットしたことがあると回答された方がお答えください。

設問 23 何年前からセルフ・アーカイビングを行っていますか。(1 つだけ○印)



資 料 編

研究活動及びオープンアクセスに関する調査（調査ご協力のお願い）	i
研究活動及びオープンアクセスに関する調査票.....	1
調査グループ等.....	9

研究活動とオープン・アクセスに関する調査

調査ご協力をお願い

皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

1990年代において、わが国の大学は、海外学術雑誌価格の高騰と大学図書館での購読雑誌数の減少という事態に直面し、また、電子ジャーナルの登場とその急速な普及によって学術的な情報流通の様態が大きく変化いたしました。このような事態は、わが国特有のものではなく、先進国における高等教育、学術研究に対して大きな影響を与えています。

これに应运、学術コミュニケーションを変革し新しい学術情報の発信・流通のモデルを構築しようというさまざまな試みがなされており、とくに、インターネットの特性を活かして、学術情報を無料で利用できる仕組みを作るという「オープン・アクセス」の運動が展開しております。世界の大学図書館はこの運動の重要な推進者であり、日本の国立大学図書館もその一翼を担うことが期待されています。

また、国立大学図書館協会は、国立情報学研究所が実施する国際学術情報流通基盤整備事業（学術情報流通の国際的基盤の改善に積極的に寄与し、わが国の学術研究の成果の一層の普及を図ることを目的とする）に協力するとともに、各国立大学法人で生産される学術研究成果の蓄積・発信の促進に向けた活動を開始し、そのための一つの方策として、「機関リポジトリ」の実現に取り組んでいます。「機関リポジトリ」が上述の「オープン・アクセス」に寄与することまた期待されていることです。

しかしながら、学術情報の生産者かつ利用者であり、かつ、大学運営に重大な責任を持たれる大学教員・研究者の方々との共同作業なくしては、このような試みの成功はおぼつきません。大学教員・研究者の皆様がこれらの問題についてお持ちの認識を共有することが重要であると考えます。

本調査は、国立大学図書館協会と国立情報学研究所が共同して実施するもので、国立大学法人に所属する研究者の方々の研究活動の一環としての研究情報の入手状況、論文の投稿の現状、及びオープン・アクセスに関する知識、経験や考えをお伺いし、国立大学図書館が今後機関リポジトリ構築の取組を進めていく上での基礎資料を得るために実施するものです。同様の趣旨に基づく調査は欧米で先行して実施されており、本調査の結果に基づき日本及び欧米との比較が可能となることも期待されています。

参考：欧米での調査報告

1. Swan, Alma and Brown, Sheridan (2004) Report of the JISC/OSI open access journal authors survey. (http://www.jisc.ac.uk/uploaded_documents/JISCOAreport1.pdf)
2. Swan, Alma and Brown, Sheridan (2005) Open Access self-archiving: an author study, May 2005. (<http://cogprints.org/4385/01/jisc2.pdf>)

あなた様を対象者として選ばせていただいたのは、無作為抽出によるもので他意はございません。なお、調査はすべての国立大学法人から 2,000 名の方を対象として選ばせていただきました。

ご多用中誠に恐縮ですが、調査の趣旨をお汲み取りの上、是非アンケートにご協力賜りますようお願い申し上げます。

なお、アンケートの実施及び分析は（株）アルゴに委託しておりますので、当調査へのお問い合わせなどは下記までお願いいたします。当調査は無記名で実施し、分析も統計数字としてのみ行いますので、是非率直なご意見をお寄せいただきますようお願い申し上げます。

2005年12月

国立大学図書館協会国際学術コミュニケーション委員長
土 屋 俊

【ご記入にあたってのお願い】

- ・回答は、あてはまる項目を選び、その番号を○で囲むものと、文字を記入するものがあります。
- ・質問により、回答の○の数は「1つだけ」、「あてはまるものすべて」と質問ごとに指示されています。
- ・自分の答えが選択肢の中にない場合は、「その他（ ）」を選び、（ ）内にその内容を具体的に記入してください。
- ・一部の方だけにお答えいただく質問もありますが、その場合は矢印で示したり、説明文がありますので、それに従ってお答えください。
- ・回答は12月15日（水）までに、同封の封筒に入れ、投函して下さい。
- ・本調査に関するお問い合わせやご不明な点がございましたら、下記担当者までお問い合わせ下さい。

株式会社アルゴ（調査実施機関）

〒169-0051

東京都新宿区西早稲田 1-11-6 ブライTONビル3階

電話：03-5292-0852（平日 10：00～18：00）

担当：菊名、^{さいか}雑賀

設問 5 インターネットで研究論文や参考文献を検索するとき、どのような WWW 検索エンジン（無料）を使用しますか。（あてはまるものすべてに○印）

- 1** Google **2** Google Scholar **3** PubMed **4** SCIRUS
5 その他の検索エンジン [具体的に: _____]
6 このような情報には検索エンジンは使わない

設問 6 研究のための情報収集に、オンライン書誌データベースや電子ジャーナルはどのくらいの頻度で使いますか。（1 つだけ○印）

- 1** ほぼ毎日 **2** 週に 1 回以上 **3** 月に 1 回以上
4 年に数回程度 **5** 使わない

設問 7 研究成果を投稿・発表する際の動機には、次のような項目があげられますが、あなたにとってこれらの動機はどの程度あてはまりますか。A～E の項目についてそれぞれお答えください。

	かなり あてはまる	まあ あてはまる	どちらとも いえない	あまりあて はまらない	ほとんど あてはまら ない
A 研究成果を広く知らせ るため	1	2	3	4	5
B 研究業績を伸ばすため	1	2	3	4	5
C 研究分野における地位 向上のため	1	2	3	4	5
D 助成金を獲得する可能 性を増やすため	1	2	3	4	5
E 直接的な報酬のため	1	2	3	4	5

設問 8 あなたは、毎年およそ何本の論文を投稿・発表しますか。

本

設問 9 最近 3 年の論文の本数を投稿・発表先とその際の記述言語別にお答えください。

- A 国内の雑誌に和文で [_____] 本
B 国内の雑誌に欧文で [_____] 本
C 海外の雑誌に欧文で [_____] 本
D 海外の雑誌に和文で [_____] 本

設問 9-1 では、最近 3 年に何冊の著書を上梓しましたか。

冊

設問 10 自分の論文を電子的に保存する場合、どのような形式でデータを保存しますか。（あてはまるものすべてに○印）

- 1** PDF **2** HTML **3** テキスト **4** Tex、LaTex
5 MS Word **6** 一太郎 **7** 専用ワープロ
8 その他 [具体的に: _____]

Ⅲ オープンアクセスについて伺います。

設問 11 あなたはオープンアクセスの概念を以前からご存知でしたか。(1つだけ○印)

- 1 はい
- 2 いいえ

オープンアクセスとは、研究成果をオンラインで誰もが無料で利用できるようにしようという考え方であり、欧米を中心に、研究者が、自身の研究成果をできるだけ広く公開し、また他の研究者の研究成果へ障壁なくアクセスしたいという要求から起こった考え方です。

オープンアクセスを可能とする方法として、(1)オープンアクセスジャーナルへの投稿、(2)研究者自身によるセルフ・アーカイビングの2つがあると言われています。

オープンアクセスジャーナルとは、掲載された記事にオンラインで、誰もが無料でアクセスできるピアレビュー(同一専門分野の研究者による査読)済みの雑誌です。現在、オープンアクセスジャーナル出版のビジネスモデルでは、著者あるいは所属機関からの支払により出版経費をまかなうことが多く行われています。

セルフ・アーカイビングとは、著者が自身の論文等を、個人のウェブページやリポジトリ(保存・寄託し公開するための保存庫の機能をもつサーバ)で無料公開することです。リポジトリには、主題別のリポジトリあるいは機関(大学/図書館)が運営する機関リポジトリがあります。

設問 12 最近1年以内に、所属の機関、図書館がオープンアクセス(オープンアクセスジャーナル、セルフ・アーカイビング、機関リポジトリ等)について、あなたの注意を喚起したことはありますか。(1つだけ○印)

- 1 はい(具体的にあげてください。例:説明会の開催、論文の提供要請等)
[]
- 2 いいえ

設問 13 あなたはオープンアクセスジャーナルを刊行している団体または刊行されている雑誌のタイトルをご存知ですか。(1つだけ○印)

- 1 はい
団体名または雑誌タイトルを1つで結構ですのでお書きください

団 体 名	
雑誌タイトル	

- 2 いいえ

設問 14 最近3年の間に、オープンアクセスジャーナルに原稿を投稿、あるいは論文を発表したことがありますか。(1つだけ○印)

- 1 はい
- 2 いいえ
- 3 わからない

設問 15 今後3年以内にオープンアクセスジャーナルに論文を少なくとも1本は発表する可能性はありますか。(1つだけ○印)

- 1 はい【→設問15-1へ】
- 2 いいえ【→設問15-2へ】
- 3 わからない【→設問15-1及び15-2へ】

設問 15-1 (設問 15 で「はい」または「わからない」と答えた方に) オープンアクセス (OA) ジャーナルでの研究成果の発表をしてもよいと思った際に考慮した理由をお聞かせ下さい。(あてはまるものすべてに○印)

- 1 すべての読者に自由なアクセスを提供するという原則があるから
- 2 読者層が購読ベースの雑誌より大きいと思うから
- 3 OA ジャーナルは他のタイプの雑誌より早く出版されると思うから
- 4 OA ジャーナルは私の専門分野での格式が高いと思うから
- 5 論文がより多く引用されると思うから
- 6 OA ジャーナルは私の専門分野で高いインパクトを持っていると思うから
- 7 編集者や編集局が魅力的であるから
- 8 所属機関が雑誌を購入する経費が心配であるから
- 9 商業出版社で出版することに反対だから
- 10 その他 [具体的に:]

設問 15-2 (設問 15 で「いいえ」または「わからない」と答えた方に) オープンアクセス (OA) ジャーナルでの研究成果の発表をしたくない理由として思ったことをお聞かせ下さい。(あてはまるものすべてに○印)

- 1 専門分野における OA ジャーナルについてよく知らないので論文を投稿するほどの確信がもてないから
- 2 発表すべき OA ジャーナルを特定できないから
- 3 専門分野では OA ジャーナルの格式が低いと思うから
- 4 専門分野では OA ジャーナルのインパクトが低いと思うから
- 5 OA ジャーナルに発表するための投稿料を支払う資金を見つけられないから
- 6 OA ジャーナルに発表するための投稿料を支払うことに原則的に反対だから
- 7 読者層が購読ベースの雑誌より小さいと思うから
- 8 常に同じ雑誌に論文を発表しており、この方法に満足しているから
- 9 OA ジャーナルに発表した論文のアーカイビングについて不安であるから
- 10 専門分野の OA ジャーナルではピアレビューが十分に行われていないと思うから
- 11 専門分野の OA ジャーナルは従来の雑誌にくらべて出版に時間がかかると思うから
- 12 その他 [具体的に:]

設問 16 オープンアクセスジャーナル出版モデルは一般に研究成果を発表するために著者あるいは所属機関がその出版経費を負担します。現在海外のオープンアクセス出版社は 500 ドルから 1,500 ドルを経費として求めています。実際の出版経費はもっと高いと推測されます。出版社の中には出版経費をまかなうために 3,500 ドル以上請求するところもあるようです。論文が通常の方法で受理されると仮定して、選択した雑誌に論文を発表するためにあなたは(資金提供者の代理として)どのくらいの額を支払う用意がありますか(\$1=110 円換算)。

- 1 払わない [理由:]
- 2 500 ドル (55,000 円) 未満
- 3 500 ドル (55,000 円) ~ 1,000 ドル (110,000 円) 未満
- 4 1,000 ドル (110,000 円) ~ 1,500 ドル 未満 (165,000 円) 未満
- 5 1,500 ドル (165,000 円) ~ 2,500 ドル 未満 (275,000 円) 未満
- 6 2,500 ドル (275,000 円) ~ 3,500 ドル 未満 (385,000 円) 未満
- 7 3,500 ドル (385,000 円) 以上
- 8 わからない

設問 17 出版経費を支払うための資金はどこが負担すべきだと考えますか。(あてはまるものすべてに○印)

- 1 研究助成金
- 2 部局の予算
- 3 図書館あるいは機関の予算
- 4 その他〔具体的に：]

設問 18 研究助成金の契約条件によりその研究成果をオープンアクセス（OA）ジャーナルで発表することを求められた場合、あなたはどうかされますか。（1 つだけ○印）

- 1 喜んでそのような条件に従う
- 2 嫌々であるがそのような条件に従う
- 3 そのような条件は受入れられないので、別の財源をさがす
- 4 わからない

設問 19 オープンアクセス（OA）ジャーナルに発表された論文のアーカイビングには誰が責任を持つべきだと思いますか。（あてはまるものすべてに○印）

- 1 オープンアクセスジャーナルの出版社
- 2 学協会
- 3 政府
- 4 国立図書館
- 5 大学図書館
- 6 著者自身
- 7 その他〔具体的に：]

設問 20 オープンアクセス出版の普及により既存の学術出版システムが崩壊するかもしれないという意見がありますが、あなたはどのように思われますか。（1 つだけ○印）

- 1 崩壊する可能性が高いと思う
- 2 崩壊する可能性は低いと思う
- 3 わからない

設問 20-1 そのように思われる理由をお聞かせ下さい。

設問 20-2 同じく、学協会による出版事業が崩壊するかもしれないという意見についてはどのように思われますか。（1 つだけ○印）

- 1 崩壊する可能性が高いと思う
- 2 崩壊する可能性は低いと思う
- 3 わからない

設問 20-3 そのように思われる理由をお聞かせ下さい。

設問 21 学術雑誌の次の役割を維持することは、著者であるあなたにとってどの程度重要ですか。A～Gの項目についてそれぞれお答えください。

	非常に重要	重要	どちらとも いえない	それほど 重要でない	まったく 重要でない
A ピアレビュー	1	2	3	4	5
B 一定の品質を有する論文を一覧できるように集めること	1	2	3	4	5
C 一定の品質を維持するための論文の取捨選択	1	2	3	4	5
D 論文の内容の校正及び改良	1	2	3	4	5
E 論文のレイアウト、言葉遣いの統一	1	2	3	4	5
F 論文中の引用文献の確認とそれらのインターネット上の情報へのリンクの追加	1	2	3	4	5
G 雑誌の可視性(visibility)を最大にする経営努力	1	2	3	4	5

IV セルフ・アーカイビング/リポジトリについて伺います。

設問 22 最近3年で、プレプリント（査読前論文）の論文全文を何回デポジット（保存・寄託）し、公開したことがありますか。

	0回	1回	2～3回	4～5回	6回以上
A 自分のウェブページに	1	2	3	4	5
B 所属部署のウェブあるいは機関リポジトリに	1	2	3	4	5
C 主題リポジトリに	1	2	3	4	5

設問 22-1 では、最近3年で、ポストプリント（査読済み論文）または雑誌等に公開済みの論文全文を何回デポジット（保存・寄託）し、公開したことがありますか。

	0回	1回	2～3回	4～5回	6回以上
A 自分のウェブページに	1	2	3	4	5
B 所属部署のウェブあるいは機関リポジトリに	1	2	3	4	5
C 主題リポジトリに	1	2	3	4	5

設問 28 と 28-1 は下記の説明文を読んでお答えください。

学術雑誌に論文を発表すると、多くの場合、その著作権は学術雑誌出版者に譲渡されますが、著者によるセルフ・アーカイビングを認める出版社や雑誌が増えています。一般にこれらの出版社は Green Publisher と呼ばれ、例えば、Elsevier や Blackwell、Nature が挙げられ、欧米の出版社の約 90% に達していると言われています。

設問 28 雇用者や助成団体が、Green Publisher の出版する雑誌に発表した論文をリポジトリにデポジットすることを要求した場合、どのように思われますか。(1 つだけ○印)

- 1 喜んでデポジットする
- 2 嫌々ではあるがデポジットする
- 3 デポジットしない
- 4 わからない

設問 28-1 デポジットしようとする際に気になる点をお答えください。(あてはまるものすべてに○印)

- 1 著作権の問題が心配
- 2 登録作業が面倒だと思う
- 3 研究成果等は学術雑誌に発表すれば十分だから
- 4 利用者による悪用が心配
- 5 リポジトリに関する情報が不足
- 6 何を登録すれば良いかわからない
- 7 その他 [具体的に :

]

設問 29 よろしければ、ご所属の機関名・部署名をご記入ください。

機関名 []
部署(学部等)名 []

ご協力ありがとうございました

1. 調査グループ

国際学術コミュニケーション委員会委員 (SPARC/JAPAN プロジェクト担当)

主査： 土 屋 俊 (千葉大学附属図書館長)
委員： 木 村 優 (東京外国語大学情報図書館課長)
村 井 しのぶ (一橋大学学術・図書部学術情報課雑誌情報係)
早 瀬 均 (名古屋大学附属図書館事務部長)
甲 斐 重 武 (九州大学附属図書館利用支援課長)

国立情報学研究所

尾 城 孝 一 (開発・事業部コンテンツ課長)
細 川 聖 二 (開発・事業部コンテンツ課コンテンツ企画係長)

国際学術情報流通基盤整備事業運営委員会

永 井 裕 子 (社団法人日本動物学会事務局長)

2. 本報告書の Web 上での公開 URL

国立情報学研究所 国際学術情報流通基盤整備事業 資料集

<http://www.nii.ac.jp/sparc/shiryou/index.html>

調査結果の要約 (和文 : PDF)

http://www.nii.ac.jp/sparc/doc/oa_report_summary_ja.pdf

調査報告書 (和文 : PDF)

http://www.nii.ac.jp/sparc/doc/oa_report_ja.pdf

Executive Summary (English: PDF)

http://www.nii.ac.jp/sparc/doc/oa_report_summary_en.pdf

Survey Report (English: PDF)

http://www.nii.ac.jp/sparc/doc/oa_report_en.pdf

調査票 (和文 : PDF)

http://www.nii.ac.jp/sparc/doc/oa_report_ja.pdf